連載休止　僕たちのカルデア　アスクレピオスと女の病

里見レイ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遂に、リアルの忙しさで弊小説の更新が出来なくなりました。申し訳ございません、暫し休載致します。

（毎月第二・第四土曜日の午後八時四十分に更新致します。

ストックが増えたら、臨時投稿するかもです）

これは、とあるカルデアで起こった日常。

各カルデアで起こるストーリーこそ同じであれ、サーヴァント一人一人はそれぞれ違った生活を刻んでいる。聖杯を貰う者、常にクエストに出ずっぱりの者。はたまた、料理担当や医療担当。特別な別室が与えられる者もいるだろう。

そんなサーヴァント達の甘く、渋く、ほろ苦いエピソードを筆に起こしていく。

今回の主役は、アスクレピオス。医者としての技術と戦闘時の確かなサポート能力からマスターより常日頃好待遇を受ける彼が、ある女たちに悩まされ、巻き込まれ、助け合う記録。

目　次

第一部：軍神と王妃、求める医師の姿とは
昔の日常 ―― 1
ほろ酔いの腐れ縁 ―― 3
孤独な戦士 ―― 5
朝食での事情 ―― 8
受信　訪問　提案 ―― 11
散りばめられた、燃えない火種 ―― 14
燃えない火種　魔術師により着火する ―― 16
喧噪、動揺、困惑 ―― 19
事細かな話と船長の待遇 ―― 22
第一の訪問 ―― 27
料理人、剣士、聖女の思惑 ―― 30
大和撫子の具現化 ―― 33
通達 ―― 35
事情と信頼 ―― 37
明日への道しるべ ―― 40
図書館の少女 ―― 42
後押し、涙、そして……― 46
傾いた針 ―― 50
祝福の朝 ―― 52
皇帝の圧 ―― 54
景虎、最後の逆襲 ―― 57
アスクレピオスの言葉 ―― 60
光・影・闇・救い ―― 63

報告と準備 65
静かに動いた者々 68
ひと時 70
結婚前日の策謀 74
女たちの最後の会話 77
結婚前夜 81
結婚式 84
策謀の手筈は祝い事の中で 87
仲人の再縁 90
変わらぬ日常と温まった会話 92
閑話休題　弊カルデアの概要 96
第二部：竜の魔女、終われない夏の蜃気楼
面倒な訪問者 101
訪問とカレー 104
食堂の木霊 106
試食じゃ話は進まない 108
ホムンクルスと別の地の聖女 110
溢れ出した感情 113
繋がりの食堂 115
時間と決断 118
フランスの森 121
修羅も温い争奪戦 123
介入 128
援軍と潜入 131
仮初の鎮静化 133

蠢く爆薬 137
雪解けと短くなった導火線 141
閑話休題　この作品のモットー？ 143
焦げ臭き爆発前夜 146
真夜中のイレギュラー 149
鎮静後のひと時 152
長い夢 156
手が出た大蛇 160
大蛇への野次馬 164
全てを知る鬼の頭？ 167
情報と準備 170
英雄の殺し技 173
妖気の収束と忍びの笑み 176
お正月特別です。 178
確認した事実と判明した真実 182
大まかな用語（役職・アイテムなど）の解説 185
皇帝の決意 188
皇帝の思い出 191
人物紹介です 195
それぞれのキッカケ 200
仮初の説得、深まる真実 204
始まった裁断 206
重さが増した聞き込み 213

第一部：軍神と王妃、求める医師の姿とは

昔の日常

彼の父、アポロンは様々な人間と愛の物語を残した。しかし、大抵の話はハッピーエンドに終わっていない。そして、アスクレピオスの母コロニスもアポロンの手によりこの世を去った。

では、アスクレピオス本人はどんな恋愛談を残したのか。「一人の女神との間に複数の子を成した」これが事実であり、大した逸話も残っていない。

「僕にとって、彼女は生活を支えてくれた恩人だよ。ただ、これといった思い出がある訳でもない。医学の研究に勤しむ僕とそれを補佐してくれた彼女、それが全てなんだからな」

薬を調合しながらマスターにそう語る彼の背中はいつもと何の変わりもなかった。

「ふーん。けどさあ、今ここにその奥さんはいないじゃん？　支えてくれる人とか欲しくならないの？」

座っている椅子の背もたれに胸板を預け、マスターは素朴に疑問をぶつけた。

「いや、あの頃より医療設備は整っているし君と言うパトロンはよくサポートしてくれる。研究の時間さえくれれば何の文句もないな」

「そんなもんなのかなあ。イアソン様と若い若奥様のやり取りを見てたら『サーヴァントだってカルデアで恋に悩む』ってことがあると思って彼らに身近な君に聞いてみたんだけどね」

退屈そうに反り返るマスター。愛だの恋だの知らずに任務に専念している手前、この少年は話を聞けずに残念がっているようだ。

「じゃ、また来るよ。お医者様もたまには息抜きに遊んでもいいんだからね」

軽やかなステップで医務室を後にするマスター（男）。彼にとっては恋愛だろうが戦闘だろうが英霊たちの話は何でも興味があるジャンルである。

「‥‥‥ まあ、彼が聞きたいのは僕が『経験した』事だ。今しがた『巻き込まれている』ことは逆に不安にさせる事しかしないだろうな」
重い溜息が誰もいない医務室に響き渡る。
そして、近づいて来る鎧の響きを付随した足音。
「やれやれ。今日も来るのかね、彼女は」
多少騒がれても支障がないように薬品の整理をするアスクレピオス。
彼は、恋というものに興味がない。しかし、向こうから自然と持ち込んでくることはこの男女多きカルデアではまあまあの確率で発生するのだ。その矛先が、マスターでなくとも。
「やあ！ ご機嫌いかがかな医師殿。今日も酒のつまみがてら訳の分からない健康の説教でも聞こうじゃあありませんか！」
そして、扉が開いて一人の女が喧しさ全開で入ってきた。
右手に槍、ではなく焼酎瓶。左手におちょこを持つこちらの大酒のみ、越後の軍神、長尾景虎である。

ほろ酔いの腐れ縁

医務室とは、本来患者が来るところだ。だが、稀に「医者と話をする」ことを目当てに訪れる場合もある。

しかしながら、その『稀』が『日常』と化しているのがこのカルデアだ。

「でね、今回新しくいらした綱殿なんですが。マスター殿から強化して貰っていない上に対人は専門ではないにも関わらず相当な腕だったんですよ。恐らく剣技で言ったらかなり高い領域でしょうなあ！」

「ランスロット卿と比べるとどうなんだ？」

今日の研究結果を記録しながら、アスクレピオスは流し気味に質問を投げかける。

「汎用性から考えれば間違いなくランスロット卿でしょう。ただしかし、綱殿は将来的に活躍することもあるでしょう。何せ、彼はまだ本気を出していないにも関わらず多くの人から注目されていますからね」

もう焼酎瓶の酒はなくなったのか、医務室の訪問者である長尾景虎の喋りのペースが上がりつつある。

「ったく。僕は医者ではあるが剣士でもないし戦士でもない。この様な戦闘に特化した話はもっと専門的な英霊にするべきではないのかね？　正直、僕はマスター以上の受け答えは出来ないよ」

この言葉は謙遜や忌避という訳ではなく、あくまで効率や生産性が悪いのではないかと感じてしまうからだ。

「いえいえ、私は求めているのは討論相手ではなく聞き手なので。私たちの仲じゃあありませんか、もうしばらく話に付き合ってくださいまし」

そのまま酒のおかわりをナチュラルに要求する景虎と除菌用アルコールならあると返すアスクレピオス。

「何てったって、私にはあまり身近な英霊がいませんからねえ。ぐだぐだ関係者なんてジェットさんとカッツ君くらいですし。最近はページ周回にも呼ばれなくなりましたからねえ」

「僕も昔と比べれば大分出番が減ったね。ま、今でも厄介なクエストには聖杯組と一緒に駆り出されることが多いけども」
　このカルデアの創成期と比べれば、二人の出番は他の鯖の活躍により減った。しかし、それでも彼らはまだマスターに目をかけられている。実際、景虎はトレーニングルームの副監督官であり、アスクレピオスは医療長兼研究部化学主任だ。
「全く、貴殿に治療して貰っていた頃が懐かしいですな。あの頃の医師殿はそれはまあ頑固で警戒心が強くて毒舌で強引で捻くれていて……」
「やめろ、僕はこのカルデアでの昔話に関してあまりいい思い出がない」
　飲んだくれの懐古話は時に素面の人の傷を抉る。アスクレピオスは咄嗟に無駄なストレスを排除したのだ。
「ま、私にとってはいい思い出も多いんですけどね。貴殿に出会えたからこそ、今こうして裏方としての充実した生活を送ることが出来ているのですから」
　そして、そのまま軽い千鳥足で医務室の外へと移動し始める。
「こう見えて、私は感謝しているのですよ。貴殿は二年近く私の荒んだ心を治療してくださっているのですから」
　振り向きざまに見せた景虎の笑顔。これは酔い故の柔らかさなのか、はたまた稀に見る本心なのか。
「ふう、困った女性だ」
　もうすぐカルデアの就寝時刻。彼は酒を飲むことはないが今夜は変な気分で眠りにつきそうであった。

孤独な戦士

「いやー、やはり相性というものは覆せないもんですねえ」
　医務室に立ち寄った景虎。相性不利のセイバーから喰らったクリティカルにより酷い怪我である。
　傷だらけの彼女を見て、アスクレピオスは何故わざわざマスターがセイバーを含むクエストに参加させたのか疑問を持った。
「まあ、うちもまだ戦闘員が揃っていないんですよ。大将以外の敵に弓兵がいたもんでねえ。狂戦士や盾役がいなかったので奴らの処理を私が担っていたのですが、私が大将から真っ先に狙われたもんで……」
　それに対し景虎、苦笑いなのか愛想笑いなのかよく分からない笑顔を振りまき淡々と状況を説明する。
「ふむ。相性不利クラスのクリティカルだとここまで酷い傷ができる物なのか。お前をセイバーだらけのクエストに投げ込んだら一体どのような傷を負って帰って来るのか、興味があるな」
　事情を聴きつつ、彼の医療的好奇心は徐々に高まっていった。何せ、ここには様々な戦闘員がいる。その分様々な治療をする事となり、それに取り組むことでアスクレピオス自身の技術向上へとなるのだ。
「そもそもだ。撤退したことで霊基が概ね収束したとはいえ、この怪我でよく中央管制室からここまで歩いてこれたものだ。他のサーヴァント達は大抵誰かに支えてもらいながら来ているぞ」
　そして、例としてオジマンディアスとアーラシュ、ネロ・クラウディウスとロビンフットを挙げた。互いに出撃するクエストが一致しないことが多いため、帰還時に面倒を見ることが多いとのこと。
「ふむふむ。確かに仲の良いサーヴァントがいればこの様に医務室へ行くのが理想的でしょう。しかしながら、私には仲の良いサーヴァントというものが一切おりませんので。むしろ、一人でいる事をどこ吹く風の私に対しやや腫物を扱うかのような態度なんですよ」
　その理解しがたい笑顔を崩さずに事情を話し続ける景虎。自虐な

のか皮肉なのか、はたまた一種の諦めなのか。恐らくマスターでも読み取ることは出来まい。
「なるほどな。それなら一人で来るのにも納得がいく。ただ、傷は早いうちに見せてもらった方が症状の分析もしやすいというもの。いつも他のサーヴァントの治療を終えてから来るもんだからどうも惜しい。君はこのカルデアでは稀有な大怪我を持ち帰って来る可能性のある人材だ。こうなったら僕が管制室で道具を持ち込んだ状態で君を治療してやろう」
　目をギラギラさせてアスクレピオスは出迎えを申し入れる。それだけ、彼女の傷は酷かったのだ。
「そうですか。なら、お願いしましょうかね。私からしても、傷を早く治して一杯やりたいですからねえ」
　にへらと笑って景虎は快諾。
　そして、一言。
『今の貴方にはアルゴノーツの面々がいます。しかし、今でも私はほぼ一人。私が貴方に依存している事、理解しているのならもう少し私を受け入れてくれませんかねえ……』
　直後、彼女の眼は暗雲の渦を形成していた。
　そして、アスクレピオスは思った。
「これは、昔の夢……」

　ベッドから起き上がり己の心拍数を確認。異状はなかった。汗もかいていないし息も荒くない。
　手元の時計は彼の起床時刻七分前を示しており、いつものように自前のパソコンには一通のメールがあった。
「まったく、あの女は孤独なくせに僕を仲間だと思っているのか？分からない奴だ」
　慣れた手つきでメールを開封。いつもの人からの朝食の知らせだ。
「……行くか」
　身だしなみを整えるのもそこそこに、彼は共同キッチンへ向かう。

今日もまた、彼のややこしい一日が始まった。

朝食での事情

医師、アスクレピオスの朝は周りより一足早い朝食から始まる。理由は単純、彼は静かな朝食を望んでいるから。そして、手の込んだ朝食を不要としていないからだ。

かと言っても、朝が早いサーヴァントは彼だけではなかった。朝早くからトレーニングの予約をしている者、研究やら何やらで徹夜してそのまま朝食を食べて来た者。他にも諸々の理由で早めの者もいるが、安定して朝食が前倒しなのはアスクレピオスくらいだが。

「……おはよう。いつもすまないな」

キッチンで彼女の後ろ髪を確認し、いつもの席に腰を掛けるアスクレピオス。シリアル、牛乳、フルーツが綺麗に配置されている。変わらぬ気配りに感謝をし、食事を開始する。

「おはよう。今日はいつもより若干早いかしら？」

大人数分の仕込みが終わったのか、休憩がてらにアスクレピオスに声をかけ来る女性。このカルデアの厨房の総責任者、ブーディカだ。

「昔の夢を見てな。多くは話す気になれないがとても悩ましい夢で半ば強制的に目が覚めたのかもしれないな」

シリアルを食べる手を緩めることもなく、彼はそのまま受け答えする。

「そう、私はいつでも愚痴とか聞くからね。不満やストレスは溜めない方がいいし、あると夢に悪影響があるかもってキミ自身も言っていたじゃない」

「そうだな。ただ、単純な事だよ。長尾景虎が昨日も医務室でダラダラしていただけさ。で、去り際になんか頭にこびりつく言葉を残しって行ってな」

牛乳を一口飲み、アスクレピオスは淡々と話した。シリアルは食べ終わったので、そのままフルーツに手を出す。

「あら、景虎さんが貴方をこんなに困らせるようなことを？　意外な気がするわね」

「……感謝しているって言われた。そして、夢の中でではあるが僕

に依存しているとも。夢は僕の勝手な印象だけかもしれないけど、日々の言動を見ていると何だかよく分からない焦燥感に駆られるんだ。お前はこの原因が分かるか、ブーディカ？」
　朝食を終え、食器を重ねるアスクレピオス。ついでにその時の彼女の表情なども話した。
「そういうことなのね。まあ、貴方たちは何かと変な縁があるものね。残念だけど、私は人間関係まで口を出せそうにないわ。しかも、私は景虎さんのそんな顔しているの見たことないし」
　食器を受け取りながらブーディカは答える。彼女もまた古くからカルデアにいるので大方のサーヴァントについては把握している。しかし、そんな彼女でも景虎の奇妙な笑顔は分からないようだ。
「無理もない。お前に解決策は聞いていないからな。ただ、少々すっきりした。礼を言うよ」
　話をしている時は少々曇っていた彼の顔も、ほんの少し明るくなった。そのまま医務室へ向かおうとする。
「……」
　しかし、扉近くで立ち止まるアスクレピオス。何かを思いついた様子だ。
「ブーディカ、お前は僕が一対一で話す人間の中では五本指の中に入る。しかし、他の面々と違うのは僕の話を唯一聞いて貰っているという事だ」
　やり場のない右手で頭をかき、また小難しそうな表情をするアスクレピオス。
「もし、景虎が話を聞いて貰う事に安心感と信頼を覚えているとしたら。僕はお前に対して同じような感謝の心を持っているのかもしれない」
「そんな改まったお礼なんていらないよ。私は、君の助けになれればそれでいいんだからさ」
「疑問は解決しない時が済まない性分なのでね。おかげであの女に答え合わせをすることが出来る。毎日のように突撃してくるのだから、悩みの種はない方がいいからな。そのヒントとなってくれたのは、今

まで以上のお礼ものだな」
　そうして、今度医務室に来たら何か協力すると言った後。アスクレピオスは午前業務に取り掛かるべくブーディカとの会話を終了させた。

「……その言葉、私だって持っているんだからね。私にとっても、貴方は心の助けなんだから」
　アスクレピオスが見えなくなった後、壁に寄り掛かってブーディカはこう独り言を溢した。長い間カルデアの厨房を支えてきた彼女にも、過去と現在の特殊な人間関係があるという事なのだろう。

受信　訪問　提案

さて、医務室に腰を掛けるアスクレピオス。カルデア全体に通知されているスケジュールにもう一度目を通し、本日の業務の順番を考える。

（現在はイベントがなく、クエストは概ねページ周回の為の曼荼羅出陣か。あのホムンクルスはやはりメインメンバーに選出されている。最近の出撃頻度を考えるとそろそろストレスが溜まって来る頃合いだろう。となると、少々メンタルカウンセリングの準備をしておかなければな……）

本棚から精神医療の書籍を取り出すアスクレピオス。ここには、近現代の心理学者によるストレスへの対処療法が書かれている。彼本来の専門分野ではない為、手順書等が若干必要になるのだ。

『速達メッセージを受信しました。送信元、トレーニングルームです』

しかし、本を読み込む時間はなかった。ぐだ男がダ・ヴィンチに頼んで作って貰った、通知機能と自動表示機能の搭載された特別なメールがやって来たからだ。彼には急患などの緊急メッセージが良く届くので、この機能を医務室用のパソコンにつけて貰っている。

「！　不測の怪我でも起きたのか!?　どんな傷なのか早く見せろ!!」

アスクレピオスは移動用医療セットを即座に抱え、メッセージに目を通す。が、新たな症状への期待は一瞬にして崩れ去った。

「……　長尾景虎？　今すぐ会いたい？　何故こんなプライベート全開の内容を最重要メールで送りつけた!?」

普段ならパソコン画面を叩く勢いで閉じる彼だったが、本日は少々事情が違う。

「時間は、まだあるな。まあ、スケジュールは前倒しにしても問題ないな」

今日は朝から色々と盛り上がるな。そんな直感ワードが脳裏によぎったこの医師だった。

「何の用だ？　流石のお前でも、こんな公私混合なメールを送って来

るとは予想外だったぞ」
　呆れた口調のアスクレピオス。トレーニングルームに入るのは実に一年ぶりに匹敵する。
「はて、私はそんなに真面目ではないですからねえ。私もここに来て結構長い身ですし。貴方もお暇だったでしょうし良いではありませんか」
　トレーニングルームでも酒盛り（しかも医務室に来た時の三倍）をしている景虎。もしや、昨日は自分の部屋でなくトレーニングルームで寝ていたのではないかと疑うレベルである。
「……　用件は何だ？」
「実を申し上げますと、恥ずかしながら怖い夢を見てしまいましてね」
「は？」
　このざる酒乱が怖い夢を見た如きで自分を呼ぶことがあるのか。ましてや今は朝、あまりにも急な上に常識外れなのではないだろうか。アスクレピオスの混乱は増すばかり。
「貴殿に、嫌われる夢を見てしまいました。私の我儘に堪忍袋の緒が切れてしまったようで。まあ、その我儘っていうのが相当貴殿にとって驚く内容だったのは確かです。だから、何かと自己消化できず動くこともできず貴方を直接お呼びした訳ですよ」
　理屈があるのかないのか分からない事情を話し、結局のところ「顔を見たい」というだけの行為だったのかもしれない。景虎の言動に前々から疑問のあったアスクレピオスだが、先ほどの食堂で概ね理解した。
「はあ。僕はお前を嫌うようなことはないと思うぞ。お前が僕に対し安心感と信頼を持っているが故のハチャメチャな行為だという事は分かっているのだからな」
　話が前に進まなそうだったので、ここでアスクレピオスは自分の目的を果たす。自身の夢の話は、語る必要はないだろう。
「！　……　ま、まあ。そうですね。私は貴殿に全幅の信頼を置いてますから。ですので、それを分かった上で一つお願いを聞いて頂きたくて」

ニマっと笑顔を見せつける景虎。何かを企んでいるようにも見える。

「今度、マスターに許可を取ってレイシフトしませんか？　貴殿も別の場所の薬草とかの採取に行きたいでしょう。その護衛として私が同行するのですよ」

彼女の顔は、あれだけ？むんでもちっとも赤くなっていない。それどころか、その目は完全に戦闘状態の時の戦士の表情となっていた。

鋭い眼光で、何か裏がありそうな提案をする景虎をじっと見つめ返すアスクレピオス。その答えは……

散りばめられた、燃えない火種

「構わない。丁度、既存の素材では研究が若干行き詰って来たからな。お前も、最近実際の戦闘がなくて退屈していたのだろう？」
　込められた意味を知ってか知らぬか、アスクレピオスの答えは了承だった。
　その答えを聞き、長尾景虎の笑みは最高潮に達する。
「貴殿は最高ですね。では、昼頃にマスターにお伺いを立てに行きましょう。お礼と言ってはないですが、最近私が図書館で見つけたお勧めの本をお渡ししましょう。図書館への返却は私が行いますので、まあ読み終わったら私に教えてく出せれば構いませんので。ゆったり読んでくださいませ」
　どっから取り出したのか、けっこうぶ厚めの本をひょいと投げる。ゆったり柔らかい投げ方だったので、本の重さの割に易々とキャッチ出来た。
「……　まあ、本を読む予定はあったがな。何週間かはかかるかもしれんぞ。お前が毎日医務室で僕の自由時間を占拠している限りな」
「ま、気が向いたらぱーと見るだけでも良いので」
「……　また後でな」
　そう言って、アスクレピオスはトレーニングルームを後にするのだった。

「そうか。お前自身は大してストレスを感じていないと」
「ああ。むしろ、キャスターアルトリアが混乱しているところを目にする。彼女は今までは毎度のように出撃していたのにも関わらず、夢火の在庫の都合で絆レベル９になってから休暇状態。むしろ、自分はマスターに捨てられたかもしれないという不安を抱えているようなんだ」
　午前中、予想通りジークがやって来た。しかし、困っているのは彼本人ではなく突如スタメンを外されたキャストリアの方だという。
「ふむ。しかし、彼女は僕に対して警戒心が強いかもしれないからな

あ。今までも僕ではなくあの錬金術師が彼女の面倒を見てきた訳だし、今から僕がカウンセリングをやっても不安を助長しかねない」
難しげな顔になるアスクレピオス。他人の人間関係に関しては、彼は人一倍に悩みがちだ。
「しかし、パラケルススは絆礼装を装備させ夢火を与えられて周回に参加するようになった。なまじ今まで関わりがあった分、今の彼自身に誹がなくとも逆効果にもなってしまうかもしれないぞ」
ジークは今でも周回メンバーとして前線に出ている機会が多いだけあって、クエスト多忙組の事情には詳しい。もはやこれは、ジークのカウンセリングではなくジークと行うカウンセリングとなっている。
「……こうなったら、ジーク。君に彼女のカウンセリングをやってもらおう」
そして数秒後、アスクレピオスは解決策を導き出した。
「午後にもう一回医務室に立ち寄ってくれないだろうか？　それまでに、メンタルカウンセリングの本を何冊か揃えておくよ。ただ、一応僕なりにメモも渡しておきたいから少し時間がかかってしまうかもしれない」
「了解した。恐らくだが、昼の出撃が終わってから行けるはずだ。本は置いておいてくれれば勝手に持っていくから、わざわざスケジュールを合わせなくて構わない」
医師の提案をホムンクルスはあっさりと受け入れた。互いの能力を信頼しているからっ出来る芸当なのだろう。
しかし、何の滞りもなく進むはずだったこの話。この後起きる小さな珍事からとんでもない方面に事件を巻き起こす事になるとは二人も、そして当事者たちも考える余地がなかった……

燃えない火種　魔術師により着火する

「さてと、メモはこんなもんだろう。彼が字を読めるようになったのは本当に感謝しかないな」

合計三冊の「精神医療」に関する本とある程度の専門用語を別個で解説するためのメモを用意し終えたアスクレピオス。

ジークにキャストリアのカウンセリングを頼むという事に不安は多少ある。しかし、彼はカルデアに来てから識字を始め数多くの教養を身に着けた。今回のカウンセリングも彼の大きな成長に繋がるという期待があるからこその選択である。

「ふむ。ジークが来るには少し時間がありそうだな。他の研究や書類作成をするには余裕がなさそうだ……　あ、そういえば」

少し横に置いてある景虎から借りた本へおもむろに手を出す。そして、その本を己の膝元に置いたその時だった。

「アスクレピオス！　ちょっとヘルプいいかしら？　今技術部で新研究の実験をしていたのだけど、爆発事故が起こってしまったの。だから、緊急で治療が必要になったわ」

突如として医務室に突撃してきたのはメディア。恐らく、彼女は魔術関連で新研究に関わっていたのだろう。

「ダ・ヴィンチと孔明が若干の火傷を負ってしまったのよ。あと、爆発に伴い軽い毒ガスが出てしまっている可能性もあるわ。頼める？」

「分かった。すぐに向かう」

手元の本を机の上に置き、治療用セット一式その他を持ち立ち上がるアスクレピオス。今度こそ医療の実践仕事であるので、少々だが興奮もしているのだ。

唯一の彼の過ちは、精神医療関係の本も机の上に置いてあったことだろう。しかし、カルデアの被害を考慮すると当たり前ではあるのだが。

急ぎ足で実験現場へと向かうアスクレピオス。荷物が若干多いので、保冷材はメディアに持たせている。

「ん？　ナーサリー・ライム？」

その途中、二人は童話の少女とすれ違った。彼女の目的地が医務室だと知る由もなく。

「さっき忙しそうにしてたから勝手にお邪魔するわ。ホムンクルスさんの代理なの。彼が借りたいお友達はどれかしら？」

入って早々ぐるりと医務室内を見渡すナーサリー。そして、四冊の本とメモ用紙を発見した。

「この子達ね。さあ、早くホムンクルスさんと見習い魔法使いさんの元に届けなくっちゃ」

見つけた本達を両手に抱え、いそいそと医務室を後にするナーサリーだった。

「お待たせ！　お医者様からの届け物よ！」

そして、ここはキャストリアの個室。彼女はジークから「相談に乗る」と言われた直後にはち切れんばかりに泣き出してしまったのだ。その為、ジークは個室から出歩くことが出来ずに代理として同じ全体キャスターのナーサリーに本を持ってるように頼んだ次第である。

「すまない。助かったよ。では、この本を参考にしながら君を元気づけたいと思う。カウンセリングについては初めてだが、全力でやるから宜しく頼む」

ナーサリーから一冊本を貰い、早速ページを開く。成り行きでぶっつけ本番となってしまったが、それでも彼の覚悟は決まっていた。

「さて、まずは目次から君の症状にあった治療を……　ん？」

貰った本を開くや否や、彼は首をかしげることとなる。

「どうしたの、ホムンクルスさん？」

「やはり、私はもうダメなのでしょうか？」

不思議がるナーサリーとキャストリア。ジークの右手には、アスクレピオスのメモとはまた違う紙切れがある。

「えーと、『医師殿。私は貴殿に対し男女の観点において特別な想いを寄せております。出来れば、サーヴァントとしての第二の生における伴侶として、私をこれから貴方と同じ部屋で生活を送ることを望みます。返事に関しましては、いつでも構いません。貴殿が私と所帯を持

つ準備が出来上がった際にお声をおかけください。毘沙門天に誓い、貴方をお守りいたします。長尾景虎』こ、これは、どういう意味だ？」

まだ文字を覚えたばかりのジークにとって、この文章の語彙は些か難しかった。

「え、えーとですねえ」

と、ここでつい先ほどまでテンションダダ下がりだったキャストリア。少し顔を赤らめて発言。

「景虎さんが、アスクレピオスさんにプロポーズしたラブレターなのかと……」

彼女の口調や声の抑揚から考えるに、どうやら泣きわめくような精神状態からは脱却した模様。

「あらー！　これはとっても嬉しいことね！　お医者様の返事によってはお祝いをしなくちゃだわ！」

無邪気な子供か、噂好きの奥様か。どちらにもとれる反応をするすーサリー。

「？？？？？？」

そして、事態の唐突な変化について行けないジーク。

こうして、ジークによるキャストリアのカウンセリングは予想外の方向で終わり？を迎え予想外にもほどがあるビッグニュースを発生させることとなった。

喧噪、動揺、困惑

「まったく、何が『効率的な素材獲得の為の対エネミー用透過液』なんだ。第一、溶液同士をかき混ぜて爆発が起こるって一体どんな成分と魔術を施したらあんなギャグ漫画のような展開になるのやら……」

こちらアスクレピオス。一通りの治療と事情聴取を終えて呆れかえっているところだ。とりあえず、持ってきた医療セットを戻すために医務室へと戻る。

「ふう。とりあえずだが、一大事にならなくて良かった。だが、せっかくなら未知の薬品事故による特殊な症状を見てみたかった気もするが……」

ぶつくさと独り言が続くこの医師、個人的に何かしらの不完全燃焼要素があった時の癖だ。まあ、彼の独り言が加速している時はそれに比例して己の研究も加速するという事だが。

「今回の爆発の要因となった薬品の一部はサンプルとして貰った。これをパラケルススから借りたスキャナーで改めて分析。メディアはこのような検証データを記しているが、正直なところ僕はこの周波数は化学要素の多い波長ではなく生命に対してアレルギー反応を起こすかのような物質を含めるからであって……」

メモを取ったり機械にコマンドをポチポチと入力したりと、久々に忙しい作業に励む。彼の医学知識をあらゆる方面から貰ったデータと照合することで、より新しい成果に繋がることは多い。現に、今彼が使っている機械も彼の研究と孔明の魔術知識を統合させた結果の産物である。

「正直、この術式には少々生命の体に対して強引な部分があるのだよなあ。皮膚組織に対しては刺激が強いからここは緩和剤としてこの試薬を……」

彼はひたすら独り言と作業を繰り返した。そして、彼の体感時間と体内時間と稼働時間は徐々にずれが生じ始めてきたのである。

「さてと、おなかがすいたな。もうそろそろ食堂も夕飯の頃合いだろ

うし、一度休憩とするか」
　普段なら、各面々が夕飯を終割らせている頃合い。研究の心地よき疲れをリフレッシュさせるにはちょうど良いのだ。そう、普段なら。
「これは、なかなか大騒ぎになるんじゃないのか？」
「大騒ぎどころではないぞ。下手すればこのカルデアの人事が大幅に変わってしまう。彼が俺たちとの関係性を色々な面で見直す恐れもある。それほどまでに、結婚というものは恐ろしいものなんだぞ。例え、それが弟であっても結婚相手を優先してしまう事態だってあるんだからなあ！」
　何やら、いつも以上に騒がしい食堂。そして、その面子の一部はアスクレピオスにとって非常になじみがある。
　イアソンとアタランテだ。更に、イアソンはともかくアタランテがここまで焦っているのは珍しい。
「……人事？　結婚？　何やら途轍もなくカルデアには無関係そうな話題だな」
　訝しげに二人に近づくアスクレピオス。とりあえず、身近な二人ならすんなり事情を教えてくれるだろう。
「おい、船長。いつになくここが騒がしいようだが、何かあったのか？」
　横から軽く肩を叩いた。さて、イアソンの反応は……
「……おい、アスクレピオス。何かではなくお前が騒動の大元だろうが！　って言っても、お前の事だ。この騒ぎに関しては知らぬ間に広まったという感じなんだろうなー」
　若干声を荒げるも、すぐ苦笑いになるイアソン。これでも共に英雄譚に名を連ねた仲だ。何かしら話題が独り歩きしたと察しているのだ。
「イアソン、一度二人で話をしに来てくれ。このまま彼をここに留めておくのは色々面倒なことになる」
　こそっと一言を添えるアタランテ。まだ、他の面々はこの医者が食堂にやって来たことには気が付いていない。

「ああ。という訳だ、一旦俺たちの部屋へ静かーに避難するぞ。色々お前自身も混乱していると思うが、話はその後だ」
「わ、分かった」
イアソンのスムーズ過ぎる事後対応にアスクレピオスはまだ現状把握にまで至れていない。ただ、一つ分かることがある。今からとんでもなく面倒くさいことを聞かされ、それが自身の人間関係を大きく変化させてしまうという事だ。

事細かな話と船長の待遇

「まず、俺が今回の騒動を知った経緯から話すぞ。本人からしちゃあ些細な情報も必要になって来るかもだからな」

さてさて、ここは「アルゴー号ゆかりの者」特性持ちのみが出入りできる所謂「ＶＩＰ室」だ。イアソンがメディアに関わる事以外で密談がある時に使用することが多い。

「船長、とりあえず全体の概要も細かくは聞く。ただ、先に結論を教えてくれ。僕は未だに状況の大まかな把握すら出来ていない状態なんだ」

そして、当のアスクレピオス。有能だが若干慌て気味なイアソンを軽く落ち着かせつつ話を促した。

「そうだったな。では、教えるぞ」

イアソンは軽く咳払いをして息を整える。

「結論から言うとだな。長尾景虎がお前へプロポーズをしたと噂になっている」

「？」

「……」

一瞬だが部屋の空気が凍る。視線をそらすアスクレピオスと頭を抱えるイアソン。

「説明を、お前の言いたいように行ってくれ。恐らくそれで何とかなる」

「わ、分かった」

こうして、イアソンによる懇切丁寧な説明が始まった。

「まず、この話題を持ってきたのはキャスターアルトリア、ジーク、ナーサリー・ライムの三人だ。景虎がお前に当てて書いたというプロポーズ文書を持ってきたんだ。で、その時食堂にいたのが恋バナが好きな清姫とかだった。まあ、この話は景虎本人に確認すればここまで大騒ぎにはなってなかったんだよなあ」

「ん？　今回の騒ぎ、そのプロポーズ関連で噂が凄いことになってい

るだけではないのか？　いや、噂が立っている時点で厄介なことは確かなんだが」
「あ、その件に関してはこれからの話を聞けばわかる。あれだけ食堂が大騒ぎだったのはもう少し理由があってだなあ……」
　イアソンの苦笑いレベルが上がる。しかし、彼の背中に流れる汗の量から既に事態はとんでもないことに進展していることが伺える。一息ついて、遂に騒動の根幹を話し始める。
「実はなあ……」

　時間は、キャスター三人衆が食堂で一通り景虎の手紙を興奮気味に読み上げ終わった地点まで遡る。
「まあまあ！　あの景虎さんがこんなにお熱い文をお書きになるなんて！」
　真っ先に反応したのは清姫。自身も熱烈な愛を持っているせいか食いつきが非常に良い。
「こ、ここではサーヴァント同士が婚姻を新しくすることがあるのか？　如何せん、私はカルデアに来てからの日が浅くてよく知っていないのだが」
　ラクシュミーが続いてこの反応。清姫やナーサリーと比べると経歴の上ではド新人である。
「今のところは無いわね。けど、あの温厚で規則に縛られない私のマスターなら容認してくださると思うわ」
　シグルドやブリュンヒルデ、クレオパトラにセミラミスに天草と、この手の話題になりそうなサーヴァントはこのカルデアにはいない。久々の恋バナに清姫は更にトークを加速させる。
「……　清姫。俺たちは何もそこまでは考えていない。とりあえず、この手紙を読んでしまった以上どうすればと考えて無意識に足が向いてしまった訳で」
　おいジーク、言い訳が完全にゴシップ大好きマダムそのものだぞ。
「ま、とにかく。長尾景虎及びアスクレピオスに直接連絡を取らないといけないな。これは二人の問題になるわけだから」

厨房で夕飯の支度をしているエミヤが事の次第を整理する。彼もまだカルデアに来て日は浅いがサーヴァント歴は長いのでしっかりと頼られるコックだ。
「はーい、お疲れ様です！」
と、ここで大勢のサーヴァントが厨房になだれ込む。先ほど管制室で実験をしていた研究職の者たちだ。
「あのう。景虎さんとアスクレピオスさんが何処にいらっしゃるかご存知でしょうか？」
キャストリア、事態の発起人である故に収束に向けて真っ先に行動をとる。
「ん？　アスクレピオスなら今は医務室に戻っていると思うぞ。こいつらの治療を一通り終えた訳だからな」
はい、ここでイアソンの登場。彼は例の実験で駆り出されていた万能スタッフだったのだ。
「景虎は多分自室だな。先ほど、私と共にトレーニングルームを後にしたからな」
アタランテの付けたし。ここに来る途中でイアソン達と合流した。
「そうですか。ありがとうございます」
ペコリとお辞儀をしたキャストリア。居場所を把握しすぐに向かおうとする。が、彼女の足を止める衝撃的な言葉が放たれた。
「そういえば、聞いてくださいな！　ここだけの話なんですけどね。景虎さんがアスクレピオスさんにプロポーズするようなんですよ！」
はい、清姫はまだ興奮が収まっていなかった。
「……　事の顛末が終わるまでは、どうか内密に頼む。二人にも事情があるはずだ」
即座にフォローに回るエミヤ。流石の対応と言えよう。
「お、おう。何か色々大変そうだな。まあ、俺はその話は聞かなかったことにするぞ」
「そうだな。他の者の恋路に口を出すのは良くない」
納得するイアソンとアタランテ。しかーし
「え、アスクレピオスが景虎さんに？　ちょっと違くないですか？」

イアソンの隣からひょっこりと顔を出した魔法少女。メディア・リリィだ。
「お、おい。待てメディア」
「今ここでそれを言っては……」
船団の二人が慌てだす。少し後ろに居る若奥様はもう息をしているかも怪しいレベルだ。
「だってー」
キョトンとしか顔で話を続ける幼いころの若奥様。
「アスクレピオスはブーディカさんと結婚するのではないのです？」
メディア・リリィよ。お前は冷却魔法でも使ったのか。アルゴノーツの面々はもうこの世とは思えない顔をしているし、他のサーヴァント達も動揺を隠せていないぞ。
「まあ!! それはまた面白、じゃなくて大変なことになりましたね！
彼はどちらを選ぶのかしら？」
そして、その静寂を破ったのが清姫のこれである。
『……あんｄｈｈぢえへうｒごえｓじょｆ！』
はい、混沌。議論、動揺、不安などが入り混じり食堂が人数のわりにとんでもない喧噪具合となった。そして、騒がしいから様子見に来た他のサーヴァントも釣られて噂にのめり込む。更には噂が尾ひれを付けて泳ぎ出しあることないこと話され出して現在に至るのだ。
「軽く聞き耳を立てたところ、お前が二股どころか五股だって噂も一瞬だが浮上した。あの戦場にお前を放置してたら命の危機もあったかもしれん」
なるほど。イアソンが色々慌てていたのは大戦犯の一人が超身内だからという事だろう。まあ、カルデア単位で言えばイアソンとアスクレピオスも身内なので結局身内の大戦犯をこの医者は喰らった訳になるが。
「なーるほどな。なんか、色んな要素が絡み合った結果のようだな」
ようやく事態の深刻具合を把握したアスクレピオス、大きなため息をつく。

「とりあえず、僕と同じく噂の渦中にある二人の現状は分かるのかい？」
「まだだ。だが、安心しろ。俺がマスターから借りパクしている『個別通信機』の『緊急通信専用事前位置把握機能』を使って二人への隠密な道順を案内できる」
　そう言ってイアソンは、この部屋にある道具入れから古めかしいディスプレイを取り出した。
「あと、これ。ステルス機能搭載のマント。これで万が一があっても誰かに見つかることはないだろうよ」
「……イアソン。お前はクエストがない時何をして過ごしてるんだ？」
「別に。ただ、あっちこっちをフラフラして色々作ったり貰ったり聞いたりしているだけだぞ」
　キョトンと医者の質問に返答する船長。
　この男は己の立場をフルに活用して自由に楽しくカルデアライフを送っているようだ。
「流石、高難易度などで集められる僕たち『選抜組』に加えて１００レベにまでステータスを与えられる『上級聖杯組』は立場が違うなあ。こいつはカルデアでようやく王族らしいことが出来るようになったのかもしいれないなあ……」
　部屋を出る時ボソッと言ったこの独り言は、どうやらイアソンにも聞こえていたらしい。なぜなら、後日イアソンはアスクレピオスに対して『カルデアでの過ごし方　選ばれし者の悠々自適な生活』というとんでもない著書をサイン付きで渡してきたからである。

第一の訪問

「……アスクレピオスは、どちらの部屋から先に訪れると思いますか？　イアソン様」

　アルゴノーツ専用部屋からアスクレピオスが出てから数十秒後。部屋の片隅の空間から一人の魔術師がその姿を可視化させてくる。今回の事件の大戦犯、メディア・リリィだ。その顔に詫びるような表情はない。ただ、いつになく真剣そのものの表情もしている。

「メディア、事前に連絡くらいしておいて欲しかったぞ。俺もアタランテも今までの情報があったから即座に周りを動かすことに成功したが、もしあの場に俺がいなかったらどうするつもりだったんだ？」

　そして、元妻と二人きりのイアソン。しかし、唐突な登場にも関わらず一切の動揺がない。彼女の存在に既に気が付いていたという事だ。

「その時は、貴方方ともう少し打ち合わせしてから事を起こすつもりでした。ただ、これほどの好条件は他になかったものでしたから」

「それもそうだ。で、見込みはあるのか？」

「本人にまだ知らせられてないのが確実性を失っているのがネックです。ただ、そっちのほうが結果としては良いのかもしれませんね。誰かに植え付けられた愛は、自分で本物の愛に昇華させない限り保てなくなりますので」

「お前が、言うと。何か不気味になるのはなんでだろうな？」

「本物の愛を持っているからですよ。例え、それが最初は神により植え付けられた偽りの愛だったとしても。私は、今でも貴方を愛しておりますので」

　自然な受け答えをした上でそっと夫に近づくメディア・リリィ。華奢な腕をゆっくりと回してイアソンに抱き着いた。普段なら、彼は真っ青になるところだろう。

「わーたよ。今日は暫く一緒にいてやるよ。何はともあれ、お前の行いがあいつの周りの気持ち悪い人間関係が洗濯されるんだろうからよ」

イアソンが面倒くさそうに彼女を受け入れる。
「ったく。あいつには誰かを幸せにすることは出来るのかね？　ま、俺が一切できない訳だからアドバイスどころか批評も出来ないんだけどよ……」
イアソンの目線は部屋の天井の小さなシミへと固定されている。彼にとっては、今ここにいる少女が彼の栄光と挫折。そして、彼女の存在は夫婦や恋愛関係においての失敗そのものなのだ。
「イアソン様、愛してますよ。今も、昔も……」
小さくつぶやいたメディア・リリィの一言。二人のこのある意味面倒な関係は、カルデアで良い待遇であるからこそ余裕のある会話なのかもしれない。
ある意味二人を知っている昔の英雄達が見たら驚くだろう。
イアソンと若若奥様が毎日一緒に昼食をとっているなんて。

「……　アスクレピオスだ。入っていいか？」
「ええ」
スパイ同士の密談のような雰囲気の下、彼は一人の女の個室へと入った。
「……　なんか、あの飲んだくれや船長の嫁のせいでとんでもない事態になってしまったようですすまない」
「気にしないで。この手の話題は世代や国を問わずに盛り上がるものだし、カルデアではほとんどないような話だからね」
いつもと変わらない表情で彼を迎えたブーディカ。アスクレピオスが彼女の部屋の中を見たのはこれが初めてであるが、不思議な安心感を覚えた。
「綺麗な部屋だな。いつもは食堂でしか話さない分、ここは新鮮だが落ち着く場所に感じる」
「ありがとう。私も貴方も清潔さに厳しい職種だから、綺麗って言われるのは嬉しい話ね」
ブーディカのその優しげな笑顔を見て、アスクレピオスは多少ではあるが胸をなでおろした。

「いつ知ったんだ？」
「さっき、食堂の電話でエミヤが教えてくれたわ。今は部屋から出ない方がいいって。詳しい経緯とかは、貴方から聞かせてもらえる？」
「分かった。うちの船長の話によると……」
さりげなく用意された椅子に座って出された紅茶に手を出すアスクレピオス。一口飲んでからゆっくりとイアソンから伝えられた内容を話していく。傍から見れば、仕事帰りの夫が今日の出来事を妻に話ているような光景であったのは二人の知る範囲ではないのだが。

料理人、剣士、聖女の思惑

「……て感じだ。まあ、どうせ一時の騒ぎだろうからな。数日くらい静かにしていれば問題はないと思う。それまで少々不快な出来事があるだろうが勘弁だ」

あれから数分。アスクレピオスは出来るだけ簡潔な表現で事の顛末を伝えた。

「なるほど。何か思ったより大事になってしまったみたいね。エミヤには暫くキッチンを任せることになってしまうかな。まあ、暫く新作料理の研究に勤しむことにするわ」

ブーディカは、既に自分のするべき内容を悟っている。己が渦中に置かれるケースこそ初めてだが、カルデアでトラブルが起きた時は出しゃばらずに対応するのが彼女のやり方である。

「助かる。僕のせいで面倒なことになってしまったのは申し訳ないな。埋め合わせ、っていうか一人で静かにしている間は僕たちである程度生活のサポートをする。あの船長は現在ニートみたいなもんだからな」

「そう。貴方自身も大変なはずなのだからそこまで行動しなくてもいいんじゃない？　自分のことくらい自分でも出来るし」

「いや。それじゃあ僕の気が収まらない。それに、これからあの飲んだくれにも事情聴取も行う。やる事の増え具合を考えれば、むしろ君と関わっていた方が気が楽なのでね」

ゆったりと椅子から立ち上がるアスクレピオス。これから厄介な女の所に行かなければいけない訳だが、先に心配の種を減らして若干の安堵感を覚えた。

「……じゃあ、また来るよ。何やかんや、僕が一番頼りにしているのはお前なんだからな」

彼はステルスマントを被り、部屋を出る準備を済ませた。心なしか、来た時より足取りが軽い。

「……分かったわ。あとは、貴方に任せるから」

静かに彼を見送るブーディカ。そのまま、静かに彼女の部屋が開閉

される。
　それから三秒経った。
「……ふう。景虎さん、思った以上に大胆な行動してくるなんて思った以上だわ。あのまま彼女が彼を手に入れてしまったら、私にとってのやすらぎの空間が壊されちゃうかもしれないのかな」
　飲み干された紅茶のカップを自室の水道に置き、軽い溜息をつくブーディカ。彼女は例え一人だったとしても、こんな寂しげな目をすることはアスクレピオスが絡む事くらいしかないだろう。

　ステルスマントを被り、忍び足でカルデアを進むアスクレピオス。個別通信機が次々と鉢合わせを回避もしてくれる為、二重の体勢で誰かに見つかることはない。しかし、彼はあえて見つかるリスクを負ってでも見ておきたい人物がいた。なので、ステルス機能の作動を改めて確認し、息をひそめる事となる。
「それにしても、あの景虎さんがこんな形でプロポーズって。想像していなかったっていうか、彼女がこの手の話題に挙がってくるくらい意外ていうか」
　そして、想定通りの声が聞こえた。そして、もう一人。
「うむ。まあ、想像は出来ないのも無理はない。されど、彼女とて一人の女子（おなご）。色恋沙汰の一つや二つあるのだろう。サポートして拙者は様々なカルデアに出張してきたが、色恋が皆無なカルデアは存在しなかったぞ」
　やって来たのは、マルタと佐々木小次郎。このカルデア両者共に重役を担っている二人だ。
「……」
「まあ、確かに人として恋や愛に励むこと自体は自然な行為です。けど、相手がアスクレピオスさんって。彼は正直ブーディカさんとくっつくと思ってたのよ」
「景虎殿は常に表情を出さない女子（おなご）だからな。ただ、毎度のごとく医務室に行く時の足取りはかなり軽かったのは明白だったな。勤め先が同じ都合もあり、個人的には景虎殿の肩を持ちたいな」

マルタは、厨房で調理補佐を担っている選抜組だ。同じライダーという事もあり、ブーディカとはかなり仲がいい。そして、佐々木小次郎はトレーニングルームの最高監督官の聖杯組。二人とも、アスクレピオスとの関わりこそ薄いがカルデアでは重要なポジションについている。

アスクレピオスにとって、今後の対応の一材料として二人の個人的な意見を聞きたかったゆえに聞き耳を立てたという次第である。

「ま、どっちにしても私としては嬉しい限りなんだけどね。だって、あの医者さんなら決めた相手は必ず幸せにするでしょ？」

「異論はないな。拙者も何やかんや医師殿とは長い付き合いだ。女子（おなご）を泣かせるような御仁ではなかろうな」

そして、二人の付け足されたこちらの言葉。そのまま横へと曲がって行った。隠れて見ていたアスクレピオスからは、まるで娘を嫁に出す前の両親に見えてしまった。

「……まずは、話をしないとな」

二人を見届けたアスクレピオスは再び移動を開始した。心なしか、少しだけ気が軽くなった足取りへと変わっていた。

大和撫子の具現化

あれから、アスクレピオスは淡々と道を進んでいった。そして、初めて着いた。毎日会っている者の個室に。

「……アスクレピオスだ。入っていいか？」

彼は周りを確認し、軽くドアをノックした。しかし、返事はない。

「入るぞ。さっさと話をしないと前に進めなくなるからな」

問答無用に押し入るアスクレピオス。ブーディカの時は勝手が違う。

「……景虎、いるんだろ？」

周囲には、トレーニングルーム以上に散らかった酒類。更に、武具もぞんざいに投げ置かれている。

「景虎？　お前の個室を訪問したのはこれが初めてだ。だが、ここまでガサツではないだろ？　普段は」

ベッドの上にうつ伏せに寝ている景虎。眠っている訳ではないようだが、動く気配もない。

「……お前が僕に何を想って言うかは、正直今でも分からない」

そっとベットの隅に座る医者。面倒な駆け引きが始まる。

「だが、カルデアでここまで騒がれてしまっては周りの面子に色々と迷惑がかかる。軽くでいいから今後の行動を自重して貰いたい。とりあえず、暫くはトレーニングルームの副監督官としての責務を全うしてくれ。医務室に来るのも控えろ。騒ぎに関しては暫くすれば収まる。だから、たまには一人静かに過ごして欲しい」

目線を合わせることが出来ないし、彼自身も合わせるつもりもない。それを堂々と話せる覚悟自体、彼は持ち合わせるだけの余裕がないからだ。

「伝えるべき事は全部話した。これから、マスターなどに話を色々つけて来る。まあ、暫くこのままいればいい。今はまだ、お前自身が何をしようと僕はすぐに対応する訳にはいかないからな」

スッと立ち上がるアスクレピオス。長居をする気はない。

「佐々木小次郎に指示をちゃんと仰げよ。それがお前の立場と仕事な

んだからな」
　仕事はこれにて完了。外に出ようとステルスマントに再び手をかけたその時だった。
「ま、待ってください医師殿！」
　熱湯風呂に投げつけられたカエルのような勢いで起き上がる景虎。髪は軽いボサボサで、気品とははた違った野生感のある美しさを放っている。
「私の不注意で事態が大事（おおごと）になってしまった件については、本当に申し訳ないと思ってます」
　いつになく焦燥感と哀愁が漂う景虎。アスクレピオスの手を強く掴んだ。
「わ、私は。貴殿と特別な関係になりたいと心から望んでいます。ただ、速攻で拒まれることが何よりも怖かったのです。だから、本来はあの本に挟んで間接的に伝えようと試みたのです。それが、ここまで発展してしまうとは思ってもみなかったのです」
　その瞳は、いつになく弱弱しい乙女そのものである。アスクレピオスは若干罪悪感を覚え始めた。
「貴方の為なら何だってします。だから、私を見捨てないでください。貴方との時間がなくなってしまうのが怖くて仕方ないのです。一時的な謹慎処分等もお受けいたします。ですので、せめて今までと同じ関係を心よりお願いいたします」
「か、景虎？」
　アスクレピオスにとって彼女の言動一つ一つに違和感しかなかった。
「出来れば、本当に貴殿とは婚姻の儀を取りたいのですよ。貴殿は私にとって唯一無二の男性なのですから」
（大和撫子という言葉をこいつに使う事になるとはな）
　重荷自体はなくなったはずなのに、部屋を出たアスクレピオスの足取りは余計に重くなっていた。メンタルカウンセリングの本を読み漁ったとしても治療の仕方は見つけられないだろう。

通達

あれから、アスクレピオスはマスターの部屋へと直行する。一通りの交渉が済んだのでその報告と、イアソンが借りパクしていたステルスマント及び通信機の返却の為だ。
「マスター、アスクレピオスだ。色々と報告があるのだが、入ってもいいかい？」
「うん。もう対応してくれたんだね」
中からは、淡々としたマスターの声がする。流石の適応力、既にこの騒動の全貌と今後については理解している。
「……まずは、僕の周りで人事を揺るがすレベルの事件が起こってしまった事を謝らせてくれ」
さっとドアを開けたアスクレピオスは、マスターを視認する前に頭を下げた。
「あ、アスクレピオス！　そんなむやみに謝らないで！　俺はまずは君からの対処した結果を聞きたいわけだから」
若干慌てた声色のマスター。彼自身がこの医師を大変信用しており頼っている証拠だ。
「あ、確かにそうだな。じゃあ、まずはブーディカについてだが……」
ドアを閉め、アスクレピオスはこれまでの会話その他について報告をした。その時間、わずか三分。長く語れば伝わる訳ではない。
「ってことだ。まあ、エミヤとマルタに関しては負担が大きくなってしまうのが若干の負担になりかねないのが一番の心配事だな。あとは、むしろ職場としては問題ないかもしれない。ブーディカも、久々の休暇となるからな」
マスターに対しては、常に平常心で接するように心がけている。彼が背負っているものを考えれば、余計な負担を一切かけてはいけないからだ。
「なるほどね。こうなると、あとは噂がこれ以上下手な事態に発展しない様にいつも通り過ごすだけって事か」

顎に手を当てて、何かを思案するマスター。いつもは頼りなさげなことが多いが、誰かの緊急事態にはこのような切れ者の表情をする。
「アスクレピオス」
そして、マスターは医師の目を鋭い視線で見つめる。
「な、何だい？」
本能的に狼狽えてしまうアスクレピオス。嫌な予感がした。
「一つ、君に頼みたいことがあるんだよ」
「……」
「一か月だ」
その表情からは、何を考えているかアスクレピオスは理解できない。しかし、とんでもない面倒な内容であることは感じた。
「何の期間、だ？」
「君は、この一か月以内にお嫁さんを一人決めてもらいたいんだよ。勿論、今回の騒ぎの渦中にある景虎とブーディカでなくても構わない。けど、君には先例を作って欲しいんだよ。サーヴァント同士でも、それが例え生前に関わりがない者同士でも愛し合えるという事をね」
その言葉は、無茶苦茶という領域を遥かに超えていた。戦国大名の政略結婚を告げられた感覚とはこういうものなのかと以前図書館で読んだ本で考えたことが目の前で起きている。
アスクレピオスにとっては、どう転んでも今までの生活には戻れない。それは、恐怖以外の何物でもなかった。

事情と信頼

「ま、待ってくれマスター。僕は、結婚しなければならないのか？　っというか、あまりにも話が急だから何をどうすれば良いのか理解すら出来ないのだが」

マスターの顔はあくまでも本気の様子。ただ、傍から見れば無茶苦茶ではある。

「……アスクレピオス。一つ考えてみて」

手元にある謎めいた通信機のボタンを数個押した後、マスターが解説を始める。

「俺は、サーヴァントのあらゆる事情を聴いている。そして、その中にとあるデータがあってね」

空中にディスプレイを発動させるマスター。そこには、サーヴァント達の顔写真と複雑に絡まった矢印があった。矢印の主だった内容は、「友人」と「家族」だった。

「アスクレピオス。君は、ここだ」

軽くスクロールをして、アスクレピオスの部分を拡大。そこには、何の矢印もない彼の画像があった。

「……よく、見ているようだな。船長辺りから聞いたか？」

これには、アスクレピオスも思わず苦笑い。イアソンを始めとするアルゴノーツの面々は「仕事仲間」や「生前の仲間」であり、他の面々も基本は「職場の同僚」であった。つまり

「僕は、孤独だと言いたいのかい？」

これが、以前読んだ「親に結婚を迫られた息子」なのだろうと実感している神話時代の医者。

「まあ、それが一つ。あとは、こっから先は極秘内容なんだけどね。君の周りのように微妙にゴチャゴチャした人間関係を持っている人もいるんでね」

若干のあきれ顔をするマスター。ここで、格好つけたように指パッチンをする。

「はい、先輩」

何時(いつ)からそこに居たのだろうか合図に呼応して、マシュ・キリエライトがノートを片手に入ってきた。これは、完全にマスターの正規サーヴァントの風格だ。
「アスクレピオスさん。こちら、口外無用でお願い致します。私や先輩、イアソンさん達が噂などを調べつつ推測した人間関係図です。アスクレピオスさんに向かってブーティカさん、景虎さんから矢印が向かっているのが見て取れると思います。お二人には前々から御好意を寄せられていたのですよ」
比較的このシールダーと話すことが多い医者だが、平時より彼女のトーンが低いように感じた。
「他にも、本人さんたちも知られている自覚はないでしょうが○○さんは大分前から▽▽さんに惚れていらっしゃったりします。こちらの方々に至ってはずっと両想いなのにずっと他人行儀です！　全く、見ているだけでストレス値が上がってしまいますよ!!」
マシュ、明らかにイライラしている。そういえば、彼女は図書館の恋愛小説を様々なサーヴァントに薦めていた。これは、各人物に自身の恋愛観を磨いて欲しかったのだろうか。
「で、こいつらも恋愛を自覚、行動できるように僕が真っ先に結婚をしろと？」
「はい。アスクレピオスさんなら良い夫になる事は確かですし、カルデアでの信頼も厚いです。しかも、お相手候補のお二人も十分にカルデアで貢献されている方です。誰もが納得する理想的な夫婦として、今後のカルデアでの恋愛事情においてアドバイザーになってくださるという趣旨です」
マシュの純粋な目がアスクレピオスに刺さる。無駄に熱い信用というものは困りものだ。
「アスクレピオス」
マシュの説明の後、落ち着いた声でマスターが声をかけた。
「もし君に任せっきりだった場合はいつまで経っても進展がないと思ったんだ。それは、彼女たちにも君にも良くない。だから、こうしてお節介を焼かせてもらったんだ。ごめん」

「……一か月か。まあいいだろう」
マスターをちらっと見た後、肩をすくめるアスクレピオス。
「この一か月以内に妻を決めろという話。絶対にばらさないでくれ。彼女たちにこれ以上噂で負担をかけたくないからね。それじゃ、今日は少し休ませて貰うよ」
二人からの返事は、待たなかった。これも、ある意味一種の信頼である。
マスターの部屋からするりと出るアスクレピオス。突如として疲れが溢れ出し、既に何も話す気にも慣れていなかった。
「お疲れ、アスクレピオス。そして、ちゃんと選んであげてね」
そして、マスターは静かに彼を見送った。手元にメモ帳を出し、「第二段階○」と記して。

明日への道しるべ

アスクレピオスを無言で見送ったマスターとマシュ。二人で目線を交差させた後、マスターの合図でマシュは通信機を操作し始めた。
「イアソンさん、こちらマシュ・キリエライトです。極秘作戦コードA、第二段階完了を報告いたします」
この時の彼女の気迫はレイシフト時以上だ。
『……ズザザ、こちらイアソン。了解した。引き続き、対象の監視と助言に注力する』
間を置くことなくイアソンから返事があった。恐らく、医師の行動パターンを考え連絡が来る時間を予め計算しておいたのだろう。
「よろしくお願いいたします。今回の作戦、イアソンさん達がどのようにフォローするかにかかっておりますので」
『分かっている。ただ、結果はどう転んでも文句は言うなよ。最終的に誰を選ぶかはあいつ次第なんだからな』
「百も承知です。大事なのは、誰がよりも結婚という事実なので。では」
通信越しではあるが、マシュはペコリと一礼して通信を切った。
「マシュ、お疲れ」
労いの言葉を投げるマスター。その言葉で、張り詰められたオーラが解除される。
「さて、これで俺たちが出来ることはなくなった。暫くは君が良く読む恋愛小説を眺めている気分で過ごしな」
「……はい、出来る限り邪魔しない様にします」
マシュの胸の内は完全にバレている。人の恋路に何とやら、珍しくマスターの方がマシュにブレーキをかけている瞬間だった。
それで良い、マシュも一人の少女なのだから。マスターの隠れた笑みにマシュはまだ気が付いていない。
「……何もしたくない。まあ、レイシフトの予定もなくなっただろうし少しはゆっくりしても文句は言われないだろう」

医務室に戻ったアスクレピオスは、まるで戦闘でエネミーから呪いをかけられたような体の重さだ。
急遽迫られた「サーヴァントとしての結婚」は医学にしか興味のない彼には重圧だった。
「まあ、候補があの二人なら悪くわないのだろうけどな。どちらかを選べっていうのがなんとも申し訳ないというか、二人との丁度良い関係性が崩れるのが好ましくないんだよな」
口では色々言いながらも、彼にとっては景虎もブーディカも大事な同僚だ。ただ、それ以上の関係性を急に求められては脳内キャパーオーバーだ。
「第一、結婚するならどちらが良いのだ？　別に、個室が同じになるくらいだろ？　まあ、あいつらに至っては別居婚なのか離婚済みなのか知らんのだが」
脳内に浮かんだ船長とその妻。オルフェウス（アルゴノーツの一員。愛妻家で知られる琴座の英雄。一説によるとアスクレピオスの異母兄弟）なら的確な良いアドバイスをしてくれるかもしれない。しかし、彼は座に登録されているか不明な為いつ再会きるか分からない。
「まあ、オルフェウスに関しては仲が良すぎるからな。ある意味参考にならないかもな」
自分と同じ境遇の人物に関しては、カルデアにも生前もいなかった。こんな時は。
「明日、行くか。今日は寝よう」
目当てはあった。だから電気を落とした。まだ時間はある。それが彼の考えだ。
しかし、彼は忘れていた。このカルデアの人間関係は思った以上に複雑で面倒なことを。

図書館の少女

さて、今日もアスクレピオスの一日が始まった。しかし、今日は食堂に向かわない。医務室のパソコンをチョコチョコと叩いてメッセージをいくつか送信。後は、他の面子が手を回してくれるだろう。

「彼女の事だ。どうせもう起きているだろう」

部屋に置いてある間食用のお菓子を一口、咀嚼も程々に彼は部屋を出た。恐らく、朝から彼のようにあの部屋へ向かう者はいないだろう。食堂でもトレーニングルームでもなく、図書室に向かおうとしているのだから。

図書室の開館時間は、基本的に管理人の都合で開館する。まあ、朝八時半が通常だ。しかし、現在は朝の五時。それでも既に鍵はかかっていなかった。

「ったく、連絡を遅らせてしまった僕が言うのも変だがよく対応してくれたもんだ」

扉の前でお辞儀を一回。そして、静かに中へと入っていくアスクレピオス。

「いらっしゃい、素敵なお医者様。こんな朝早くに何の御用かしら？」

出迎えたのはナーサリー・ライム。紫式部や清少納言がいないこのカルデアでは図書館司書を務めている。

「少し、調べたいっというか参考にしたいものがあってな。かなり時間がかかりそうだから今日一日中ここに籠って本を読ませてもらおうと思ってな」

「そういうことならオッケーよ。恋愛小説はここを真っ直ぐ行って左側の棚よ」

「……流石に分かっていたか。今回の噂で僕が女心の勉強をしようとしていたことは」

何だかんだ、ナーサリーもカルデアの超古参メンバー。アスクレピオスとも長い付き合いとなる。

「私も、貴方の幸せをを心から願っているわ。私たちの勘違いでこんな大きい事になってしまったのは申し訳ないけど、結果として良い方

向に進むと思うの。だから、何か聞きたい事や頼りたい事があったら遠慮なく言ってね。私たちは、人の心について誰よりも見てきたのだから」
　ニッコリと笑うナーサリー。幼き聖母を表現するなら、今の彼女のを指す言葉なのだろう。
「助かる。あと、僕宛てに食料などが送られてくるはずだから来たら呼んで欲しい」
「分かったわ。では、良い本の旅を！」
　こうして、アスクレピオスのゆったりとした勉強会が始まった。

「……やはり、乙女心は理解しがたいな。何故素直に褒めると殴られて、褒めないと蹴られる？　この対応に応えは存在するのか？」
「別に、お前は太ってなどいないぞ。むしろこれ以上痩せると健康に弊害を及ぼすレベルになるのだから食べろ。誰かと一緒にいる時間が大事ならまずは健康寿命を延ばせ」
「衣服の枚数が許容値を超えている。このままでは部屋の大半を占めることになり衛生面に支障が出てしまうぞ。いらないものは誰かに譲るなりして在庫を減らせ」
　あれから数時間。アスクレピオスは数々の恋愛小説を読みふけった。しかし、読めば読むほど非論理的な女性の心理が理解できなくなっていく。彼からすれば、最新研究の医学書や魔術書を読んでいる方がよっぽど楽だ。
「お医者様、恋の病は決して簡単に治せるものではないのよ。その患者が女性なら尚更ね。そして、その病を治すのに必要なのは適切な愛。その適切って言葉は女性それぞれ、私たちが教えられる物ばかりでもないのよ」
　お盆の上にお茶とサンドイッチを置いて、ナーサリーがやって来た。その笑顔は、数時間前と変わっていない。
「エミヤが昼食を持っててくれたみたいだね。感謝するよ。それじゃあ、少し休憩するか」
　読んでいた本に栞を挟み、隣のテーブルに移動するアスクレピオ

ス。エミヤにはナーサリーの分も頼んでおいてので、久々の誰かとの食事となった。
「ナーサリー、お前は誰かに恋愛感情を抱いたことはあるのか？　このカルデアならではの想いとかあるだろ？」
　エミヤのサンドイッチはまろやかで、非常に穏やかな気持ちになれた。それ故か、普段なら聞けない女性の恋愛事情について聞こうと思ったのだ。
「そうねえ。私はここに来て大分落ち着いた生活を送って来たわ。だから、誰かに感謝したり信頼したりすることは多いわね。だから、恐らくだけど恋愛事情はその延長線上にあると思うわよ」
　彼女の紅茶を飲む姿は非常に様になる。そして、見た目の割に適切な助言だ。
「あいつらも、そして僕もそれに基づいた感情理論になるのかな？　後は、何をすれば良いのやら」
「実際に話した方が良いわよ。とりあえず、食堂の仕事が無くなって暇であろうお姉さんに会いに行ったらどうかしら？　貴方にとって、は彼女は癒しになるのではないのかしら？」
「……　そうだな」
「そして、昼を過ぎたらトレーニングルームにも行くこと。彼女は絶対に貴方を必要としているのだから」
「分かっている。ったく、なんであいつらから選ばなければならないんだよ」
「全寮制の職場恋愛はそんな感じよ。心配しないで、同じ悩みを持っている人は大勢いるのだから」
「……　まあな」
　その後、暫く無言のランチタイムが続いた。雰囲気こそ穏やかだが、アスクレピオスの目は決して穏やかではなかった。
「それじゃあ、お邪魔したよ。色々と参考になった本もあったよ」
　昼食後、本の片づけをしたアスクレピオスは早々と図書館を後にした。食器は空いている時間にエミヤが回収しに来る手筈となっている。

「ええ、貴方の素敵な恋路を祈っているわ」
ナーサリーは、扉の前まで見送りに来てくれた。
「あ、それと一つ僕から言うべきことがあった」
と、アスクレピオス。軽く咳払いをする。
「君自身も、早めに行動した方が良いと思うぞ。僕が言うのも変だけど、遅くなってもいいことはないんだからね。ライバルも、居るかもしれないんだからさ」
「!?」
硬直するナーサリーを背中に、アスクレピオスはさっさと図書館を後にした。別に、一矢報いたかった訳でも報いる必要もなかった。しかし、何となく彼女の周りは自分の後に修羅場になりそうだったからである。

後押し、涙、そして……

昨日と違い、ステルスマントなしで日中のカルデアを歩くアスクレピオス。何名かスタッフや他のサーヴァントとすれ違ったが、何も反応がない。そういえば、彼は普段から任務関係以外で他の者と会話したことがほとんどなかった。よって、噂がさっさと沈めば二人との距離感が分からなくなった孤独な青年であった。

（僕って、こんなに寂しい男だったのかな？）

こんな思考をしてしまうのも無理はないのかもしれない。彼のカルデアでの特別な立ち位置が、まさかこんな形でしっぺ返し来るなんて予想できる人の方が少ないだろう。

（まあ、色々考えても意味がないからな）

こうして、彼は一日ぶり二度目の訪問となったブーディカの部屋である。

「もしもし、アスクレピオス……　あれ？」

昨日と同じように部屋の前で声をかけるアスクレピオス。しかし、途中で彼は話すのをやめた。なぜなら、部屋の中から彼女以外の女性の声が聞こえてきたからだ。

「なあ、ブーディカ。貴様にとってあの医者は何者なんじゃ？」

アスクレピオスが聞き耳を立てるまでもなく聞こえている少女の声。茨木童子だ。

「うーん。大事な人、かな？」

そして、その勢いなままブーディカの声も聞こえてくる。まあ、扉越しでも会話できるのだから無理はない。

「第一、貴様が祝言を挙げてしまっては吾のおやつはどうなる？　貴様はあの医者にばかり構って吾を見捨てるのであろう？　それに、こうして吾とゆったりとした時間も減ってしまうのであろう？」

泣きわめく茨木、まるでシングルマザーの再婚を嫌がる子供のようだ。

「大丈夫よ。普段は貴方との時間も今まで通りなわけだし。多分だけ

ど、彼も貴方との時間を邪魔することはないと思うよ」
　ブーディカは落ち着いた態度で茨木を宥める。実際、そのつもりなのだろう。
「彼が私との時間を多めにとってくれるとも考えにくいしさ。互いのプライベートにはあまり関わらない訳だろうし。第一、私じゃなくて景虎さんと結婚するかもだしさ」
「それは吾が許さんぞ！　貴様ほどの女を選ばぬなどイカレテおる！　あと、祝言の際の祝辞は吾にやらせよ。誰もが涙する文を作ってやるぞ！」
　結果、茨木童子はブーティカとアスクレピオスの結婚には全面的に賛成の様子。人間関係がかなり薄い景虎と比較するとかなりのアドバンテージとなる。
「では、吾はこの辺で失礼するぞ。旦那が来たようなのでな」
　何故か直感には長けている茨木童子。アスクレピオスの存在に気が付きお菓子を鷲掴みして部屋を出ていった。
「……　幸せにするのだぞ、医者」
　そして、ドアが開いたと同時に横に控えたアスクレピオスに一言を添えた。横顔しか彼には見えなかったが茨木の眼はかなり殺気立っていた。そして、大きな願いが込められていた。

「さて、いつの間にか僕が来ていたことがバレていたみたいだけど……」
　気まずそうにドアの前に現れるアスクレピオス。成り行きとはいえ立ち聞きしてしまった訳だ、無理もない。
「別にいいよ。私に会いに来てくれた訳だし。もう一度来ようッて考えもしなかった訳なんだから。それに、貴方にも知っておいて欲しかったからさ。彼女の考えは」
　新しい紅茶を用意しながら彼を手招きするブーディカ。素直に従い部屋に入る医者。
「……　今更かもしれないんだけどさ」
　ドアが閉まり、この部屋は完全に二人きり。若干俯き気味でブー

ディカが話を切り出した。
「自覚はなかっただけで、私は貴方が好きだよ。ずっと前から」
　そういえば、彼女の気持ちを彼が聞いたのは初めてだった。分かってはいたつもりだが、アスクレピオスは若干動揺してしまった。
「周りに流されて否定できずにいただけかと思った事もあったが、やはりそうか。事前に確認取れて安心した」
　アスクレピオスは彼女と一切目を合わせようとしない。ある意味一種の照れ隠しだ。
「最終的は、誰と結婚するかは貴方次第よ。それに、食堂での仕事も今まで通りにする予定よ。例え、貴方が私を選ばなかったとしてもさ。だって、朝に貴方に朝食食べて貰うのが、楽し、くて、あれ？」
　泣いていた。振られた訳でも、求婚された訳でもない。ブーディカは何故か涙が止まらなかった。
「お、おい。僕はまだ結婚云々を実感できてないんだ。だからこそ、こうしてお前に会って感じる物があると思ったんだ。別に、意味なくお前を泣かせる為じゃ……」
「分かってるよ。けど、女の涙は複雑で意味不明なんだよ。泣いている私自身も分からないくらいにね」
　女の涙は策士の一手とアスクレピオスは聞いたことがある。しかし、カルデア入居当時からの付き合いだ。彼女がこんな時に悪いことをするはずがないと彼は確信していた。つまり、彼女を泣かせたのは自分。
「お、落ち着けよ。僕は、お前の涙なんて見たくない。不安があるのは分かるけど、それは僕も同じだぞ」
　いつになく、アスクレピオスは動揺した。生前、女の涙を自分に向けられたことなどなかったからだ。そして、罪悪感以外にも彼の心は別の感情に支配されつつあった。
「ああ、もう！　どうとでもなれ！」
　次の瞬間、彼は動いていた。彼自身も認識するのが遅れるほどに。
「あ、アスクレピオス？」
「やっと名前を呼んでくれたな、ブーディカ。まあ、それは僕もだけど

さ」

胸元で聞こえるブーディカの驚きの声。彼女に己の激しい鼓動を聞かれていると思うと、更に動悸が激しくなってしまう。

男が女を抱きしめる行為に、きっかも理由も、認識さえも要らなかった。

傾いた針

時間だけで言ったら、十秒も満たなかっただろう。アスクレピオスは己の衝動的な行動に恥ずかしさを覚え、瞬時にブーディカから離れた。顔面は、いつになく真っ赤である。

「す、済まない」

「い、いいよ。別に。泣いちゃった私がいけないんだから。けど、私を想って抱き着いてくれたのなら、嬉しいよ」

一方のブーディカ、泣き止んだ上に若干笑顔が見える。彼の行動に相当救われたようだ。

「ねえ。アスクレピオス」

ブーティカは、枕元にある小さな小箱から何かを取り出した。そして、彼の手をしっかりと握りしめながらゆっくりと渡す。ずっしりとした重厚感をアスクレピオスは感じた。

「これ、生前の夫が使ってたやつ。彼は本当に最高の旦那だったんだよ」

「思い出として、取っておいても良いのではないのか？」

ブーディカは静かに首を横に振った。

「本当はね。このカルデアに来てから辛いことが多かったんだよ。ネロも、ロムルスもカエサル最初っからもいたんだから。それに、育成リソースは彼らの方が先に回されたし。ずっと厨房で無機質にかつての仇敵に食事を提供し続けるのかなって思っちゃって」

彼女がこんなに深い心境を語ったのは、彼が初めてかもしれない。それくらい、今のブーディカの話す勢いは凄まじかった。

「そんな時、貴方が接してくれた。頼ってくれた。貴方も、以前はほとんどリソースを回されずに医務室にしか仕事がなかった。なのに、貴方はとても楽しそうだった。ただひたすらに己の務めに注力してて、ずっと貴方がまぶしかったの」

「ただ単に、戦闘よりやりたかっただけだ。生前は神に邪魔されたからな」

「確かに、私の本業は王妃。ここでは絶対に叶わない幻の職。料理人

自体は楽しかったけど、そこはかとない怒りと悲しみと諦めが交錯してそれどころじゃなかったのよ」
ここに来て、ブーディカは一回口を噤む。恐らく、生前の苦悩やここでの苦痛が蘇ったのだろう。
「貴方が毎朝会ってくれるだけども嬉しかった。それに、貴方は私の過去も気にしてなかった。貴方の愚痴を聞くことも新鮮だったし、何より私を話し相手として頼ってくれたのが嬉しかったの。過去にも現状にも縛られない貴方が魅力的で、その一方で支えたくなった」
アスクレピオスの手には金属の器。生前彼女の旦那が食事に使っていたのだろう。そして、渡し終わったブーディカはくるりと後ろを向き数歩進む。
「以前、マシュから貰った本に書いてあったんだ。女からプロポーズする時はこうしろって」
そのまま立ち止まったと思ったらゆったりと振り向くブーディカ。ぎこちない動作で髪を撫でた後、静かに笑ってこう言った。
「こんな私だけど、お嫁に貰ってくれますか？」
この笑顔、しぐさ、シチュエーション。意図せず起こった部分（泣いてしまった事など）もあるが、恐らくこの騒動が始まった時点でブーディカが決めていた事だろう。そんな彼女の切り札に惚れない男などいない。
元より彼女には安心感を覚えていたアスクレピオスも例にもれず。
「……分かった。お前の過去を全て置き去りにするくらい幸せにする」
こう言うのももはや本能の領域だった。こんなものだろう、恋愛なんて。そして、こうでなければ恋愛ではないだろう。
そしてその翌日、彼はマスターの部屋へと向かった。案外早く結論づいた結婚報告をしに。

祝福の朝

次の日の朝、彼は以前のように食堂へと向かった。昨日は、あの後暫く二人で話をしていた。互いの過去、互いの今、互いの将来までをだ。

「……　おはよう」

「おはよう。まさか、こんなに早く食堂に戻ってこれるとはね。しかも、貴方がメールで言っただけでしょ？」

ブーディカが前のように彼を出迎える。いつものシリアルと牛乳、そしてカットされたフルーツ。

「まあな。ただ、正式な報告もしなければならない。お前はここでの仕事があるから大丈夫。先に僕から言っておくから、全体の朝ごはんの時間が終わったら二人で挨拶に行こう」

そう話した後、彼は早々と朝食を完食する。満足げにご馳走様と言い皿をブーディカに渡す。

「了解。それまでは調理に集中するよ。結局、貴方がメール送った人たち以外には私が一時的に調理場から離れる予定だって知らない訳なんでしょ？」

マスターから言われた事情をアスクレピオスから聴いたブーディカ。色々と彼自身も苦労していたと知り、彼に一段と支えようとするようになったし愛するようになった。

「そうだな。結局、マスターが少数の面子で行った極秘計画だったようだな。僕たちの結婚を機に、カルデアでの恋愛・結婚を推進するようだな。まあ、マスターの役に立てて嬉しいけど」

「そうね。幸せになって、他の奥手な子たちを勇気づけてあげるんだから！」

このブーディカの笑顔はまさに「妻の顔」だ。彼女が良い妻、結婚の先輩としてアスクレピオス及びカルデア全体を支えてくれることは間違いないだろう。

「それじゃあ、また。九時かその後くらいに迎えに来る」

「分かったわ。また後でね」

こうして、二人は一度別行動となった。しかし、誰が予想していただろうか、この後の泥沼を。

アスクレピオスは、現在マスターの部屋に向かって廊下を歩いている。途中、ロビンフットやカーミラなどのサーヴァントとすれ違ったが今までと何の違いもなくすれ違った。そして、マスターの部屋まであと数メートル地点の時あるセイバーとすれ違い。

引っ張られて物陰へと連行された。

「なあ、アスクレピオスよ」

そのセイバーは周りに誰もいないことを確認して口を開いた。

「結婚するなら長尾景虎にしておけ。ブーディカを不幸にしたくなければな」

突然の宣告に、アスクレピオスは理解が追い付かない。

「どういうつもりだ、ネロ・クラウディウス？」

動き出したのだろう。覆すつもりなのだろう。このカルデア最古参の一角にして絆レベル１０の男装麗人。一度決められた事象を反転させる為に、皇帝が力を振るいだしたのだ。

皇帝の圧

気が付けば、アスクレピオスはネロに胸倉を捕まれていた。
ネロ・クラウディウス、ローマ帝国五代皇帝にしてブーディカの仇敵。今では彼女たちはある程度和解しているが、ブーディカ自身の心労を考えると今でも思う節がある事だろう。そして、カルデア創設時代からパーティーメンバーの殿を長いこと務めてきた重鎮だ。
現在こそ彼女がクエストに出ることはないが、オジマンディアスと共に「功労者」としてアスクレピオス達役職持ちのサーヴァントと同等かそれ以上の待遇を受けている。
「お前が口出ししてくるとはな。むしろ、昔の縁とかでブーディカとの結婚には賛成してくれると思ったのだがな」
「マスターから事情を色々聞いてな。納得いかない部分が多くあったのだ。だから直接言いに来た」
いつもは朗らかな笑顔を絶やさない彼女だが、今回ばかりは真顔だった。
「単刀直入に言うぞ。ブーディカと結婚すると、彼女の立場が悪くなるぞ」
「何故だ？　僕たちの結婚は他ならぬマスターの後ろ盾があるんだぞ？　それに、茨木童子やマルタなどの賛同者もいる。一体誰が彼女に危害を加えるというのか？」
アスクレピオスの眼にだんだんと殺気が宿り始める。まあ、婚約者をここまでズタズタと言われては無理もない。
「では、説明しよう。まず、彼女が食堂で大きな人気を誇っておる。お主の結婚によって嫉妬の嵐となるぞ」
「知らん。あいつが人気なのは分かるがそんなことでマスターの権限を上回れると思うのか？」
「次。長尾景虎の暴走が顕著になる。今まではお主がブレーキ役だった。それが結婚となれば奴のやけ酒は増し、トレーニングルームの管理は杜撰となる。そして、その責任の矛先はお主やブーディカに向くこととなるぞ」

「言いがかりだ。長尾景虎自身が怠惰になったのなら、その責任はすべて彼女の責任となる」
　アスクレピオスにしてみれば、理不尽なレベルでネロが景虎に肩入れしているのか分からなかった。これは、一度揺さぶってみる価値があるだろう。
「ローマの皇帝さんがここまで理論もなく強引に景虎のバックアップをしているのは何でなんだろうな？　あいつから弱みでも握られているのか？」
　傍から見れば、今のネロは恋愛小説の意地汚いサブヒロインの子分だ。
「……　奴とは、一つの条約をかわした。内容としては、マシュやマスターも喜ぶ内容だと思うぞ」
　意外な手札「マスターも喜ぶ」に眉をしかめるアスクレピオス。今までのマスター達の言動から彼女の話の意図を推察。結論を導くのに十秒もかからなかった。
「お前も、結婚したい相手がいるのか？　景虎の結婚を後押しする代わりに自分の結婚も後押しして貰うのか？」
「ギクッ！　ななな何を言うか!?　余が結婚する訳なかろう!?」
「お前、分かりやすいな。んじゃ、僕がブーディカと共にお前の結婚を支援するって言ったらどうする？　景虎一人よりもより強いバックアップになると思うぞ」
　まあ、男装麗人が恋をしない道理はない。しかし、相手の性別を把握できなかったのであえて「相手」という形で質問したアスクレピオスであった。彼女が女性サーヴァントに何かしらちょっかいをかけていた光景は何度か目にした事がある。
「ウグゥ！　あの男とお主がそんな人脈を持っているとは思えないのだが？」
「景虎こそ、一人も人脈らしいものを持っていないと思うが？　僕が言うのも違うとは思うが、彼女は僕以上に孤独な人間なんだぞ」
「だからこそ言っておる！　奴には、長尾景虎にはお主が必要なのだ！」

図星を突かれた時には一度緩めた胸倉をもう一度きつくするネロ。
「奴とは共に大昔の戦線で戦った戦友だと思って居る。奴自身は余を友だとは思っていないだろう。されど、余からしたらこのカルデアの大事な戦友なのだ！　そんな奴が土下座してまで頼んできた！　マスターからお主らの結婚の話を聞いた時に、余は一大事だと思って奴に知らせた。その途端に土下座してきたのだ、放置出来ぬ！　だから、例えどんな理不尽な手を使おうが余はお主と奴を結婚させる、そして余も結婚する！　これで誰もが幸せになれるのだ、ブーディカなどすぐに別の結婚相手が見つかるはずだからな！」
「！　……　お前なあ」
強引にネロの手を振り払うアスクレピオス。単純な腕力ではセイバーの彼女に負けるので殺気で押しやった。
「……　余が本気を出せば、ひ弱なキャスターのお主など簡単に連れ去ることも出来るのだぞ」
どうやら、彼女は生前の暴君の如く目的の為に非道を貫こうとしているようだ。ならば、話は早い。こちらも対ネロの恋愛における切り札を出すまでだ。
「ふん。親友の妻を愛人にした皇帝様はやはり強引な手筈がお好きなようで。こんな事が続けば、流石のマスターも史実からのリスクを考えてお前を信用しなくなるけどな。それでもいいのか？」
「!?　ポッパエアの話をここでするな！　彼女は己の若き頃から何重もの苦しみを……」
「生まれる前に母を殺された僕には、そんな話しても見苦しい言い訳にしかならんぞ」
生気を失いつつあるネロを横目に、アスクレピオスはマスターの部屋へと向かった。戦友の為に戦い、かつての親友の古傷を抉られた皇帝は既に止める力が残ってなかった。

景虎、最後の逆襲

アスクレピオスがネロを振り切りマスターの部屋へ向かう途中、再び彼を呼び止める者がいた。この声は、アスクレピオスはかなりの回数聞いたことがある。

「……」

その者は、フードを被っていた。その風貌は、恐らくキャスターだろう。そして、無言で一枚のメモを渡す。ここには、長尾景虎に纏わる大きめの事象が書かれていた。

「……ど、どういうことだ？」

すぐさま目的地をマスターの部屋から変更するアスクレピオス。そして、フードの男はいつの間にやら消えていた。一陣の風を残して。

「おう、ブーディカさん。早い復帰ですねえ。いつもの頼んでいいかい？」

「おはよう、ロビンフット。はいはい、いつものフレンチトーストだね」

一方のこちら。食堂にて、ブーディカにお気に入りのメニューを頼む青年。アーチャー、ロビンフット。キャメロットの頃は高レアのアーチャーが一人しかいなかったこともあり、「頼みの綱の弓兵組」とダビデ・エウリュアレと共に呼ばれていた。現在は変則周回の高火力アタッカーが主な役目である。

「いやあ、やっぱ朝はこれだな。エミヤのサンドイッチも良かったが、長年食べている訳だからな。朝の起き抜けは嫁さんの味とはよく言うもんですねえ」

「おい、ナチュラルに口説くな。これだからサンソンの処刑人さんに『軽い男』と言われんだぞ」

横から顔を出すクー・フーリン。普段の言動と現在の格好（第二再臨）のせいで全く信用できない。

「おやおや、この前のバレンタインでも難破しまくっていたランサー

さんじゃあないですか？　あんたがこの期に及んで恋愛講座っていうのも何か合いませんねえ」
「いーや。俺はただお手紙を料理長様にお届けしただけだぜ。差出人は自分の目で確かめてくれ」
　ひょいと手紙を投げたクー・フーリン、ロビンフットのフレンチトーストを一片（ひとかけら）摘まんで食堂を去っていった。
「全く、あのランサーの自由具合にも困ったモノですねえ。で、そのお手紙さんは誰からでした？」
　牛乳を飲んでからお喋りを続けるロビンフット。
「……ごめん、少し行かなきゃいけない所が出来たから。皿は流しに置いといて」
　首を下に向けて歩き出したブーディカ。一種の呪いにかかったのかのような変貌ぶりだ。
「あーあ、遂に痺れを切らしたか。ま、あの皇帝様の事だ。色々あくどい事やってんだろうな」
　肩をすくめるロビンフット。彼は、正直な話今回の騒動について半分も知らない。しかし、彼にとっては縁の深いメンバーが肩入れしているので断片的な情報は持っている。そして、景虎陣営の主戦力は容赦なくブーディカを潰しにかかるのだろう。その根幹は、紛れもない景虎への善意だというのに。

「どうしたの？　いきなり呼び出しした上にこんな所に連れて来るなんて」
　ここは、トレーニングルームの端っこ。この部屋を知り尽くしている人しか立ち寄らないような場所だ。ブーディカはトレーニングルームの入り口で彼女に呼び出され、このままここに案内された。
「いえ、どうという事はないです。ただ、一度ご報告しなければならない事象がありまして」
　案内したのは、他でもなく長尾景虎である。見た所、酒は既に抜けているようだ。
「貴方方の事、マスターからネロ殿を経由して知りました。医師殿と

結婚するそうですね」
　景虎の右手には既に槍が握られている。完全に武装体制だ。
「ええ。二人で仲良く支え合うつもりよ」
「その件について一度謝罪しなければなりません」
　槍をブンブンと振る景虎。そして、ブーディカの首元に槍を軽く当てる。
「まず、挑発的な文でお呼びして申し訳ありません。あそこに書いているのは全て？です」
「……じゃあ、君が彼と既に駆け落ちの約束をしているのは嘘なのね？」
　ブーディカは先ほどまで血の気の引いた顔をしていた。しかし、これを聞いて若干顔色が良くなる。
「ええ。今の所はですが」
　槍をフワッと地面に置き、顔を勢いよく近づけて来る景虎。軍神の名に恥じないオーラだ。
「公的には、まだ貴方方の結婚は発表されておりません。今からでも事実は覆せます。私と彼の結婚に賛同している者が彼を説得しに行っています。多少の揺さぶりにはなるでしょう。そして、今度は私が改めて求婚して参ります」
「……本題は、そこじゃないでしょう？」
　ブーディカも一流の戦士にして王族。景虎の殺気に動じず話を進めた。
「本題、というかお願いですね。私が改めて彼に求婚する様を見届けて欲しいのです。私が、人に後ろ指刺されて彼を奪ったという邪推が起きないように」
　景虎、一世一代の大勝負。泣いても喚いてもどうしようもない。今度こそ、正面から彼に振り向いて貰おうとしているのだ。

アスクレピオスの言葉

「いいわ。君がそこまで言うのなら、彼と話してみたら？　ここで断ると、逃げたような気がしちゃうから。それに、どちらにしても居るなら手間じゃなさそうだし」
　景虎の我儘な最期の賭けを、ブーディカは了承した。そして、ふらっと後ろを向く。
「ずっと聞いてたんでしょ？　誰かに案内されたのかは知らないけど、ここに居てくれて良かったわ」
「……　妙なメモを貰ってな。こいつが良く話をする際に連れて来るこの場所に息を潜めていたらこの様だ」
　物陰からアスクレピオスが出てきた。
「景虎がトレーニングルームで何かやらかすって書いてあってな。嫌な予感がしたんだよ」
「医師殿！　妙な瓦版とは誰から受け取ったのです？　この作戦は私以外には数名にしか伝えてないはず!?」
「フードを被った男だった。声は、良く聞き覚えのあるやつとだけ言っておこう」
　動揺を隠せない景虎と淡々とするアスクレピオス。彼がメモを渡した人物の名前を言わないのは、一種の駆け引きなのだろうか。
「……　フード、心当たりがないですね。まあ、これもまた毘沙門天のお導きなのでしょう」
　疑問を出すのも程々に、景虎はゆっくりとアスクレピオスに近づいた。
「改めて、単刀直入に言います。私と結婚して下さい。私には、医師殿が必要です」
　ここまでスッキリとしたプロポーズもないだろう。
「済まない。既に僕はブーディカとの結婚を決めている。これは、彼女が何かしら汚い手を使った訳ではない」
「……　それは、私の生前とこのカルデアでの孤独をもってしても言えますか？　私にはずっと昔も現在も貴方しかいないんですよ！

貴殿の前でしか弱みを見せられないし、貴殿じゃないと私の心の闇は晴れない！　今、私は貴殿が居ないと何も出来ないんです！」
泣いてはいない。しかし、その訴えはもはや悲鳴だった。景虎の抱える孤独はブーティカのそれとは違う。強さと引き換えに仲間を失った人。誰かとの関わりを警戒し過ぎ、誰にも心を開けなかった女子（おなご）の末路。彼女にとって、アスクレピオスは己そのものに成っていたのだ。
「……景虎」
アスクレピオスの表情が若干曇った。男としても人間としても、ここまで依存されるような宣言をされては喜ぶどころか困惑してしまう。
「お前、何故僕がお前でなく彼女と結婚するのか分かるか？」
「い、医師殿？」
若干前かがみになっている景虎の頭を撫で、諭すような声を出すアスクレピオス。
「結婚は男を独占し自分の為に尽くしてくれる執事ではない。お前は僕に依存をしているようだが、結婚はその依存欲を満たす為の物ではない。誰かに依存しないと正気を保てない女は男にとってはつらいだけなんだよ」
その空間に流れる空気は異様に冷たかった。景虎の顔はいつになく青ざめており、ブーティカはここに来て気まずそうな目をした。
「勿論、ブーティカも僕に依存する要素はある。しかし、無理のある束縛もないし僕の悩みも聞いてくれる。今までは、僕自身も孤独だったからお前との他愛もない会話も癒しとなるが結婚となればまた別だ。お前の人格を否定するわけではない。けど単純に僕が結婚に求めている要素ではなかったと言っておこう」
景虎の頭から手を放し、アスクレピオスは後ろを向いた。そして、静かに状況を見ていたブーティカの手を取りそのまま歩き出す。
「景虎。お前との下らない話は悪くなかった。今まで僕の所に遊びに来てくれてありがとう。けど、もうこんな話をする機会はないだろうな。だから……ごめん」

後ろ姿をそのままに、彼は申し訳なさげに立ち去った。
いつもは済まないと言って謝罪するアスクレピオス。後にも先にも、彼がカルデアでごめんと口に出したのはこれが初めてだった。

光・影・闇・救い

「つたく、お前はつくづく要領が悪く人間関係が下手糞だな」
アスクレピオスとブーディカが立ち去ってからすぐ、物陰から姿を現したのはイアソンだ。恐らく、彼はカルデア内のあらゆる設備や人脈を駆使して彼らの言動のほぼ全てを把握しているのだろう。
「……私には、これしか出来なかっただけです。他に誰かと仲良くなる方法も知らないですし。私がここに来てからというもの、医師殿にしか甘えなかったし医師殿しか愛せなかったのですよ」
悲しげな声でイアソンに返す景虎。俯いているので、表情は読めない。
「貴方が彼と結ばれる可能性は少なからずあったと思いますよ。しかし、戦う条件が平等だったのです。それが敗因だったのでしょう」
イアソンの後ろからメディア・リリィも出て来る。イアソンの右腕をガッチリと掴みながら。
「……メディア・リリィ殿、貴殿と私の何が違ったのでしょう？私も貴殿も愛した殿方を愛せるだけ愛したというのに。何故貴殿は、今愛しの船長殿と一緒に入れるのですか？」
「……イアソン様と一時的とはいえ祝言を挙げたからですかね。事実は大事ですよ」
メディア・リリィは、少し言葉を継ぐんだ後にこう言った。彼女の傷口に塩を塗る単語を控えているのだろう。
「メディア。俺たちの時代、というか立場の都合で結婚をしたからな。もし俺たちがここ（カルデア）で初めて出会ったら、アフロディーテの干渉がなかったらどうなっていたかは分からないぞ」
イアソンの淡々とした付け足し。その顔には、若干の罪悪感が見える。
「……女神の運命については、もしもを考えたくありません。イアソン様に出会わなかった私なんて、座に刻まれることも無かったでしょう。そして、神話に名前すら載らなかったと思います」
首をゆったりと彼に傾けるメディア・リリィ。彼女の愛は景虎以上

に重い。
「貴方が居なければ私はここに居ません。そして、私が居なければ今のイアソン様は居ない。そう自負出来るレベルにまで私はイアソン様を愛し、尽くしてきました。それだけの時間があったし、他の相手もいなかった。貴方を愛してくれるお方が現れると思いますよ」
優しげな眼で景虎に言葉を贈るメディア・リリィ。己の境遇をひけらかす事はなく、尚且つ無駄に慰める事もしない。これが、「恵まれた者」の出来る最大限の労いなのだろう。
「そう、ですね。いつか、私の孤独は消えるでしょうね」
俯く景虎。本人には、そうなる未来が見えないのだ。
「じゃあ、とりあえず今から食堂に行くぞ」
ここに来て、手招きをしだすイアソン。そのままメディア・リリィをくっつけたまま歩き出した。
「……」
景虎は、無言で追う事にした。彼の知恵は頼って損はない、それが彼女が発動した久しぶりの戦場的直観だ。

報告と準備

カルデアの廊下は、いつも通り質素て清潔感がある。しかし、彼女と一緒に歩く廊下は一味か二味も変わって見えた。

「……マスターは、何と言ってくれるだろうか？」

「普通のトーンでおめでとう、とかじゃない？　ここに来て大騒ぎっていうのもあの子らしくないわ」

「それもそうか。まあ、彼はこれから更に色々うちの人間関係にメスを入れるようだからな。僕たちの話で『ようやくスタート出来た』って内心ではほくそ笑んでいるかもな」

「マシュの方がその辺は熱心かもね。私に対して、軽ーくだけど食事の時にその辺の愚痴を言ってたわよ」

淡々と続く二人の会話。傍から見れば今までとまるで違いがない。そして、そうこう会話している間にマスターの部屋の前に到着した。

「さてと。僕がノックする」

「おっけ」

軽く二人で確認した。そのままドアを叩くアスクレピオス。

「マスター」

「うん、入って」

間髪入れずに部屋の中から返事があった。

ドアを開け、二人は静かに部屋へ入った。

「アスクレピオス。確認だけど、君たちはこれから結婚してこのカルデアで式を挙げるで良いんだよね？」

ティーカップに入っている紅茶をゆっくりと飲み、マスターは最終確認を行った。

「ああ」

「うん」

二人は一言で返した。傍から見れば、ただ単にお弁当を温めるかどうかの質問に答えているレベルだ。

「オッケー。じゃあ、式の段取り決めようか」

ここで、マスターお得意の指パッチン発動。先程まで二人がいた廊

下からマシュが現れる。
「これより、お二人の結婚式の時の各方々の役割分担についてお話いたします。まず、司会は私が行います。そして、衣装装飾に関しましてはダヴィンチちゃんのアパレル具現化技術をもってウエディングドレスとスーツをお作り致します。後は、仲人と披露宴の挨拶についてですね」
　披露宴の台本、と書かれた分厚い本を抱えて机の上に置く。彼女の眼鏡の光り具合から気合の入れ具合を伺う事が出来る。
「挨拶の人に関しては、私から茨木童子を推薦するわ。この前あの子の方から立候補してくれたのよ」
「仲人に関しては、船長とメディアを推薦する。何やかんや縁のある夫婦だし、たまにはあいつにも仕事をさせてやりたいからな」
　二人とも、それぞれの考える人選がある。それをいつものように淡々と言う。
「あと、料理は一段と豪華にする予定です。エミヤさんに頑張って頂こうと思います。後は、式での席順に関してはお二人でゆっくりと決めて頂きたいと思います」
　このカルデアに属する全てのサーヴァントの名簿を渡すマシュ。そして、会場の見取り図も付随してある。
「分かった。いつまでに決めれば良いか？」
「まあ、明日か明後日くらいで宜しく。暫くこのカルデアは君たちの結婚に人員を割くから、早めにお願いしたいね。あとは、医務室の隣の部屋を二人の同居部屋に変更したいんだけど。荷物まとめといてね」
　ここでニカっと笑うマスター。裏がありそうだ。
「ブーティカ、君は医務室の隣の空き部屋まで距離があるだろ。手伝う」
「ありがとう。荷物はそこまで多くないからすぐ終わると思うよ」
　そう話しながら、二人はマスターの部屋を後にした。
　ドアが閉まる。
「なあ、ブーディカ」

部屋を出て歩き始めて数歩、アスクレピオスが改めて話し始めた。
「分かり切っているし今更だけど、僕は君の事を愛しているよ。多分、いつのまにやらって感じで」
ちょっと頬を赤らめるアスクレピオス。それを見て、ブーディカはクスっと笑う。
「ありがとう。私も大好きだから」
そう返すブーディカ。
「少し失礼」
そしてそのまま、彼の横顔に唇を付けた。
「たまには、いいよね」
そう言って小悪魔のように微笑むブーディカ。
（……僕が愛した女は、本当に楽しくて可愛いもんだ）
照れを隠すことなく無言でほほ笑むアスクレピオス。ブーディカがこんな小悪魔のような顔をするのは彼の前くらいなのだろう。

静かに動いた者々

食堂でのんびりとコーヒーを飲む一人の男。先ほどブーディカに言伝をしたクー・フーリン（槍）である。

「さーてと、上手い事言ったかねえ」

何を隠そう、ブーディカ、アスクレピオスの両方を景虎と引き合わせた張本人だ。

「お前さん、わざわざキャスターのあんたからフードを借りてカモフラージュしたんだって？　なんで面倒な格好をして格好を誤魔化すわけ？」

お向かいの席で話しかけるのはロビンフット。あれから、彼もここに残ってのんびりしているのだ。

「あー、あれかい？　深い理由はねえよ。ただ、あのままだとあのお医者様がズタボロになりそうな気がしただけだよ。如何せん、ああいうタイプの女は裏で他の女を潰し独壇場を作り上げるようなタイプだからな」

「あの軍神様が？　意外だねえ。確かに、裏は読めないですけどねえ」

ロビンフットもズズッとコーヒーを啜る。共に女には手慣れているタイプの男だが、修羅場の経験値はクー・フーリンの方が圧倒的に高い。

「……　強い女は怖えぞ。その分一緒にいると楽しい事も多いんだけどな」

「……　お前さん、師匠がいないのを良い事に言いたい放題ですねえ」

「まあな」

楽しげに笑う二人。しかし、マスターは彼らにも目を付けていた。彼らはどこのカルデアでも、修羅場は免れないのだ。

「あら、いらっしゃい。貴方がここに来るなんてかなり珍しいわ。歓迎するわよ、赤き皇帝様」

「うむ」

今日も図書館勤務のナーサリー・ライムのもとに現れたネロ・クラウディウス。この皇帝の声はいつになく疲れと絶望により支配されていた。
「私は、常に貴方の気持ちは理解できないわ」
テキパキとお茶を用意するナーサリー。ネロが崩れるように近くの椅子に腰を掛けるとそれと対になるテーブルにお茶を置いた。
「けど、何となく察しはつくわ。貴方の過去を逆手に取られて作戦が失敗したみたいね」
「言うな。余も色々あるのだ。何も詮索せずにゆっくりさせろ」
無気力を具現化させたの如く表情が曇り続けるネロ。互いが互いの手札をどこまで知っているのかは全く想定できていない。しかし、何やかんやカルデア創設期から前線に出ている二人だ。何となくだが互いが何を目的として行動しているかは予想できている。
「そう、貴方の横に新しく座るお方は大変そうね」
「お前を抱きかかえる男(おのこ)も苦労しそうだ」
軽く視線をぶつけ合うネロとナーサリー。二人がこれからのカルデアで大きな地雷となる瞬間は、もう少し先の話かもしれない。

ひと時

次の日、医務室近くで大掛かりな引っ越し作業が行われていた。言わずもがな、ブーディカとアスクレピオスの同居の為の移動だ。
昨日に二人の結婚が正式に発表された事を受け、興味本位で野次馬が結成されていた。しかし、その野次馬からひときわ注目を浴びていたのは当の結婚する二人ではなかった。
「■■■■！」
「勢い余って壊すんじゃないぞ。あと、ドアはお前の部屋より高くはないからな。荷物を持っている時はいつも以上に注意してくれ」
アスクレピオスの戦友の一人、ヘラクレスだ。力仕事が必要だと知り、自ら助太刀を申し出た。
「よし船長。今ヘラクレスが入れたテーブルを中央に置いてくれ。壁と平行になるように注意な」
「ったく、何で俺がこんな雑用を……」
「まあまあ。これからの私たちの大役と比べれば楽なものですよ、イアソン様」
部屋の中にいるのはイアソンとメディア・リリィ。ヘラクレスに優しい目で頼まれたので止むなくの手伝いだ。
「それも俺は納得をしていない！　何でこの俺が仲人というハタ面倒な仕事をやらねばならぬのだ！　マスターがやれば良いだろ、マスターが！」
不平不満が壊れた蛇口のようにあふれるイアソン。メディア・リリィが説（若干汚い脅迫まがいの何か）得をしたおかげでこれでも抑えられた方である。
「マスターは代表挨拶をしますので出来ないそうです。他の主要な方々も司会や挨拶、裏方の指揮を行うそうで手が回らないそうですよ。ただ座っているだけの大役なのですから、甘んじて受け入れましょ」
「……　まあ、この俺が大役にふさわしい事は今更にも程があるがな。暫くクエストも免除になる上に式での食事も一段と豪華になるようだからな。せっかくの俺の専属医師様の花道な訳だ、俺も少しは

真面目にやるよ」
　イアソン、やれやれと首を振る。口でこそイヤイヤだが、本心はかなり嬉しいのだろう。
「さて、もうすぐ終わりだよ。色々手伝って貰って助かった」
　部屋の中を一通り見渡し、満足げにアスクレピオスは頷いた。
「ブーティカに確認をして貰う。呼んでくるから、少しの間彼女の作ったこのお菓子でも食べていてくれ」
　テーブルの上にクッキーを皿と一緒に出す。そして、そのまま食堂へと向かった。

「貴方、あいつと結婚するに至って考えていることはあるのかしら？
　貴方も知っているとは思うけど、夫婦というものは初手に色々約束事を決めて置かないと後々苦労するわよ」
　こちらは食堂。アスクレピオス達の荷物移動作業を待っているブーディカとその話相手のメディアである。テーブルの上で向かいに座り、？気にお茶を啜っている。
「そうね。強いて言うなら、互いに秘密は程々にって感じかしら。私も彼も、大してそんなものは存在しないけど」
「結構、自由な感じなのね。自分から聞いといてあれだけど、知り合いの惚気を聞くのは耳が痛いわね。私は夫婦という言葉に呪われているから手伝う気に慣れなかったけど、純粋に貴方の幸せは祈っているわよ」
　メディアが一見おサボり状態に見えた理由である。イアソンとの仲は今でこそ険悪ではないが、やはり何か思うところがあるのだろう。
「ありがとう。貴方も、過去にとらわれ過ぎずに新しい出会いを探しても良いんじゃないの？」
「今は気分じゃないわ。ここに居ると研究が充実しているし、昔の私があの男と未だにイチャイチャしているのを見ているとある意味寒気がするのよね」
　彼女の軽い溜息はまさに主婦。ブーディカはそのように思ったが

触れない事にした。
「それも一つの選択かもね。ただ、マスターはこれからカルデアの皆の恋愛を後押しするみたいだから考えてみてもいいんじゃない？」
「ま、私の眼に叶うあいつより良い男がいればの話だけど」
　頬杖をつくメディア。何かイアソンに対して思うモノがあるのだろう。
「取り合えず、ありがとうね。貴方が羨ましがるくらいに幸せになるからさ」
　そう言って、彼女は立ち上がった。迎えが来たのである。
「ブーティカ、終わったぞ」
「ありがとう。じゃあ、見させて貰うよ」
「おう」
　静かに肩を並べて歩き出す二人。それを見たメディアがボソッと一言。
「……　いい夫婦になりそうね。ベタベタし過ぎない適切な距離な訳だから」
　その予感が的中するのも、時間の問題だった。

「……　こんな感じだ」
「……　うん」
「何かあるか？」
「無いわね。綺麗な位置取りだと思うよ」
「良かった」
　静かに、一つ一つの言葉の重さが増す会話をする二人。最近、アスクレピオスは特に口数が減った。
「どうしたの？　すっかり無口になっちゃって？」
　横からのぞき込む形で気にかけて来るブーディカ。
「さあな。ただ、下手なことを言ってお前を傷つけたくないから必要以上に言わないだけだ」
「別に、私は悪口でもない限り傷つかないと思うよ。例え、それが独裁っぽい男のエゴに満ちた言葉でもさ」

「……女の感は、恐ろしいな」
彼は驚きを少しだけ上回る軽いため息をつく。
それで何かの糸が切れたのか若干荒々しく彼女を抱き寄せる。
「お前の笑顔を見るたびに、滅茶苦茶に甘えたくなる。けど、そんなことは出来ないし必要以上にする必要も全くない。だから、たまにこうしていたい。それだけだ」
若干切なげな表情をするアスクレピオス。こんな表情をするのは初めてかもしれない。
「構わないよ。貴方に特別に頼られるのは嬉しいし、また今度私も甘えられるって事だからさ」
抱きしめられて優しい笑顔が浮かぶブーディカ。
「そっか、嬉しいよ」
二人がそのまま抱き合う時間は、彼女が夕食を作りにキッチンへ向かうまで続いたのだった。

結婚前日の策謀

あれからの数日は、怒涛の忙しさだった。アスクレピオスとブーディカは一晩で結婚式の座席表を作成、ダ・ヴィンチは衣装と式場の準備。イアソンは当日以外は暇なので色々な現場に顔を出して茶化して怒られている。そして、彼の隣には必ずメディア・リリィがいた。

「全く、天才にも作業速度っていうものがあるんだよ。ほんの数日でこれだけの設備や装飾をほぼ一人でやるのもなかなか厳しいね。もう一人くらいアシスタントを用意してくれないかい、マスター君？」

よく分からない火花をまき散らしながらネモ達を走り回らせるダ・ヴィンチ。手と口が別に動かしているというレベルでは無くなっている。

「孔明は今、書類作業をやらせているし、メディアも現在特殊術式をやってもらうからなあ。力仕事要因なら当てがかなりあるけど、そうじゃないよね」

「うーむ、メディア。リリィ君はイアソン君が貸してくれそうにないし。アスクレピオス君は主役だしなあ」

「お困りのようですね。微力ながら、お助け致しますよ」

ここに来て、若干静かな男の声がする。ダ・ヴィンチとは、まあまあ縁のある人間だ。

「やあ、パラケルスス君。素材周回は終わったのかい、ってマスター君がいるから終わっているか」

「ええ、キャスターアルトリアさんも笑顔で出迎えてくれましたよ。一時はどうなる事かと……」

「はは、君は少女への優しさが尋常じゃないからね。少女たちの精神のか弱さを理解している君は、彼女たちからしても頼りがいがあるってもんだろうな」

「まあ、そうでもないですけどね。ところで、何かお手伝い出来ますか？」

「そうだ。ここの衣装用に合成繊維が足りなくてね……」

ゴニョニョと相談を始める二人。もう、現場の心配はなさそうだ。

「……ふう、ひと段落かな」
それを見たマスターは胸をなでおろす。そして、そのまま現場を後にした。
「もしもし、マシュ。こっちは何とかなりそうだけど」
『はい、先輩。会場設営及び当日の進行の確認は全て完了いたしました。これより、裏作戦コードＮ遂行の為指定地Ｍへの合流を図ります』
素早く通信を切ったマスターは足早に自室へと駆け込むのだった。

「……ったく、お前の隣でのんびりするしか仕事がないというのも考え物だな。たまに僕自身の存在意義を忘れそうになる」
「それでいいでしょ。夫婦で話しているのに他の事を考えていたら嫉妬しちゃうから」
医務室隣の二人の部屋。ゆったりとお茶を飲むアスクレピオスとブーディカ。二人の心地よい距離感は数日前と変わっていない。
「けど、こうしていると僕たちの結婚には色々な人が絡んだって思い出せるな。あれから時間はあんまり経っていないのに」
「そうね。マスターは勿論、カルデアの主要な方々が色々動いたみたいだし」
「明日の式で連中が何を話し出すのか、案外心配なんだよな」
「茨木童子には酒呑童子が挨拶分の監修が入っているから大丈夫よ。後の面々にも、一人以上監修やサポートが入っているから事故は起こらないはずよ」
「誰かの酔いが酷くなければ立派な式になりそうだな。これで大惨事になったら、マスターの計画が崩れるかもしれない訳だしな」
「……ちょっと、一人で話に行かなきゃいけない気がしたの。行ってきていい？」
いきなり立ち上がるブーディカ。若干心残りがあったのかもしれない。

「……」
無言で彼女を見つめるアスクレピオス。彼女の意図を汲んでいる。
「……なら、これを渡してくれ。暫く、あいつに会う顔がないからな」
一冊の本をブーディカに渡すアスクレピオス。何時ぞやに、ある人物から借りた本だ。
「了解。貴方の気持ちも含めてちゃんと伝えておくから」
全ての考えを理解したブーディカすぐに頷く。
二人の結婚式まで、残り十八時間。

女たちの最後の会話

ブーディカが彼女の私室を訪れるのはこれが初めてだった。と言うよりも、彼女は仕事関連でも誰かの部屋に行ったことがない。アスクレピオスの部屋（元）も、マスターの部屋もだ。
「ブーディカよ。入ってもいい？」
「……どうぞ」
扉の前で一言ずつの会話。彼女と話すのはあの時以来である。
「……どうされました？　最近料理が出来ずに何かの不満がたまっているのですか？」
部屋に座布団を置き、物静かにと漬物を食べている長尾景虎。酒の匂いどころか空き瓶もない。
「少し、君と話がしたかったのよ。結婚前に」
「は……はて、何用でしょう？」
少しではあるが、景虎の詰め物を食べる箸が震えだす。まあ、彼女からしたら地獄そのものだろう。
「まず、一つだけ言わせて」
俯きながら、ブーディカは歩み寄ってくる。
「ありがとう。あれから何も騒ぎを起こさなくて」
彼女はペコリと頭を下げた。ブーディカはそのまま手に持った本を景虎に渡す。
「今回の騒ぎが終わった後、君は私たちとの関わりを何も公言しなかったし愚痴も言わなかった。次の騒ぎの火種をを巻かなかった。それだけで、私たちにとっては嬉しかったのよ」
ブーディカの静かな笑顔。安寧を望む主婦の顔だ。
「だからこそ、改めてお礼お言いたかった、そして、私が一人で謝りたかった」
「……」
「私が君の幸せを願っているとは言えない。ただの皮肉になっちゃうから。けど、私は結果的に君を苦しめた。だから、ごめんなさい。例え誰もが悪くないと言われたとしても、ここで謝らせて」

「言っていることが滅茶苦茶ですよ。悪くないのに謝るのは言われる側も理不尽な罪悪感に苛まれてしまいます。まあ貴殿の思う節は理解できますけど。私が貴方と同じ立場なら似たような行動をするかもしれません」
箸と皿を机の上に置く景虎。ゆっくりと正座を崩して立ち上がった。
「しかし、少々納得がいかない部分がありますね」
戦士そのもの平行移動でグッと距離を詰める景虎。
「貴方は、私に対しどんな感情を抱いているのですか？　同族嫌悪？　愛しき人の別面を知っているという嫉妬？　はたまた、自分の存在を揺るがす恐怖？　どちらにせよ、私への罪悪感があるという事は少なからず良い感情は持っていないと思いますよ？　だとすると、私は貴方の誠意を受け取りにくいんですよね」
狂気に満ちた目がブーディカの目の前に迫る。彼女に殺された武田軍の兵士とかはこんな思いをして死を迎えたのだろう。
「わ、私の君に対しての感情？　そんなの、昔なじみの同僚であり同じ人を愛した女って事くらいしか……」
「だから貴殿は避けられるのですよ！」
ブーディカの肩を武神の圧力で掴んだ景虎。
「ネロ殿から色々聞きました！　貴殿はこのカルデアでは私以上に孤独だって！　私と違い前線にも出れず、私と同じく生前の仲間がおらず！　調理担当もエミヤ殿が来るまでたった一人で、プライベートの時間も禄に取れなかったって！」
「え、いや。そんな昔の話……」
「どうして貴殿は医師殿にもっと早く甘えなかったのです!?　私には医師殿しかいなかった。されど、貴殿はそれ以上に医師殿しかいなかった！　私がお慕いしていた医師殿は、貴殿にあっさりと奪われてしまった。もっと早く貴殿が行動に出ていれば、私がこんなに苦しまずに済んだのに！」
彼女の乱れ具合は常軌を逸し始めた。彼女のカルデアでの人間関係そのものを崩された様なものだから、この状態は仕方ない。

「私は、貴殿に幸せになって頂かないと困るんです！」
そして、そのままブーディカを壁際にまで追いやる。
「正直な話、私は殺したいぐらいに貴殿が憎い！　私の想いも、夢も全てを打ち砕いた貴殿が！　だから、いっそのこと貴殿には私を侮蔑して欲しっかった！　されど、そんな黒い感情を持っていたら私が医師殿と結ばれていたはずだった。だからこそ、私は貴方を憎む！　貴殿とはもう話をしたくない位に憎む！」
殺気なのか、悲鳴なのか、はたまた怒号なのか。彼女の叫びが室内を支配する。恋に破れた女の最後の訴えは、いう側も聞く側も辛い。
「……　憎んでいいよ。少し、君には誰かに負の感情をぶつける必要があるのだから」
目線は景虎に一切向けず、ブーディカはこう言った。何を返すべきなのか、彼女も分からない。
「第一、これが最後になりそうだから来たのだから。ありったけの不満もぶつけてよ」
ブーディカは、覚悟の上で来ている。よって景虎ほどは動揺はしていない。
「……　医師殿を宜しくお願いします。憎んでも何にもならないのは、分かっていますから」
ブーディカの肩を離して後ろを向く景虎。一通り叫びつくしたのだろう。
「私は、このカルデアの一体何なのでしょうね？　ずっと戦って来たというのに」
ブーディカの返事は禄に聞かず、景虎はベッドへとダイブした。そして、彫刻のように眠った。
「……　おやすみなさい。そして、さようなら。私は精一杯幸せになる、そして、君のも光がありますように」
その言葉を残してブーディカは景虎の部屋を後にした。
「……」
ドアが閉まる音がして少しして、景虎は枕元にある本をチラ見し

た。ブーディカが一番最初に渡した奴だ。
「……」
おもむろに手を取る景虎。彼女の事だ、どうせ医者から自分の行動を聞いているのだろう。
「……　栞、ありますかね」
かなり適当に本のページをめくった。すぐに栞は見つかった。
「……『楽しかった。ありがとう。お前と話すことは存外良かった。お前なら、また良い話相手が見つかる。陰ながら、応援させてもらうぞ　アスクレピオス』……　医師殿は本当に」
彼女の涙は、自然と温かいものに変わっていた。

結婚前夜

ブーディカが部屋に帰って来てから、二人は無言だった。彼女は見るからに疲れていそうだった訳だし、アスクレピオスもそこまでして話す必要性もなかったからだ。

そのまま、カルデア全体での喧噪も徐々に静かになっていくのが部屋の中からでも分かった。その後、彼のパソコンにマスターからメールが送られてくる。

「……式場及び装飾の準備が終わったそうだ。明日は着替えとかがあるから朝8時に集合とさ」

「分かった。いつもの準備と比べれば随分遅いね」

「ブーディカがいつも早起きなんだよ。僕と同じ時刻に寝て朝四時に起きるってさ。お前、もう少し寝たらどうだ？　日中も仕込みとか食料管理とかであまり寝ていないだろ？」

「サーヴァント自体、睡眠は必要ないからさ。それに、私は非戦闘員。料理に力を注いでいれば問題ないから、結構大丈夫なんだよね」

椅子に寄りかかってアスクレピオスに答えるブーディカ。まだ気力は回復しきっていない様子。

「そうか。けど、精神的な負担も考えてエミヤに朝の当番を増やしてもらえ。事務的な作業を含めれば、多少朝晩を変わって貰っても料理長の威厳は保てるぞ」

アスクレピオスはまだパソコンを叩いている。互いに目線は合わさっていないが、表情は読める。

「今度、相談するのもありかもね。あと、もう一人くらい料理人を増やしてもいいかもね。候補は何人か目星はつけているけど、今後は積極的に関わりを持って考えていきたいね」

「僕との時間も増えるけど、それと同じだけ他のメンバーとも関わりを持っていきたいわ。勿論、君に所縁のある船の面々とかさ」

「胸を張って紹介できる連中でもないぞ。まあ、悪い奴らじゃないのは確かだけど」

今後の展望について語る二人。両者共に、景虎ほど孤独では無かっ

たという事なのだろう。
「とりあえず、もう寝るぞ。明日はお前と万全な状態で舞台に立ちたい。例え睡眠が必要ないとしても、取っておくに越したことはないのだろうからな」
パソコンを閉じたアスクレピオス。これといって予定はないので、もう寝るだけなのだ。
「……そうね。もう寝ましょうか。一応、明日は晴れ舞台な訳だから。おやすみ」
椅子からベッドへと移動するブーディカ。のっそりと動く彼女は珍しい。
「おやすみ」
こうして、彼は電気を消した。普段なら、このまま眠りについている。しかし。
「アスクレピオス。今日は一緒に寝ていい？」
枕を持ってブーディカがやってきた。
「どうした？　いつもより多く寝る事に慣れなくて寝れないのか？」
「うん。それもあるけど……」
暗がりでも、彼女の愛おしげな表情は分かる。顔を彼へと近づけてこう言った。
「貴方とただ一緒に居たい。明日の幸せの為に今夜も幸せを噛みしめたい。ただそれだけなの」
切なそうなブーディカの声。アスクレピオスは今日の彼女の様子を見て何かを考えた。
「いいぞ。今日は色々やってくれた訳だしな。それに、僕も君と一緒に寝るのは歓迎だからな」
彼はベッドの上で少し横にずれる。彼もまた、彼女が恋しいのだろう。
「ありがとう」
ブーディカはすっと彼の横に寝る。
「明日、精一杯いい式にしようね。愛してるよ」
それを最後に、彼女から規則正しい吐息が聞こえてきた。

「全く、返事くらいさせて貰いたかったな。僕も愛してるってことくらい」
聞こえるかどうか分からない音量の言葉を投げ、アスクレピオスは目を閉じた。
さあ、明日は結婚式だ。

結婚式

「何やかんや、いざ本番となると緊張するもんだな」
「私は、緊張と言うより興奮の方が勝つかな？　こんな日が来るなんて、少し前の私では信じられなかったから」
「……　んじゃ、先に行くぞ。ドレスの裾、踏まないようにな」
「大丈夫。いくらなんでもドジは踏まないから。待ってっね」
　静寂に包まれた二人の式前の会話。しかし、多くは語らない。控室を出た彼は廊下を抜け、式場へと入った。
　目に焼き付けよ、一世一代の晴れ舞台を。

「それでは、新婦の入場です。新婦はブーディカさん、付き人はウィリアム・テルさんです」
　マシュの文言より始まったカルデア初の結婚式。黒いタキシードを着たアスクレピオスの元に、純白のドレスに身を包んだブーディカが歩み寄る。
「あーあ、始まっちまったか。料理もまだ運ばれてきてないし視線は鋭いし、コスパ悪い役だなあ」
「まあまあ、式のメインの部分なんてすぐ終わりますよ。ゆったり待ちましょ」
　式場中央、イアソンとメディア・リリィも正装で座っている。仲人という立場は案外暇なものだ。
「それでは、これよりアスクレピオスとブーディカの結婚の儀を執り行います。これから共に人生を歩む二人に神からの祝福があらんことを……」
　司祭はマルタが担当している。中央付近のテーブルに座る小次郎は、眼力で『えー、本当にござるかー？』と煽る気満々のテレパシーを送っているが気が付いているのはマルタ本人のみである。
「……　綺麗だぞ。ブーディカ」
「ありがとう」

相変わらず、口数の少ない二人。しかし、その表情などからいつになく感情が高ぶっている事は伺える。そしてそのまま誓いの口づけが交わされ、カルデアに新たな歴史が刻まれた。
「それでは、これより二人の門出を祝して何名かの方に挨拶をして頂きます。まずは、ブーディカさんから推薦のあった茨木童子さんお願いします」
その後、代表挨拶へと移った。先陣を切ったのは茨木童子、後半だとプレッシャーが半端ない為配慮された結果である。
「うううううう、うむ。お二人の結婚、大変めでたいのう！　我からは医者にブーディカの美味しいおやつ上位三個を特別に紹介してやろうぞ！」
明らかに緊張している。まあ、だからこそのトップバッターな訳だが。
「つたく、もう少し奴でも二番手くらいに置けるくらい気楽な面々を使っても良かっただろうに」
「イアソン様、マスターのご意向です。私たちは静かに見守りましょう……」
若干あきれ顔をするイアソン。そんな彼を手をテーブルの下で握るメディア・リリィ。笑顔の裏に隠された重厚な想いが手のひらを通して伝わって来る。
「女子を泣かせるような事があれば、我が紅蓮の業火を持って反省させてやるから覚悟をしているようにな！　以上だ、二人で至福の夫婦（めおと）生活を送るがいい！」
若干声が上ずっていたが、キチンと挨拶を終えた茨木童子。軽く一礼して酒呑童子の元へと戻って行った。
「茨木さん、ありがとうございました。続きまして、太陽王オジマンディアスさんよりお言葉を頂きます」
マシュが式を進めていく。エジプトの神王（最古参星５、特別待遇の功労者）からメルとリリス（聖杯組兼選抜メンバー）、佐々木小次郎（聖杯組、トレーニングルーム最高責任者）と三名のサーヴァントが挨拶をした。確かに、このカルデアの重鎮たちが挨拶するのなら茨木童

子は前座なのは正解である。
「それでは最後に、この式の主催でありますマスターにご挨拶頂きます」
　そして、自由時間まで式も大詰め。マスターへとマイクが渡った。力強く握りしめられたマイクと共に、マスターが深く息を吸う。
「まずは、二人の結婚を無事に取り付けることが出来て良かった」
　今までの面々とは毛並みが違った。普通の結婚式の挨拶で「成功」なんて言うだろうか。
「しかし、これは我々の恋愛電溶の始まりに過ぎない。これから、より多くのサーヴァントが夫婦を作り幸せがあふれる事だろう。アスクレピオスとブーディカはその先駆けとなってくれた。ありがとう。そして、二人のこれからとカルデアの幸福を願って挨拶とさせて貰う。以上！」
　多くのサーヴァントは唖然とした。他人の幸福だと思っていたこの結婚式が、もしかしたら自分も関わるかもしれない訳だ、驚き具合が違う。
「ありがとうございました。それでは、これより自由時間となります。食事は随時追加されますので、遠慮なくお食べ下さい。それでは、カルデア開催結婚式、第一部を終了します」
　一方、マシュには何の変化もなかった。淡々と台本を読み上げ、式での役割を全うする。
　若干の動揺はあったが、一同バラバラと自由時間の行動をとり始めた。秘かな開戦の合図を聞いた者を除けば、それはもう穏やかな会食であった。

策謀の手筈は祝い事の中で

賑やかだった。多くの者が笑顔だった。それを見た長尾景虎、特にもう思い残りはないはずなのに顔が曇る。

「……」

視線の先にいるのは新郎のアスクレピオス、ではなくカルデアの功労者ネロ・クラウディウスだった。

「……」

「どうしたのだ、景虎殿？　宴にしては思い詰めた顔をしておるが、相談くらいは乗るぞ」

佐々木小次郎がそんな彼女を見てやって来た。トレーニングルームを取り仕切ってはいるが、彼は本来ネロと同じ待遇を受けても可笑しくない貢献度だ。そんな彼は、独自の立場からカルデアを考えて行動している。ならば、小次郎は景虎に考える節があったのだろう。

「いえ、貴殿もある程度は察しているでしょう。マスターの一言により、若干この式場に殺気が漏れ出しているのですよ。恐らく、暫くは修羅場も度々発生するでしょう。で、その中心になりそうなのはあちらの皇帝殿なのです」

「ふむ。あの女子（おなご）はかなりの策士だからな。いざ本格化したとなれば面倒な事態を招くだろう」

「で、今彼女が話しているお相手。私の勘が正しければ、その面々で大掛かりな作戦を決行してくると思うのです。一見縁がない方々ですので」

彼女の表情に覇気が戻りつつある。己の幸せやら何やらとはまた別に、カルデア全体を危惧している。

「……　あちらの女子らがどの漢に惚れているか拙者は存ぜぬがな。出撃の機会などで話す場面もあるだろう。人間関係に着目しておくとしよう」

首を軽く傾け、湯呑を片手に取る小次郎。景虎に協力を約束し彼女から離れた。

「……　一人で闇を抱えるのは、良くない事です。しかし、複数人で

闇を放出させた場合はどうするつもりなのでしょうか？　その多大な闇を受け止め切れる舞台が、このカルデアにあるとは思えないのでしょうけどねえ」
　景虎も焼酎を一口飲む。彼女は傍観者か、それとも賢者か。はたまた、新たな事案の裁定者となるのか。まだ彼女自身も予想が出来ていない。

「お主も分かっておるだろう？　意中の者を隣に置くには余りにも恋敵が強すぎる。少なくとも、味方が多すぎるのだ。つまり、余たちも手を組むべきなのだ！」
　溢れんばかりのカリスマオーラ全開でひそひそと提案をするネロ・クラウディウス。話相手は紅白の花飾りを付けた巫女くのいち、アサシン・パライソである。
「……　何を功労者殿が仰っているか存じかねますが、功労者殿は拙者と同盟を組もうと仰っておるのでしょうか？　そして、内容は次のカルデアでの婚儀の主役の座って事ですか？」
　酒を飲む手つきが妙に色っぽいこちらの少女。ネロほどではないが、彼女もまた人理修復に携わった古参メンバーである。
「然り。お主も彼を自分の物にしたいだろう？　今回の新郎新婦に圧力をかけて、余の陣営に引き込むことが出来ればお主も奴より優位を取ることが出来るぞ」
　皇帝の政治手腕は、会議中以外の方が必要とされる。こまめな根回しや脅迫など日常茶飯事の世界で生きてきた彼女にとっては、少女一人陣営に引き込むくらい朝飯前だ。
「申し訳ありませんが、拙者はまだ婚儀の事は……」
「早くしないと、奪われてしまうぞ？」
「!?」
　若干重みの増した危機の通告。歴戦の忍びである彼女も、流石に動揺を隠せなかった。
「……　あのお方は、絶対に譲りません！　承知しました、同盟締結です」

ネロの持つワイングラスにおちょこを軽く当てるアサシン・パライソ。
「うむ。お主が聡い娘で何よりである！」
ほくそ笑むネロ。彼女が力強い味方である為、あの娘より一歩前に行き安心もあるのだ。
さて、策謀の渦は皇帝の場所だけではなかった。もう一か所、暗黒炎の覇気をまとった作戦会議場があった。
まあ、彼女がこの戦線へと名乗りを上げるのはもう少し先の話である。

仲人の再縁

「いやあ、この肉は中々上質な焼き加減だな！　第一、調味料がいつもの奴より濃厚なものを使用している時点でキッチンの気合が伺えるな」

ネクタイを緩め、もきゅもきゅとステーキを頬張る仲人担当イアソン。既に自分の仕事は終わったも同然なので完全にオフモードである。

「イアソン様ー、こちらのオムレツもかなり美味ですよ」

メディア・リリィもせっせと彼に食事を提供している。これはもう、いつものカルデアの昼下がりである。しかし、今回の主役が話かけると場面は結婚式に戻る。

「イアソン、お前は本当に英雄っぽくないよな……」

アスクレピオスがジュースを片手にやって来た。若干呆れたような表情は、もはやいつも通りだ。

「まあ、それが彼なんでしょ？　この抜け具合がマスターの懐刀として活躍している訳だし、私としては貴方が嬉しそうなのも私としては微笑ましいんだけど」

彼の横には妻となったブーディカの姿もある。花・嫁の笑顔というのは光属性の権化と言っても過言ではない。

「ったく、ある意味言いたい放題だよなこのお医者様は。俺は適当に仕事して適当に食っていりゃいいんだよ。面と向かって礼を言われるのは気分が落ち着かない」

イアソンは目線を合わせようとしない。照れくさいと言うよりは若干場違いだとも考えているのかもしれない。

「イアソン、僕が言うのも違うかもしれないが卑屈になり過ぎだ。お前の立場や実績はこのカルデア指折りなんだ、もっと誇れ」

近くにあるからのグラスにジュースを注ぎイアソンに渡すアスクレピオス。

「……サンキュー。とりあえず、これから仲良くしろよ。俺はまた、色々と仕事なり遊びなりあるからよ」

グラスを受け取り、目線を反らしたまま礼を返すイアソン。ある意味信頼の取れた会話だ。
「んじゃ、僕はまた他の人と雑談して来る。とりあえず、一ついいか？」
「ん？」
「お前、そろそろ横にいる細君と同居したらどうだ？　部屋のスペースも更にゆとりが出来てカルデアの回転も良くなるんじゃないのか？」
意地悪そうな笑みを残してイアソンに背中を向けるアスクレピオス。
「ふふ、メディア・リリィもそっちの方がいいんじゃない？　一緒の部屋にすれば寂しさを紛らわす為にもう私に通信しなくて済む訳だしさ」
イアソンの隣でサラダをよそっているメディア・リリィにウインクを投げるブーディカ。
「ちょ、ちょっと！　何でこの場面でこんな事言うの!!?」
サラダをよそっているメディア・リリィは一気に顔を真っ赤にする。若干だが、声が裏返っている。
「ふふふ、ちょっとした仕返し。幸せになる権利、そして幸せを追求する権利は誰にだってあるんだからね」
重みの違う彼女の言葉は、また別の闇を抱える少女に強く響いた。
「イアソン様、また一緒に暮らしませんか？　ここにはもう、私たちを狂わせるような理不尽も不運も神の力もございません。今なら、本当に思い浮かべていた生活を出来るはずですから」
サラダを持った皿を横に置き、メディア・リリィはイアソンにそっとすり寄る。
「大掛かりな式はなしだぞ。ひっそりと俺の部屋に越してこい」
彼女の後頭部をゆっくりと撫でたコルキスの王子。さて、間もなく式もフィナーレだ。

変わらぬ日常と温まった会話

「それでは、会食タイムも間もなく終わりを迎えます。最後に、新郎新婦のお二人にお言葉を頂きたいと思うます」

マシュは締めくくりに入るべくマイクをアスクレピオスに渡した。彼は息を整え、辺りを見渡した。

「えーと、今回は僕たちの結婚を祝ってくれてありがとう。マスターをはじめとして色々と協力してくれたから、こんな盛大な式になった。このカルデアでのとても良い思い出になった」

そんな至極まっとうなお話をする医師。しかし、彼の本領発揮はこれからだった。

「恐らく、ブーディカのウエディングドレスを見てこう思った人もいるだろう。『いつか自分も』『彼女の姿を隣で見たい』と。僕たちのこの成果が、皆の励みになれば良いと思う。これからのカルデアの未来の為に、僕は彼女を絶対に幸せにしてみせる」

彼は隣のブーディカを静かに真横に抱き寄せ、彼女にもマイクを向けた。

「私は結婚したとしても私。そして、私は誰もが憧れるようなお嫁さんになるわ。これからも、皆を笑顔に出来るよう料理とか頑張るから宜しくね。そして、次のカルデアでの結婚式では私も料理に関わるから期待しててね！」

そして、彼女は左手に持っているブーケを大振りに投げた。

ゆったりと弧を描いたブーケ。その行き先は……

「え……　私？」

ジャンヌダルク・オルタ（水着）だ。このカルデアでは長尾景虎に次ぐ古参配布鯖だ。

「おめでとう、バーサーカーのルーラー。いい縁に恵まれるといいな」

素直に彼女を祝う同席のジーク。そんな彼を彼女はキッとにらみつける。

「いるわけないでしょ！　誰が結婚なんてするもんですか！　私の心を掴む男なんていないんだからさ！」

かなり場を壊す言葉の数々。しかし、一同大して気にしていない様子だった。
「……　たく」
「また出た」
「いつものかー」
ジャンヌの表情を確認してむしろ呆れ顔の面々。
「バーサーカーのルーラー。すまない、また気を悪くしてしまったようだ」
気にしているのは何も知らないこのホムンクルスのみである。なお、この関係が変化するのも今となっては時間の問題だろうが。

こうして、結婚式は一通りの成功を見せ終わりを告げた。
そして、その夜。
「アスクレピオス」
シャワーや夕飯を終え、普段の就寝時刻までまだ少し時間のある医師神。そんな彼女に妻から誘いがあった。
「何？」
「まだ寝るまで時間あるからさ、一つ頼みを聞いてくれないかな？」
「構わない。どうすればいい？」
「それはね……」
夫の左腕に自身の腕を絡ませるブーティカ。
「聞かせて欲しいんだ。貴方が船長達とどんな冒険をしてきたのか。どんな医療で人を助けて来たのか。私の知らなかった貴方を知りたくてさ」
「分かった。他ならぬお前が言うんだ、全部言うよ。ただ、一晩では話し切れないからな。これから毎晩、少しずつ話していこうと思う」
若干天井を仰いで、アスクレピオスは答えた。色々と振り返って感傷もあるのだろう。
「ふふ、楽しみね」
ブーティカの安心と癒しに満ちた笑顔が彼の横へと咲き誇る。
こうして、二人の夜は更けていく。

「……医師殿は、これから彼女と二人三脚で生きて行く訳ですが。私はこれからどうしましょうかねえ」
一方こちらは景虎の個室。今日は、昼に多少飲んでいたので夜の酒は控えめだ。なお、彼女にしてはなので傍から見れば十分飲んでいる。
「私は、暫く武術に勤しむとしますかねえ。これから他人の修羅場を拝見する事になる訳ですが、果たしてどうなるやらやら。逆に、医師殿は後ろ盾として色々どちらかに味方することになるのでしょうか。大変ですねえ」
涙はとうに枯れ果てた。残るのは寂しさのみ。しかし、彼女は暫く伴侶探しをする事はないだろう。生前も一生独身だった訳だ。問題はない。
「義を持って生きていれば、今度こそ運命は巡って来る。待つという事も、時には大事ですからね」
軍神の夜はまだまだ続く。

「……さて、また仕事頑張らないとな」
次の日、アスクレピオスはいつもより少し早く目を覚ました。ただ、隣のベッドは既に空である。
「ったく、マスターめ。思い出したかのように寝る直前で一気に仕事要件メールで送って来たな。ってか、日付超えてからメールってマスターの奴いつ寝ているのやら」
パソコンを見てメールを確認。以前の素材透過液の改良版や新人事の案などがいくつも書かれていた。
「まあ、忙しい分には大歓迎だ。やりがいもある訳だからな。さてと、朝食朝食」
パパっと着替えて食堂へと向かう医師。到着すると見慣れた背中が視界へと入る。
「おはよう。今日は若干だけど早いかな？」
「ああ、マスターが夜中の内に大量の仕事案件をメールで送って来た

らしくてな。基本的にデスクワークだし早めに片付けようと考えたから急いだ」
「そう、無理はしないでね。医者が過労で倒れたら元も子もないんだからさ」
いつもの席に座るアスクレピオスに妻のブーティカはシリアルとオレンジを置く。
「愛しているからね、私の大事なお医者様」
「僕だって愛しているぞ、料理長」
微笑ましく温かい会話が、早朝のカルデアの空気に流れた。

閑話休題　弊カルデアの概要

「ったく、マスターの奴いきなり何だ？　メールで話したこと以外に『厳重秘密事項があるから来てくれ』とは。マシュがまた裏で何か企んだりなんなりしているかもしれないが……」

アスクレピオス、仕事がひと段落した頃にマスターの私室へと向かう。何か、嫌な予感がした。

「マスター、アスクレピオスだ。入るぞ」

「……」

返事はない。だか、なにやら物音はするのでいる事は確かの様子だ。

「マスター？　何をしている？」

眼鏡をかけてパソコンをカチャカチャしているマスター。髪をモサモサとかきながら苦戦している様子。

「……　何をしている？」

「第二部の執筆」

「……」

唐突な言葉に呆れるアスクレピオス。訳だ分からない。

「アスクレピオス、許せ。マスターのたっての希望なんだ。今後何回かやるかもしれないが彼の息継ぎ為に付き合ってやってくれ」

マスターの隣でお茶やお菓子を用意しているのはアタランテ。事務仕事に勤しむマシュに代わってマスターの世話をしている。

「アスクレピオス。とりあえず来てくれてありがとう。今、このカルデアのデータをアタランテが渡してくれるから確認を頼むよ」

「これだ。経歴だけで言ったら私は最古参ではないからな。本シリーズの主役である汝に確認をして貰おうという訳だ」

印刷された一枚のＡ４の紙。見ると、見慣れたカルデアのメンバーの名前と説明文が添えられていた。

「……　よくわからないが、これを読めばいいんだな？」

「うん。間違いとかもあったら指摘してね」

マスターはまだパソコンから目を離さない。そして、キーボードの

叩き方が滅茶苦茶ぶきっちょだ。
「……さて」
こうして、医師神のよく分からない書類監査が始まった。

○アスクレピオス
本シリーズの主役。
カルデア入所・・・最初期。
入所こそ早かったもののリソース（主にページの在庫）の都合で育成は後回しにされてきた。しかし、当時は人権鯖不在だった為ヒーラーとして急遽育てられたのが1．5部の頃（始めて4か月程）。それまでもカルデアの医療スタッフとしてドクターとも関わりがあったが人理平定後は正式に医務室を預かることに。
聖杯は入れていないがスキルマにしており出撃頻度はイベント、ストーリで多め。キリシュタリア戦でも超耐久を見せつける。現在の役職は「医療長兼研究部化学主任」。また「準功労者」「選抜組」「アルゴノーツ」という肩書もこのカルデアでは持っている。

○ブーティカ
本作品第一部メインヒロイン。
カルデア入所・・・最初期。
星5のライダーの面々がコンスタントに入所した影響もあり、育成がされたのはかなり最近（始めて一年半）。
一方、平時は他に人材がいなかったこともあり料理長として最初期からカルデアの胃袋を満たしてきた。現在はちゃんとレベル70に到達。役職は「料理長」のみ。

○長尾景虎
本作品第一部メインヒロイン。
カルデア入所・・・最初期。
弊カルデア最初の配布鯖。キャメロットのモブ戦や七十二柱戦、アガルタでのメガロス戦など数々のストーリーに加え新宿でのページ

周回も担当していた。現在はページ周回の主戦場変更に伴い出撃回数は落ち着いている。
平時は「トレーニングルーム副監督官」として武闘派鯖と鍛錬している。「準功労者」

「ふーん。結構よくまとまっているんだな。だが、説明不足感も否めないな。特にカルデア特有の肩書については解説した方が良いんじゃないのか？　あと、単純に意味が分からん部分もある……」
読み終わったアスクレピオスはこう言った。誰かに提出する文書のようなので、若干身内のみの用語を使っている部分が引っかかってしまったのだ。
「そっかー。それじゃあ」
そこからカチャカチャとキーボードを叩くマスター。更に一枚の用紙が印刷された。

○用語解説
・聖杯組、上級聖杯組
マスターから聖杯を貰ってレベルの上限突破をした鯖達。特に、レベル１００まで上がり切っている鯖達を上限聖杯組と呼ぶ。
水着メルトリリス（９６レベ）と佐々木小次郎（９６レベ）が聖杯組に該当。そして、イアソン、アタランテ、アタランテ・オルタ、メルトリリス、ヘラクレスの五名が上級聖杯組に該当する。
・功労者
聖杯こそ与えられていないが、聖杯組に引けを取らない活躍、貢献をしている者に敬意を表してマスターから与えられる名誉職。主にカルデアの最初期のメンバーに与えられる。
ネロ・クラウディウス、オジマンディアス、アーラシュが該当する。
彼らは具体的なＶＩＰ室などは用意されない一方、結婚式の時などの催事やマスター不在の緊急事態などに特別な権利などが与えられる。
・準功労者

功労者ほどではないものの、比較的初期から大きな活躍をしている鯖達。ほぼマスターの主観で与えられる為、特に権限や待遇に変化はない。強いて言うなら、聖杯組でもない功労者でもないのに要職に就いている鯖達へマスターからの権利の証明書・箔、お礼みたいなものである。

アスクレピオス、長尾景虎、アシュヴァッターマン、レオナルド・ダ・ヴィンチ（ライダー）、パラケルスス、メディア、ナーサリー・ライム、エミヤ・アサシンが該当する。

本当はマスターはもっと増やしたいようだ。しかし、マシュから「功労者さんの価値が薄れてしまいます」と言われ抑えている。なおこのマスター、マシュには「特別功労者」という訳の分からない職を与えようとしていた。

・選抜組

準功労者同等、特に権限に変化はない。しかし、高難易度クエストなどにマスターが好んで選抜するので特別な共通部屋を使える鯖達。なお、聖杯組は佐々木小次郎以外が全員属している。

具体的なメンバーは以下の通り。

・イアソンを始めとする「アルゴー号ゆかりのもの」属性を持っている鯖。

・メルトリリス、アタランテなどの「ＣＶ早見沙織」の鯖。

めったにガチャを引かないマスターが奮発するのは、彼らに該当する鯖がピックアップされた時である。

「どうかな？　結構うまくまとまった気がするけど」

「マスター、無駄に正直に書き過ぎだ。こうやって見ると、如何に僕の生前の仲間が大切にされているかが嫌と言うほど分かるね」

「ただ、イアソンはともかく他の聖杯組はこの作品での出番は待遇の割には出てこないと思うぞ。第一、私のようなＣＶ早見沙織組は全員バージョン違いがほぼ同格に扱われている為使い分けが出来ないからな。そして、ただでさえＦＧＯで壊れている姐さんのキャラをこれ以上壊したくもないと言っているしな」

アタランテの補足説明。アスクレピオスには理解できない話だが、まあ問題ないだろう。
「さて、とりあえず今回はこんな感じでいいかな。気が向いたらまたこのような感じでマスター＋アスクレピオス＋ＣＶ早見沙織鯖の三者体制でメタ回をやっていきたいと思います」
「この作品は、マスターの独自設定を多く含んでいるからな。これで汝ら読者諸君の手助けになればと嬉しい」
「それでは」
「お読み頂き、ありがとうございました!!」
どこか部屋の壁に向かって礼をするマスターとアタランテ。アスクレピオスは宇宙に放り投げられた気分だ。

第二部：竜の魔女、終われない夏の蜃気楼

面倒な訪問者

自身が結婚をする事で、人間関係で何が変化するか？　社会人なら、金銭管理がきつくなるや門限が発生するなどあるだろう。しかし、ここはカルデア。門限やらお金やらの問題は事実上存在しない。

ではどうなるのか？　答えは簡単。

結婚相談所職員としての仕事が舞い込んでくる、である。

「それで、どこの怪我もしていないにも関わらず一体何の用事何だい？　冷やかしに関してするのなら適当にイアソン辺りを捕まえて……」

「……　紹介して欲しいのよ。ブーティカを！　私の将来の為に」

昼下がりの医務室。いつものように仕事に勤しむアスクレピオスの元にやって来たのは思いもよらぬ女だった。

「……　順を追って説明して貰おうか。何故直接彼女にではなく僕を経由するのか、ジャンヌダルク・オルタ？」

漆黒のオーラ身にまとうこちらの魔女、ジャンヌダルク・オルタ（水着）。いつも落ち着かない様子だが今回は特に落ち着きがない。

「あああんたを含めれれれ恋愛のアドバイスをして貰おうと思っただけよ。悪い？」

「悪くはないな。さしずめ、あのホムンクルスを別所の聖女に取られると思って焦っている所か。で、後ろ盾なり助言なりを求めて僕を巻き込んだってところか」

若干呆れ気味のアスクレピオス。彼女の事情は彼でなくても周知の事実だ。むしろ、何故自分達より先に結婚しなかったのか不思議に思うくらいだった。

「……　～!!」

顔が真っ赤のジャンヌダルク・オルタ。今更な訳だが本人からすれば衝撃だったのだろう。
「とりあえず、まずブーティカに取り次ぐのなら一向に構わない。マスターに話せば、彼も全力でバックアップしてくれると思うぞ。あとは、イアソン辺りも手を貸してくれ……」
「そ、そうじゃなくて！」
ガバッと立ち上がるジャンヌ。何かあるのだろうか。
「あいつの、好物とか、欲しい物とか教えなさい。それはあんたにしか出来ないでしょ？　その後、ブーティカに会わせてくれればそれでいいわ！」
身振り手振りが溺れた人同然なのだが、言わんとしている事は伝わった。
「ジークの好きな物か……」
手元のパソコンを軽くいじり色々と考えるアスクレピオス。何か当てがあるのかもしれない。
「……保証はない。如何せん、彼は交友関係はまあまあある一方で大抵が追加メンバーだったり臨時招集だったり。悪く言えば数合わせ感が否めないんだ。だから、以前とあるサーヴァントから聞いたちょっとした話だ」
いつになく前振りの長い医師。それほどまでに確証がないという事だ。
「恐らく、彼の好物はこれだろうな」
彼の出した画像は一見的外れそのものだった。
「こ、この時期にこんなの出したら怒られるわよ！」
当然、ジャンヌも怒る。
「だから、僕はこれくらいしか分からないという事だ。詳しくはブーティカに聞いてくれ。連絡は既につけてあるから食堂に行けば大丈夫のはずだ。後日、追加情報を渡すから安心してくれ」
彼の限度はこのくらいである。まあ、これでも頑張った方だろう。何せ、唐突な訪問だった上に難題なのだ。数日後には、これの数十倍のデータを彼女へ送ることになるだろう。

「……若干怖いけど、期待しているわ。ただし、人を逆なでするような言葉は止めてよ。以前情報漏洩とかが相まって大惨事になりかねないからね」
「はいはい。最近は医務室に電子ロックが入ったから抜かりはないから平気だ」
パソコン作業を再開し、アスクレピオスはジャンヌダルク・オルタ（水着）を見送った。ジャンヌはそんな彼を横目に医務室を後にした。

「……さてと、とりあえず彼に連絡を取ってみるか」
トレーニングルームの佐々木小次郎へ業務メールを送り、彼は返信を待つ。その間、マスターから頼まれた薬品のデータのまとめに入る。
「……ここまで早く動き出すとはなあ。マシュが依然見せてくれた資料によれば、このままだと修羅場が至る所で発生してしまう」

訪問とカレー

マスターから孤独と言われたアスクレピオスとて、情報収集を出来る程度には人脈はある。そして、今回の求めるデータに関してカルデア内で本人以外で最も政界に近い答えを持つ人物目当てに連絡を送った訳だが……

「……　返事、早すぎやしないか？　あ、そういうことか」

三分足らずで小次郎から返信が来る。内容はいたって単純、「ここにはいない、現在は食堂にいるはず」と単調な文面であった。そして、更にもう一文。

「既に食堂には連絡をしてある、か。それをこんな短時間で済ませるとは、流石聖杯組」

軽く伸びをして、アスクレピオスは立ち上がった。これを理由に、妻に会いに行くのも悪くないと考えながら。

食堂に彼が着くと、いつになく良い匂いがした。そして、昼食には大分早いにも関わらず随分と賑やかだ。

「もう少し塩を加えた方が良いな。あと、煮込み料理は根気勝負だ。もう少し弱火にして時間をかけた方がいいな」

「なるほど、流石副料理長。レシピにある通りやっているだけではなく、状況を見ながら色々変えるんだな。非常に参考になるな。助かる」

カレーだ。エミヤがジークフリートに料理を教えている様子。目を瞑っていてはどちらが話しているかも区別することが出来ないが、まあそんな事する人物もいないだろう。

「あら？　来たのね、アスクレピオス。医者稼業以外でもお仕事だなんて、お疲れ様」

「大したことないよ、ブーティカ。基本は一人仕事だから、良い気分転換になるからな」

新婚と言うよりは熟年夫婦のような会話の二人。しかし、互いに仕事がある。

「ジークフリート、メールで来たであろう件なのだが……」
　そして、今回の目当てはジークフリートである。
「アスクレピオス、もう少し待ってくれ。そろそろカレーが完成しそうなんだ。『料理は最後までやり切るべし』と言うのが副料理長の教えだからな」
　おたまと包丁をガシャガシャと動かしながら答えるジークフリート。完成間際になぜ包丁を握っているのかは理解できないが、まあ手が離せない事は確かだろう。
「ふむ。じゃあ待っている間に……」
「はい、紅茶」
「ありがとう」
　そのままブーティカの出した紅茶を飲むアスクレピオス。夫婦としてのイレギュラーな日常なのかもしれない。
　そして数分後。
「アスクレピオス、カレーが出来たぞ。お待たせしてしまって済まない」
「気にするな、急に頼んでしまったのは僕の方だからな」
　ブーティカと話していた時、アスクレピオスは緩やかな目だった。しかし、ジークフリートの声により仕事モードへとスイッチ切り替えをした。
「とりあえず、医務室へ案内するよ。色々見せたいデータもあるからな」
　椅子から立ち上がるアスクレピオス。
　さて、情報収集だ。彼自身の恋愛でひと段落しても、彼の恋の病治療は続いていくのだ。

食堂の木霊

さて、医務室に移動したアスクレピオスとジークフリート。正直、医者はこの竜殺しがメールの内容をどこまで把握しているか不安はあるので確認から入る。

「ジークフリート、メールの内容は大丈夫だよな」

「問題ない。あのホムンクルスの好物についてだろ？」

ジークフリートは頼りがいのある口調だ。事態の重要性は彼なりに把握しているようだった。

「で、彼の好物に当てはあるのか？　僕はこれだと考えているのだが……」

ジャンヌダルク・オルタにも見せた画像をアスクレピオスはパソコンに出す。

「どれどれ？　これは、二番目だな。一番好きなのはこれと似ているのだが」

ふむふむと竜殺しは画像を見て、少しだけ彼のパソコンの検索エンジンを動かした。

「一番はこれだな。しかし、思った以上にアスクレピオスの予想が当たっていたことには驚いた。どのように調べたのだ？」

「単純に、以前皆でトランプをした時の雑談からだ。職業柄、人の食生活に関して記憶容量が多いものでね。それを元に検索してみただけだ」

ジークフリートとアスクレピオスの堅実な会話。そう言えば、この医神は通常の同僚と会話するのは久しぶりのように感じた。

「とりあえず、ジークが一番好きなのはこれで良いのだな？」

「ああ、間違いない」

「了解した。ところで、お前は何か困って居たりはしないか？　こちらも協力したいが」

「うーん。俺は特にないな。ただ、一人助けて欲しいサーヴァントがいる。彼女なのだが……」

ジークフリートがこそっと告げた人物は、ジークフリートともアス

クレピオスとも縁のない人物だった。

さて、あれから二時間後。アスクレピオスは数日ぶりにカルデア全体の昼食に顔を出した。現在は、全体の約半数が顔を出している状態か。忙しそうに盛り付けをするブーティカに軽く目で合図を送ると、ブーティカが軽い目配せをしてくれた。「対象は食堂にいる」という合図だ。

そのまま辺りに目を凝らすと、食堂の隅に彼女がいた。

「ジャンヌダルク、僕からの追加情報だ。多分、どちらも作れば喜ぶだろうから追加で出したこっちを先に作ってその後に午前中言ったものを作ると良い」

一枚の紙をジャンヌダルク・オルタ（水着）の前に置くアスクレピオス。炒飯をモフモフと口に入れていたジャンヌはチラッとその髪を見て眉をしかめた。

「……これ、本当の本当にあっているんでしょうね？　余りにも追加って割には内容が似ているから疑っちゃうレベルなんですけど」

「ジークフリートも保証してくれるんだ。それで駄目ならもう僕が君に助太刀できる要素はない」

そう残すと、彼はジャンヌの元から立ち去った。元よりまあまあ内密で行っていた事項な上、これ以上ブーティカ以外の女性と絡むのは外聞が悪い。

「……医師殿は、竜の魔女殿の補佐に入っていますかー。忙しそうですねえ。さてさて、あちらのご様子は？」

遠巻きに彼を見ていたのは長尾景虎。長い付き合いだ、見ただけで彼の言動の内容は概ね把握しただろう。そして、そのまま視線を食堂の中央へと移す。そこには見ているこっちが胃もたれしそうな勢いである男に堂々と甘えるネロ・クラウディウスの姿があった。

「交渉の決裂以来、彼女とは話していませんがねえ。果たして暴君は妻として愛されるのでしょうか？」

若干皮肉めいた感想は、景虎の過去に置き去りにした己にも突き刺しているのかもしれない。

試食じゃ話は進まない

「ホムンクルス！　今日はあんたに毒見役をやってもらうわよ！」
アスクレピオスが情報を提供した次の日の昼下がり。ジャンヌダルク・オルタ（水着）はジークを呼び出し料理を食べさせようとしていた。
目の前には、夏場とは思えない熱々のビーフシチューが置いてある。
当然のように、ジークは絶句している。
「こ、これは一体。バーサーカーのルーラー、食べて良いという事か？」
「勘違いするんじゃないわよ！　毒見よ毒見！　今度大掛かりに振舞う訳だからその前座よ！」
ジャンルの声はジークの反応回数に比例して大きくなる。そして、いつものように顔は紅潮していった。
「すまない……」
そう言って、ジークはスプーンで綺麗にビーフシチューを食べ始める。そして、ジャンヌは驚いた。
彼がいつになく嬉しそうな顔で食事をしている事を。
「美味い、美味いぞルーラー！　まさか、俺の大好物をこんな形で味わう事が出来るとは！　感謝するぞ！」
子供のような笑顔をしたジークにジャンヌの赤面具合が増す。
「っっ!!　毒見なんだからね！　けど、今後あんたが望めばまた作ってやっても良いわよ。ホワイトシチューも作ってやるから、毎回好きな方を選べばそっちを作ってやるわよ！」
その言葉を残し、彼女は空になったお皿を片付ける。射っぽいのジークは美味しさの余り意識が空へと飛んでいってしまった。
「……　これで、あいつのとこに行く回数減るかしら？　いくら何でもこっちのジークは、あいつにだけは譲れないんだから！」
気迫こそ魔女そのものだが、考えている事は女子高生。守るべき誇りと意地は、遠い彼方の同族への嫌悪そのものな訳だが、それが空回

りの原因なのを知る事は暫く先だろう。

研究データの分析は、一朝一夕で終わるものではない。アスクレピオスは「改良型素材透過材」の研究に頭を抱えていた。

「こんな事するならクエスト出撃回数を増やせばよいのに。いや、出撃リソースにも限りがあるか。てか、これ指摘したら今度は『カルデアの出撃用魔力リソースの効率化』と言って色々削られるかもしれないからな。言わないに越した事はない……」

完全に独り言発電機となる医師の元へ一通のメール。食堂からだ。

「ブーディカからの作戦報告、か。えー何々。『作戦大成功！　彼は大喜びでシチューを食べたわ』か。それは良かった。あの魔女さんが赤っ恥かいて燃やしにかかって来ちゃあ命に関わるからねえ」

一息胸をなでおろす医者。とりあえず、頼まれた任務は果たした訳だ。

「あとは、彼女が見えない敵をいつ存在しないと認識するかだなあ。彼も彼で変な方向に拗ねたりしなければ良いのだけれども……」

彼自身もこの先の展開はあまり分からない。これから二人に関わるかどうか微妙だが、見守っておこうと考えるアスクレピオス。いったん伸びをして、軽く休憩に入るのだった。

ホムンクルスと別の地の聖女

「紅茶を入れて来るか。一度私室に戻るとしよう」
休憩がてら、隣の私室へと移動するアスクレピオス。ここの移動でも電子ロックをかけなければいけない為、内部ドアの設置を今度頼もうと考えながら外に出る。すると、そこには先ほど頭に浮かべていた人物の姿があった。
「あ、アスクレピオス」
ジークだ。彼は気さくとは言い難いが挨拶を平等にしてくれるので違和感はない。
「やあ、ジーク。今日も周回お疲れ様のようだな」
「今日は午前中のみだった。これから少しお出かけをする」
「そうか。気を付けてな」
そして、お出かけと言う概念がカルデアにあると言う事にも違和感がない。
そのまま管制室方面に向かうジークをアスクレピオスは見送った。
「さて、成功したと言っても彼の行動に変化話あまり見られない、か。これは、どっちかが折れるか気が付くか拗ねるか何かしないと大変んいなるかもなあ……」
頭をかきながら私室へ入る医者。嫌な予感と言うよりは、もう嫌な未来しか見えないのだった。
現に彼は感じていた。紅茶を取り医務室へ再び入ろうとした直後、暗炎のオーラが彼の背中をかすめたという事を……

管制室に入ってコフィンよりさらに奥。そこには「フレンドゲート」と書いてあるドアがあった。
隣にある名簿に名前を記入し、彼はその中へと入っていった。
「やあ、御機嫌ようルーラー」
「こちらこそ御機嫌よう、ジーク君。今日はいつもより元気みたいですね、いい事ありました？」
ジークを出迎えたのはフレンドのジャンヌ・ダルク（ルーラー）。フ

レンドからは聖杯を受け取っている好待遇のサポートサーヴァントである。
「バーサーカーのルーラーがビーフシチュー作ってくれたんだ。とても美味しくて、食べ終わった今でも笑顔が零れ落ちてしまうんだ」
笑顔で語るジーク、まるで夕飯がカレーの時の小学生男子だ。
「ふふ、良かったですね。私は今日もマリーとお茶会をしていましたよ。ほら、こちらにお座りになってそこで使った茶葉をご堪能下さい」
ジャンヌは白いテーブルに座っている。背景の白さや彼女の衣装の白さも相まって見えずらいが支障が開出るレベルではない。
「ああ、いつも済まないな。君がくれるものは何でも興味がわく。飲食物は美味しいし、本や写真もこちらのカルデアではないものばかりだ。いつもありがとう」
「気にしないで、私が好きでやっている事だから。それに、ジーク君の話も面白いですよ。貴方のカルデアではかなり奇妙な関係性も生まれているようですし」
ニコニコしながらジークと話をするジャンヌ。彼女のいるカルデアは職場恋愛はあまり進められていないようだ。まあ、それが普通なのだが。
「俺にとっては俺のいるカルデアこそ普通だからな。外から見た意見と言うのは本当に為になるな」
こうして、ジークの午後は緩やかに過ぎていった。互いのカルデアの世間話をする。それぞれ自分の話す内容はいたって平凡ではあるものの、相手からすれば新鮮なネタなのだった。

「それじゃあ、夕飯の時間だ。今日もありがとう」
「ええ、また明日ですね」
シンプルな別れの挨拶は信頼の証。二人は明日もこの揺らぎしかない空間で待ち合わせをするだろう。それがジークとジャンヌの日常なのだから。
ドアを開けて管制室に戻って来たジーク。名簿の「帰還済み」欄に

チェックを入れて食堂へ向かう。
しかし、今日は夕飯にありつけるのは遅れそうだ。間食があったので問題はないが、まさかそれを提供した本人に足止めされるとは思いもしなかっただろう。
手から炎を繰り出しているジャンヌダルク・オルタ（水着）、いち早く動き出したのは彼女だったという訳だ。

溢れ出した感情

「……バーサーカーのルーラー、昼間はどうも御馳走様。何か用か？」

彼女がなぜここまで起こっているのか理解できないジークは、とりあえず世間話を持ち込む。しかし、話題も含め彼女に燃やされた。

「あんたねえ、今日もあの女のとこ行ったの？　こっちのカルデアの人間なのに？」

「マスターには一番最初に許可は取ってある。他のサーヴァントも自由時間を使って他のカルデアや共同空間に出向く者もいる。俺がお前におれこれ言われる理由が分からないのだが？」

彼は怒ってはいない。ただ、困惑している。彼女が自分に怒る理由も、彼女が何かと自分に色々と世話を焼く理由も分からないからだ。

「そ、そんなことは分かっているわよ！　けど、あんたはこのカルデアの全体キャスターとしての責務があるでじゃない！　そんな毎日のように外出してててどうするのよ!?」

彼女の怒りにはあまりも筋が通っていない。彼女の真意は、本来よく分かる。しかし、ジークは分かっていない。理由はいたって簡単、単純な人生経験不足なだけだ。そして、ジャンヌも人生経験は実質二十年弱。経験の浅い二人が上手に互いの意思を読み取ってコミュニケーションなど取れるはずがない。

「……バーサーカーのルーラー、お前は俺に何を求めている？　俺のやる事を頭ごなしに批判されても……」

「私の名前は、ジャンヌダルク・オルタ！」

いつものように困惑するジーク。普段なら、そこで訳も分からず文句を言って立ち去るジャンヌだが、今日は違った。

「いつもいつも、あんたは私の事を『バーサーカーのルーラー』と言う！　私のオリジナルを基準に話す！　そんな女はこのカルデアには存在しない！　だから、ジャンヌは私だけなの！」

ジャンヌの怒りは次第に涙へと変化し始めた。奥底に封じ込めた邪な感情が遂に限界容量を超えたのだろう。

「バーサーカーのルーラーだなんて不名誉極まりない呼び方、あんたにだけは言われたくなかった！　けど、そこでキレればそれこそあいつに白旗を挙げるようなもの。だから他の小さな部分であんたに怒って気を紛らわせていた。けど、もう限界。あんたにぶつけたい想いがいっぱいあるんだから！」

手にかざした炎を納め、トコトコとジークの元へと歩み寄るジャンヌ。小さく彼の服の袖をつかむ。

「ルーラー、泣いているのか……」

目線を合わせて彼女の表情を確認しようとするジーク。

「こっち見たら焼き殺す！」

ジャンヌ渾身の悲鳴に似た叫び。思わずジークの体もビクッとなる。

「そ、そうか。じゃあ一度俺は食堂に……」

「私から離れても焼き殺す！」

再び彼女の叫びが管制室に響く。

「……」

「……」

静寂とは相反した一点からの奇妙な熱気。あと数分は、この状態が続くだろう。

繋がりの食堂

夕時の食堂、ブーディカを中心に複数のメンバーが手際よく料理を回し百を超えるサーヴァント達に絶え間なく食事を提供している。そんな彼女達だが、今日は若干調理に集中できていない。理由は、食堂の端にあった。

「……おかわり」

殺気とかそういうレベルでない勢いでキッチンの食料を食い尽くす乙女がいたのだ。ジャンヌダルク・オルタ（水着）である。ジークに寄り掛かって秘かな涙を流した数分後、彼女か彼を突き飛ばし逃げるようにヤケ食いに走っていた。

「何があったかは知らんが、食べ過ぎは良くないぞジャンヌダルク。悩みがあれば誰か適切な人物に相談するべきだぞ。あとは、図書館なりで求めている内容を調べてみるとか……」

「いいから黙ってて！　私はあんたには分からないイライラと戦っているんだから！」

忠告をするエミヤに対し、八つ当たり同然の反応をするジャンヌ。エミヤにとっては日常茶飯事なので気にしていないのだが、それもまた彼女をイライラさせる要因でもあった。

「どうせ、あのホムンクルスの事で気に食わない内容があったのだろう？　君は自覚がないと思うが、君たちの恋路に関してはあの医者と料理長の恋愛譚以前から話題だったからな」

「!!?　どどどどうしてそんな話題になっているのよ!?　私もあいつも互いの話なんて人前でしていないはず、ただあいつがいる時に私がイライラしているだけなのに！」

「その君が彼に色々とイライラしている部分、傍から見ればただの照れ隠しにしか見えないのだよ。実際、君は彼に惚れているだろうから間違っていないはずなのだが……」

「だから黙ってて！このまんまだと、この憎悪の炎で食堂の食べ物を燃やし尽くすわよ！」

ツンデレは、こじらせると他人に被害をもたらす。彼女はそのリス

クを身をもって示してくれている。そして、エミヤはその様な女性に対してもある程度心得がある。
「それは困るな。君に始末書を書いて貰うような事をしては彼も悲しむ。引き下がるとしよう」
　こうして、エミヤはキッチンへと戻った。
　そんな彼と入れ替わりで来たのはブーティカ。山盛り一杯の炒飯と一緒にだ。
「あらら、随分とご機嫌斜め見たいね。けど、愛しの彼は余りに物ショックで医務室の夫の所まで駆け込んでいるわ。一体何があったのか、私は知る由もないけどさ。明日になったら自棄(やけ)にならずにちゃんと話をしなよ？　今日は一杯食べさせてあげるからさ」
　彼女は甘やかすつもりも厳しく接するつもりもない。ただ、同じ一人の女性として声をかけているという事が大事だと思っての行動だ。
「……今夜、少しだけ時間頂戴。色々、教えて欲しいことがあるの」
　炒飯を口に運びながらジャンヌはボソッとこう言った。
「いいよ。私で良ければいくらでも助けてあげる」
　ブーティカは優しく微笑み、彼女の元を離れることとなる。料理長として、まだまだ仕事は山のように残っているのだから。
「あの魔女、本格的にあのホムンクルスへ求愛するようじゃな。なら、余も後れを取ってはおれぬぞ。はてさてパライソ、準備は出来ておるか？」
「はい、全て手筈通りに」
　そんなジャンヌは現在誰もから注目を浴びていたのだが、ここに強く彼女を意識している者が二人。皇帝とくのいちである。
「しかしネロ殿。魔女殿の動きに便乗する形でよろしいのでしょうか？　下手な動きをすれば、拙者たちにも予定外の不祥事が訪れる気がするのですが……」
「何、心配はいらぬ。ハプニングを乗り越えてこそ、愛の女神は余たちに微笑むのだ。自信を持って受け止める心意気で大胆に動かねばな！」
　若干ジャンヌからとばっちりを食らうリスクを憂うパライソとそ

れすらも構えるネロ。しかし、彼女たちの後ろには一人の影が。
「愛の女神、と呼ばれた様な気がするのですが……」
「き、気のせいじゃ！　お主の事は読んでおらんし話題にも出しとらんぞ！」
何という事だろう、アムール（カレン）が忍び顔負けの速度でネロたちの後ろに張り付いていた。流石の皇帝もこれには動揺を隠せなかった様子。
さて、この女神は恋愛の渦の中にあるカルデアに置いてどう動くのやら……

時間と決断

「結局さあ、私自身分かっていないのよ。湧き上がるのは他の女と話している奴への嫉妬と私の事を何も考えていない奴へのいら立ちだし」

あれだけの夕食を腹の中に入れたにも関わらず、ジャンヌダルク・オルタ（水着）はブーディカから出されたコーヒーをがぶ飲みしている。

「……そこまで分かっているなら、あと一歩なんじゃない？　私が思うに、彼もキミの事は少なくとも好意を持っているのは明らかなんだしさ」

お代わりのコーヒーを新しく挽いているブーディカ。アスクレピオスと同居するようになってから、彼が紅茶を好む影響もあり彼女自身もコーヒーを飲むのが久しぶりだ。

「……あいつがさ、私に好意を持っているのは分かってる。けど、私はあいつの恋した『ジャンヌダルク』のオルタナティブで更にその派生形態のサーヴァント。本当にあいつが好きなのは、私じゃないって事ってくらい分かってるのよ。だから、どうすればいいのか完全に分からないのよ……」

頬杖をついたジャンヌは乙女と言うよりはもはや婚期を逃した淑女だ。ならば、そんな彼女の話を聞くバーのマダムだろうか。明らかに見た目年齢には反しているが……

「とりあえず、次会ったら何て話すの？　このままだと、彼とは変な形で喧嘩別れになっちゃうよ」

「……けどさ、これ以上気まずい関係になる可能性だってあるでしょ？　あいつが好きなのは私ではなく本家の私、この私では勝ち目何て……」

「これ、彼に関する資料。マスターからアスクレピオスが借りてくれたんだ。呼んでみて」

黒い表紙の本を彼女の前に置くブーディカ。おもむろに本を手に取り、一ページ開いたジャンヌ。そして、一分目に目を通し始めた時

に凍り付いた。
「……あいつが、偽物？」
「厳密には、彼は今でもルーラーの貴方を待っているわ。そして、カルデアでマスターを助ける為にジークは『端末』をここに送り込んだ。それが彼って事。つまり、彼もまたキミと同じく『派生した』サーヴァント。遠慮する要素はないんじゃないの？」
マテリアル等でマスターは知っている内容ではあるジークが端末という事実。しかし、サーヴァント同士ではあまり知られていない内容も多い。そして、マテリアルの内容には情報開示請求が必要。準功労者のアスクレピオスならスムーズに申請で来たという事だ。
「……その辺を踏まえて、明日もう一度あいつに話をする。私たちの今後について」
彼女はボソッと決めた言葉を口にした。暗黒の炎はようやく落ち着きを取り戻した。そして、ずっと手を伸ばし続けた魂へとたどり着こうとしたのだった……

「……バーサーカーのルーラーは、俺に何を求めているのだろうか。未だによく分からないんだ」
「うーん、本質はいたって簡単なんだけどなあ。とりあえず、これを飲め」
一方のお隣、医務室。アスクレピオスはジークに紅茶を差し出す。ゆっくりと飲むジーク、その眼は心なしか、曇っている。
「簡潔に言おう、ジャンヌはお前に惚れている。お前はどうなんだ？」
「……俺も、バーサーカーのルーラーには好意を持っている。しかし、端末である俺が本体の意志に背くような気がして気が引けるんだ。あいつからの好意には薄々感づいていたが、どうすれば良いのか全く分からなかったんだ。アスクレピオス、俺は一体どうすれば……」
紅茶を持つ手が震えている。色々未知なる事象に不安があるのだろう。
「一度、二人っきりでレイシフトでもしたらどうだ？　お前が首を縦

に振れば、僕の方からマスターに手配する」
「……　頼む。このまま他のメンバーに迷惑をかけ続ける訳にはいかないからな」
　話は決まった。行先は、ジャンヌの故郷オルレアン。しかし、不測の事態は浸出液。作戦と策謀が管制室で交わった時、三つの恋路が湿り気のある螺旋を生み出す。

フランスの森

周りには誰もおらず、この森は今だけ二人の聖域と化していた。エネミーが来ようがレベルが聖杯なしの上限に達しているので痛くも痒くもない。今なら、彼と思い切った話を出来るとジャンヌダルク・オルタ（水着）は考えていた。そう、隣にいるのがジークなら。

「……おやおや、カルデアとの通信も遮断されてしまいましたねえ。これは、黙って何もせずにいるのが得策ってやつですかい、常夏のお嬢さん？」

「何でそんなに？気なのよ、燃やすわよ！」

「おやおや、仮にもここはお嬢さんの故郷じゃあないですか、燃やすなんてそんな物騒な事はしないで下さいませ」

ジャンヌと話をしているのはロビンフット。どうやら、カルデアにて彼もレイシフトを予定していたようでスタッフの手違いが発生したようだ。しかし、ロビンはいつものレイシフトのように落ち着いている。

「まあ、オレは単独行動Ａなんでね。多少カルデアから魔力リソースが届かなくても一切問題ない訳ですよ。それに、ここはカルデアの面々にとってはちょっとしたお隣さんみたいな場所。むやみやたらと怖がる必要もないと思いましてねえ」

そういうと、彼は懐から電子タバコを取り出して一服する。最近、サーヴァントの健康向上の為に研究部が開発した一品だ。

「……誰とレイシフトする予定だったのよ？　あいつと間違えるって事はあんたも女関係？」

一方のジャンヌ、状況の整理の為に質問を始めた。以前のアスクレピオスとブーディカの件以降、恋愛に対して積極的な動きを見せているのは自分達だけでない事は理解している。

「ジャック・ザ・リッパーですな。なんでも、ロンドンで見せたい物があるんだそうで」

「ふーん。あの子がねえ……」

タバコを吸うロビンとただ気にもたれ掛かるだけのジャンヌ。傍

から見れば非常に絵になるアングルだ。
「何か思う所でもあるんですかい？　女性陣のコミュニティに関しては、オレも知らないんでねえ」
「レディーとレディーの秘密よ。あの子もここに来てそれなりなんだし、相談でもあったんじゃないの？」
　心理戦、と言うには余りにも浅い会話だ。しかし、彼かの会話の目的は探り合いではなく単なる暇つぶし。他愛も無いレベルの方が気を張らずに済むので好都合だ。
　しかし、彼らにとっての地獄はここからだった。
「おーい、緑のアーチャーよ！」
「？　おや、皇帝サマ。あんたもはぐれボッチですかい？」
「うむ、アサシン・パライソ、パラケルススと共に独自の連携訓練をするつもりだったのだがレイシフトの際に手違いが起こったようでな。こうしてフランスに来てしまったのだ」
　ネロ・クラウディウスだ。格好は二人と違って完全な戦闘モードだ。
「ネロ、今回はレイシフトでの手違いが何個も起きているって事？　システムの障害？　人為的トラブル？」
「まだ分かっておらんだろうな。とにかく、街に出て食料を確保しよう。万が一があった際に、腹が減っていてはワイバーン相手でも苦戦するだろうからな」
　行動力の化身とはまさにネロの為に作られた言葉だろう。ロビンの手をがっしりと握って森の出口へと歩き始めた。しかも、その握り方は……
（こ、恋人繋ぎ!?　もしかして、これからとんでもない泥沼に巻き込まれるんじゃ……）
　慣れた実家のような場所で冷や汗を書き始めるジャンヌ。このカルデアに所属している限り、自分の恋路を解決するには他人の恋路を避けなければいけないという意味なのだろう。

修羅も温い争奪戦

　オルレアンの街で何気ない買い物をこなすネロ・クラウディウス。右手でテキパキと商品を買い、左手はロビンの手をガッチリと握ったままだった。
「皇帝サマ、一体そのお金はどこから調達したんですかい？　以前からここに遠征していたとか？」
「いや、先ほど軽く金を賭けた決闘を行っただけだ。負ければ体の提供だったが、まあ負けるような賭けはせんからほぼノーリスクで少し儲けたもんよ！」
「……オタク、少しは己の立場と言うか。乙女の体裁というかねえ……」
　余りにもサラッと自分の体を賭けると言われ若干呆れるロビンフット。彼のレディーファースト精神は無論昔馴染みのネロにも適応される。
「良いのだ、余は奏者とお主くらいにしか気を許さん。さあ、唐突に訪れた購買の遊戯を楽しもうではないか！」
「はいはい、とことん付き合いますよ。こうなった皇帝サマは誰にも止められない愛らしさなんですから」
　キラキラ輝く彼女の笑顔に押されロビンフットは一度トラブル状態かだという事を忘れるようにした。それこそ、彼女に対する一番のエスコートだからである。しかし、
「なーにイチャイチャしてんのよこのお間抜けバカップル！　今カルデアとの通信が断絶しているでしょうが！」
　冷やかしどころか本気でバカップルと叱るジャンヌダルク・オルタ（水着）。まあ、本来彼女はホムンクルスと実質デートの予定だった訳だからしょうがないと言えばしょうがない。
「何を言うとるか！　楽しめる時に楽しんでこそ真の乙女と言うもの、お主もあのホムンクルスとイチャイチャベタベタすれば良いではないか？」
　煽っているのか天然なのか分からないが、ネロは完全にジャンヌの

怒りのツボを刺激している。
「あんたねえ、私が今日なんでレイシフトしたのか知ってて言ってるんじゃないでしょうねえ!? このトラブルのせいで私の一世一代の決意は台無しよ!」
既に彼女は手元に暗炎を構えている。最近、彼女の気が休まる時間がないせいか沸点が非常に低くなっている。
「ふむ、お主は思った以上に余裕がないと見える。これは、プランにはなかったが願いを叶えてやるか」
ある程度増えた買い物の戦利品をチョンと突くネロ。すると、その産物の累々が一瞬にして消えた。
「え!?」
「おいおい、皇帝サマ?」
これにはジャンヌだけでなくネロの奇行に慣れているロビンも言葉が上手く出なかった。
「……余だ。ああ、頼む。うむ、抜かりはない……」
そして、彼女は右耳に右手を当てて誰かと通信している。そこから一分も経たずに……
「ジャンヌ、このチップを渡しておく。まあ、いざとなったらここからデータを読み取って行動をしてくれ」
そんなまま自然な流れでジャンヌに渡されたのは片手サイズのディスプレイ。一体、このカルデアはどんな方向に魔力リソースを割いているのか心配になる。
「……これ、どうすりゃいいのよ?」
「まあ、成り行きに任せれば自然と幸せが舞い降りるだろう。何、脳を軽くして本能のままに気持ちを吐露すればよい。自ずとここにいる全ての者の幸せに繋がるだろう。ではな、照れ隠しに炎をまき散らすではないぞ」
ネロが軽く指パッチンをする。すると、ジャンヌの周りは青い光に包まれ始めた。
「ちょ、ちょっとあんた!?」
ジャンヌの動揺はますます大きくなる。しかし、この感覚は慣れた

感じがした。
「怖くはない。一種の調整レイシフトのようなものだ。気が付けば、見知った土地で愛しのあいつと一緒の景色を見ているだろうからな」
そうネロがほほ笑むと、ジャンヌの姿は先ほどの買い物の産物と同じく消えていた。
「じゃ、ジャンヌさん？　これはまた……」
動揺するロビンフット。まあ、彼は完全に置いてけぼりだからしょうがないが。そこに、彼女が彼を当事者へと押し上げる。
「弓兵、お主はこのカルデアの『功労者の夫』として生活を送る気はないか？」
彼女の背は低い。しかし、その威厳は皇帝モード以上だ。彼の手を握る左手と、彼の左腕を掴んで話そうとしない右手。ヒシヒシと重苦しい愛がその繋がりを経由してなだれ込んでいるようだ。
「……皇帝サマ、それは一体どういう事ですかい？」
いつもは軽い態度で受け流すようなロビンだったが、今回ばかりは押されている。そして、彼は本能的に勘づいていた。この誰も自分たちを見ていない出先で己の第二の生の先行きが定められようとしている事を。
「もっと簡単に言ってやろう。余と結婚しろ、ロビンフット」
この人通りの中で、二人だけの時間が止まったように見えた。そして、街中は彼の得意とする場ではない。
（参ったねえ、こりゃあ）
右ポケットの中に入っている小さなナイフが、彼の心に重くのしかかる。色男ロビンフットの試練は、ここからが始まりだった。

「……ここは、セプテム？」
ジャンヌダルク・オルタ（水着）の目の前から閃光が消えた後に映ったのは、周回でもほとんど立ち寄らない古の古代王国だった。
「!?　バーサーカーのルーラーか？　何故ここに？」
「……ジーク。あんたこそ、心配したんだから」
駆け寄り方がもはや純朴乙女と化しているジャンヌ。今までのプ

ライドを置き去りにいしている。
「あ、あの。その、ジーク。実は……」
　彼の手を真っ先に握ったジャンヌ。普段の言動とは余りにもかけ離れている為ジークも動揺している。
「ルーラー!?」
「ジャンヌ！　私の名前はジャンヌダルク！」
　遂に、ジャンヌの眼から涙が出始める。
「あ、その、えっと……」
　ジークも、やはり急展開について行けない様子だ。しかし、ジャンヌのかかり出したエンジンは止まらない。
「私は所詮あいつの派生形。だから、ずっと遠慮してた。そして知った、あんた自身も端末だという事を！　だからこそ、私の胸の中にあった呪縛が消え失せた。だから言わせて、私は！」
「ねえ」
「!?」
「!!?!!」
　ジャンヌが肝心の言葉を言おうとした矢先、幼げな、しかし秘められた力のある声が二人の間に入った。
「……　黒のアサシン？」
「わたしたちの事をそう呼ぶのってあなたくらいよ。造られた竜殺しさん」
　ジャック・ザ・リッパーだ。普段は穏やかな顔なのだが、今回の表情はかなり険しい。
「常夏の聖女さん、貴方はさっきまで誰と一緒にいた？　義賊さんは、どこにいた？」
「……　確かに、私はさっきまでロビンと一緒だったわよ。この訳分らん端末でここに飛ばされるまではね」
　良いところを邪魔されてかーなり不機嫌なジャンヌ。しかし、彼女にも事情がある事は察している為答えた。
「義賊さん、誰といた？」
「ネロよ。あの感じ、今にもあいつを我が物にしようって勢いだった

わよ」
「その端末貸して!!!」
ジャックは風のように彼女からディスプレイを奪うと大急ぎで操作を始めた。見るからに、慣れた手つきだ。
「絶対に、渡さない!!!」
そう言ったジャックは軽く指パッチン。その影はレイシフトのように消えていった。
「……ルーラー、じゃなくてジャンヌ。これは一体？」
「……はあ、これじゃ雰囲気も台無しね。色々疲れたから少し休むわ」
「ああ、見張りは俺がするから」
一世一代の瞬間を同僚の危機の為に投げ捨てたジャンヌは町外れの草原の大木の下で横になった。隣には、ジークもいる。
（まあ、私たちは今じゃなくてもいいでしょ。問題はあいつらよね、どっちも長尾景虎以上に強引なんだから。あのチャラアシスタントは苦労するでしょうね……）
目を瞑りながら彼女はこのように思った。そう、このカルデアの恋愛物語。その激戦区は己ではなく皇帝と暗殺者、そして忍びと文学化身の間にあったのだ。

介入

「……どうなっている？　かなり混戦状態のようなのだか？」
「んー、ちょっと待ってね。これはカルデアの内部で何かしらの干渉が入っているようでねえ」
「うーん、これは色々厄介な事になりそうね。応援呼んでくる？」
　こちらは管制室。ジャンヌとジークの一世一代のターニングポイントを見守りに来たアスクレピオスとブーディカである。しかし、見ての通り通信トラブル祭り。技術顧問のロリンチとガヤガヤ話ながら皆で首をかしげていた。
「っというか、今回のレイシフトはあの二人だけではなさそうなのだが？」
　通信トラブルにより、直線コミュニケーション自体は取れていない上に誰がいるかも分からない。しかし、生命反応は各地点で確認できる。そして、その反応数は現在８つ。残りの６名の反応については見当がつかない。
「あー、これに関してはコフィンの履歴を確認すれば出て来ると思うよ。ちょっと待っててねー」
　ロリンチがまたキーボードをカチャカチャする。空中に浮かんだディスプレイには、嫌な予感しかしない面々が浮かんでいた。
「……おい、この面子って」
「おや、何か知っているのかね医師君？」
「以前、マスターに極秘の人間関係を教えて貰ってな。このメンバーはまさしく泥沼の相関関係なんだよなあ」
　以前自分がマスターとマシュに見せて貰った資料を思い出すアスクレピオス。急に頭が痛くなる。
「つまり、私たちの知らない場所で恋愛戦争が起こっているという事？」
「その通りだ、ブーティカ。しかも、その面子にあの女が関わっているから非常に厄介な事になるぞ」
「……同感ね。彼女の事はやはりどうしてもって感じだから」

彼の発言にブーティカも頭を抱える。ここまで来たが、出来れば関わりたくないという顔だ。
「おやおや、これはご夫婦さんも匙を投げるレベルですか。そうなると、私も最終兵器に頼らざるを得ないかもしれないねえ」
ロリンチは何故か二人と比べると気楽な顔だ。
「何かあるのか、技術顧問？」
「なーに、簡単な話だ。反応をキャッチ出来ているサーヴァントたちを強制レイシフトさせて呼び戻すんだ」
『!?』
余りにも唐突な革新技術に二人は絶句した。流石にここまで来るとこのカルデアがどれだけ技術に割いているのか疑問どころかチートレベルだ。
「それ、本当に存在するのか？」
「いや、軽い冗談だ。さすがの私にもそれだけの予算は回らないよ」
「……何故このタイミングで冗談を言う？　そんな性格でもあるまいし」
肩を落としたアスクレピオスに疑問の渦が拡大される。しかし、その渦は一瞬で消える事になる。
「ははは、聖人君子だって稀に冗談を言うだろ？　モヤモヤとした霧を払うには適度なジョークがいい薬さ」
ディスプレイを切り替え、メモ用紙に文字列を書きながらロリンチは作業を続ける。その目つきは、完全に研究者モードに切り替わっていた。
「……ったく、さっきのジョークで多少は気は紛れたのは確かだな。結局、打つ手なしなのか？」
腕を組むアスクレピオス。しかし、先ほどより顔は明るくなった。
「……応急処置でいいから、今からやる事を教えて貰える？　私も、ここまで来て傍観は嫌だからね」
ブーティカも若干だが前向きな表情になった。少なくとも、夫の手を優しく握るレベルには明るく事態を捉える事が出来るようになった。

「うんうん、そうでなくちゃカルデアの中核は担えないよね。しかし、こういう時は『功労者』の人に助太刀を仰いだ方が良いのかもしれないねえ」
「オジマンディアスとネロ・クラウディウス、どちらかに連絡を取ってみるか？　それとも、何か知ってそうな船長に聞き出してみるか。どっちにする？」
　淡々と、助っ人の相談をする面々。しかし、その口調ペースに若干の遅さを感じる。
「……」
「……」
「……」
　そして、三人は急に静まり返った。
「！　来た、オルレアンでネロ・クラウディウスの魔力反応が出てる！」
　しかし、静寂はすぐに破られた。盗聴されている事を前提で自然と容疑者の話題を口に出し、動揺した時の通信を逆探知したのだ。
「この手の大掛かりな犯行は一人では出来ないからね、協力者に連絡すると思ったよ。協力者はロンドンにいるようだ。アスクレピオスはセプテムへ、ブーティカはロンドンにレイシフトしてくれ」
「了解だ、残業代は頂くからな」
「お説教はしたくないけど、しょうがないわね。それじゃ、気を付けてねアスクレピオス！」
　メモに書かれた手筈通りにコフィンに乗り込む二人。ロリンチの頭の回転には色々と驚かされる。
　しかし、あくまこれは修羅場の始まり。そこに自ら首を突っ込むのだから、色々不安しかない訳だが果たしてどうなる事やら……

援軍と潜入

周りを見渡して、彼は懐かしいと思った風景ではなかった。このカルデアがオルレアン攻略をしていた頃、確かにアスクレピオスはカルデアに召喚されていた。しかし、彼に育成リソースが回ってきたのはまだ後の話。周回でも特に回数多くここに来た訳でもないのでほぼ話だけ聞いていたレベルである。

「さて、問題の皇帝さんはどこに居るのやら……　ん？」

しかし、建物の場所は分からなくとも魔力の放出されている場所は一瞬で感じ取れる。

「……　この魔力量。皇帝ともう一人、宝具を開放しているな。しかもこの持続量、対人宝具ではないな。となるとすると、現在この町は劇場と霧で大変な事になっている可能性が高いな」

駆け足で魔力のする方に向かうと、案の定町が大混乱に陥っていた。

「……　さて、実際戦闘に入ると彼女たちに敵わないからな。どうしたものか」

想像通り、街中に疑似固有結界と濃霧が立ち込めていた。そして、この騒動に巻き込まれているであろうあの男の姿も見えない。恐らく、この亜空間の中で動けずにいるのだろう。

『こちら、アスクレピオス。想像の範囲内ではあるが、最も面倒な状況になっている。資料で見せた通り、彼女たち二人が彼を取り合っているとすればだ、僕一人では抑えきれない。応援を頼めるか？』

ロリンチから借りた個別通信機を使い、ロリンチに連絡を取った。ここで突進するのは得策ではない。

『うーん、第一この作戦自体は私達だけで見守りをする予定だったから応援はいなくてねえ。君が何かしらの言葉で呼べそうな人がいるなら連絡してみるけど？』

『よし、船長を呼べ。見返りは近いうちにするであろう奴の部屋の整理作業の手伝いだ』

通信に関して、遠慮なく戦友を呼びつける医師。彼なら問題ないと

いうアスクレピオスなりの信頼だろう。
『了解、三十秒で派遣するから待っていたまえ』
そして、三十秒後。
「……アスクレピオス、俺が女の泥沼を苦手としているにも関わらず何故呼んだ!?」
高速詠唱ならぬ高速レイシフトとは、この為にある言葉だろう。音もなくイアソンがこの町に足を下ろした。
「すまんな、こういう時はお前みたいな起爆剤が必要になる。さあ、行くぞ。難病の治療には電気メスのような僕の時代より危険な道具も必要になるからな」
イアソンの腕を引っ張って騒動の根源へと入り込んで行くアスクレピオス。さて、治療開始だ。

「さてと、まずはこの被害者さんから話を聞こうとしますかね。して、どうしてこうなったんだ。ロビンフット?」
霧の中に入ってすぐ、二人は座り込んでいる弓兵と合流した。
「……概ねそちらさんの予想通りだと思いますよ。オレとネロとでこの町を散策してたら、ジャックさんがやって来た訳ですよ。で、あれよあれよと二人は対決し始めたんですよ」
こそっと電子タバコを吸うロビンフット。見るからに疲れが染み出ている。それを受け、アスクレピオスはこの事件の根源の渦へと踏み入る。
「では、話の根幹を聞こう。各面々のレイシフト先を操作した末に恋敵と大乱闘を繰り広げた最初の元凶さんは、ネロ・クラウディウスだな?」
「……そうだよ。前々から彼女は誰かと隠密に作戦会議していた事を本人がオレに言っていた。何よりレイシフトを自ら操って二人きりになったタイミングでプロポーズしてきましたよ、あの皇帝は……」
ため息が漏れるロビン。さて、もう少し奥に行かなければ治療は施せそうになさそうだ。

仮初の鎮静化

嫌と言うくらいに響き渡る金属音。そして、厄介な事に音源は常に移動している。
「これでは、冷静に話を聞いて貰う事は出来なさそうだな」
「おいおいおい、まさかタイミングを掴んで話しかけるつもりだったのか？　恋する女は盲目で、話など禄に聞いてくれるはずもないというのにか？」
隣にいるイアソンは、もう早速帰る気満々である。この男、恋愛経験の割に女へのトラウマが多い為完全に弱腰なのである。
「その為のお前だ。ストレスや興奮は、一度発散させておけば一気に沈静化する。それをお前にやってもらう」
「訳分らんよお!?　それを俺がやる意味よ!?」
「……それについては、こうだ！」
ブンッと鈍さの増した空気を切り裂く音と共にイアソンが空中に放り投げられた。しかも、戦闘の流れを読む限り次に刃がぶつかり合う地点に向かってだ。
「うおぁーーーー!!!」
彼の動きは、何故かギャグマンガ臭い。そして、シリアスな場面にギャグ時空の人間は絶対的な特攻を持つ。
「おおとおおおおおおおおあああああ!!!」
その叫びを最後に、金属の衝突音は静まった。ネロの大剣を両足で、ジャックのナイフを口で受け止めたのだ。
「なぬ!?」
「え?!」
拍子抜けして開いた口が塞がらないネロ・クラウディウスとジャック・ザ・リッパー。それなりの時間続いた戦闘がこのような形で終わってしまうとは考えもしなかったのだろう。
「流石、うちの船長にしてこのカルデア不動の重鎮。尻どころか下半身を着火させる事でどんな不可能も可能にする英雄。少々扱いに困るが、それもまた一つの個性だからな。やれやれ、先生の言葉がその

通り過ぎて困る」
　投げた本人すら呆れるイアソンの火事場の強靭ぶり。アスクレピオス戦友の絶対的な安心感を改めて覚えた。
「……　さて、とりあえず落ち着いたか？」
　戦っていた二人を座らせ、息切れしているイアソンを横目にアスクレピオスは話を始めた。
「う、うむ。先程は熱くなりすぎた」
「この皇帝さん、色々皆を騙してたんじゃないの？　私たちのせっかくのデートが台無しになったし」
「何を言うか？　散々己の悲劇要素かまして彼に近寄っていたのはお主ではないのか!?」
「それを言うなら、貴方だって人目がつく所でベタベタしてたじゃん！　別の縁があるからって、それは余りにも目に余るレベルだったよ！」
「落ち着け、それを踏まえての話し合いだ」
　早速言い争う二人を宥めるアスクレピオス。ブーディカと景虎が優しすぎただけで、本来の女の恋愛戦争はかなり荒々しいのかもしれない。
「まずは、確認からだ。お前らはあそこにいるロビンフットとの婚約者争いをしているんだな？」
「うん！　譲らないよ！」
「うむ！　余のものである！」
　ほぼ同時に攻めッ気抜群の発言をする二人。匙を投げたくなるとは、この状況を言うのだろう。
「で、それを実行する為に今回のレイシフトに仕掛けを入れたのはネロの方か？」
「うむ。余の計画だ」
　意外とすんなり認めたネロ。否定をしないのは、微妙な好感度調整だろうか。
「協力者はいるのか？　具体的には言わなくても構わないぞ」

「いる。互いの想い人の為の協定だ」
　若干刑事の尋問みたいになっているが、情報開示してくれるのはありがたい。
「いじったのは、レイシフトの場所の交換と通信の切断だな？　技術者への協力は願ったのか？」
「いや、そこは研究エリアにお邪魔して自分でやった。そこに居る聖杯組や技術関連の部署の面々も一切の関わりはないから詮索の手間をかけないで良いぞ」
「……今はその言葉を信じておこう。じゃあ次、ジャック・ザ・リッパーに事情を聞こう。今日レイシフトをした理由を教えてくれ」
「……義賊さんに、ロンドンの街で私たちを知って貰いたかったの。そして、改めて私たちの旦那様になってと頼むつもりで来た」
　一方のジャックは、ネロと比べると口ごもり気味。この場面で思う節は色々複雑なのだろう。
「なるほどな。確かに、本来の履歴にはジャックとロビンが共同のレイシフト届を出しているようだ。ちなみに、ネロは敢えてこのタイミングで決行したのか？」
　彼は空中にディスプレイを出しながら、更に追加質問をする。これは、もはや裁判のレベルの尋問だ。
「……そうだ。相手の勝ちへの油断をひっくり返してこその真の勝利だからな」
「そうか……」
　ディスプレイに写った文字列に首をかしげながら、アスクレピオスはある程度納得した。ここまで来ると、とりあえずはこの戦争の勝敗決定手段を決める作業に入らなければならない。
「とりあえず、今日は一度カルデアに戻って貰う。後日改めて、マスターを通じて結婚までの決定手段を通達させる。それまでは、一度自室で静かにしていて欲しい。食事の提供とかはこちらで管理するから」
　とりあえず、彼のやるべきは以前自分たちの周りが起こっていたのと同じように騒ぎを大きくしない事だ。

彼もこのような事態には免疫が有るので冷静だ。
「うむ、承知した」
「うん、私たちは個室から一歩も外に出ないよ」
その直後、劇場と霧は姿を消した。
『僕だ。こっちは収まったぞ』
『お、通信やレイシフト体制は完全に復旧したようだね。それじゃあ、今いる君たち六人はカルデアにレイシフト戻って貰うよ。力抜いてねー』
ロリンチと行進をして一仕事が完了したアスクレピオス。しかし、これはまだ目まぐるしい謀略の序章に過ぎない事をまだ彼は知らなかった。
「

蠢く爆薬

「この状況から考えると、色々仕事が増えそうだよなあ。食事の提供及び彼らが抜けた事で空いている周回面々の補充をマスターに提案しないとなあ……」

医務室のパソコンをカチャカチャと動かしながら考えるアスクレピオス。今回の騒動により一部のサーヴァント達が自室で待機状態の為、枠埋めを考えているのだ。

「このメンバーだと、変則周回やらで苦労しそうだよな。ジャックの変わりはエミヤ（殺）、ロビンの代打にエウリュアレを入れるとして……」

「一番の問題はキャスターね。巻き込まれでジークもパーティーから外されることになったし、システムサポーターのパラケルススも自室待機。ジークの代打役で主だったナーサリーライムも居なくなるわけだから。賢王様への負担が尋常じゃなくなるわ」

横からブーディカも助言する。今回のレイシフトに関する一連の騒動で影響を受けたサーヴァントは以下の通り。

・ジーク&ジャンヌダルク・オルタ（水着）……デートでオルレアンに行く予定だった。ある意味最大の被害者

・ナーサリーライム&パラケルスス……ネロに妨害を受けた二人。本来は、二人でロンドンに行く予定だった。

・ネロ・クラウディウス&ジャック・ザ・リッパー&ロビンフット……今回の騒動の渦中

以上の七名だ。パラケルススはロンドンでブーディカに遭遇してしまい、ナーサリーはオルレアンでジークたちと合流したらしい。

「にしても、ネロの協力者が未だに掴めていないのは痛いぞ。正直な話、あの皇帝の策謀のそこが知れない。下手すれば、今の間も裏で手が回って大変な事になっている可能性もあるのか」

「……確かに、あり得るかもね。事前に釘を刺しに行っておくのもありかもね」

二人のネロに対する信頼は皆無に等しい。以前に人の恋路を邪魔

したり、生前にとんでもない屈辱を受けた事もあるから当然と言えば当然ではあるが。
「……軽く、事情を聴いてみるか」
パソコンを通信モードに切り替えて、専用の通信欄から「功労者」を選択する。
「……もしもし」
『うむ！　今はプライベートルームで休暇を謳歌している余である！』
口調こそ、いつものハツラツな皇帝様だ。
「一つ正直に答えろ。お前は、何処まで計略を巡らせている？」
『……それは、どういう事じゃ？』
「どうせ、お前の事だから謹慎中の今でも通信機器を駆使して作戦会議しているんだろう？　マスターも功労者であるお前にきつく当たれないだろうし、恋愛騒動を焚きつけた元凶もマスターな訳だからな」
「貴方が今も厄介事を起こそうとしていないか心配な訳だよ。結局、協力者の名前は教えてくれなかったし」
『……ブーディカ!?　……それに関しては、念を押されているのだ。自分は表舞台に立ちたくないから極力名前は伏せてくれ、とな』
「……裏切りを重ねた皇帝相手に、よくもまあそんな口約束をしたもんだな」
「ちょっと、アスクレピオス！」
「……すまん」
『とりあえず、今でこそ余はお主らの指示に従って居るが油断はしないで良いぞ。恋愛に正義も悪もない。世間体などもかなぐり捨てて、愛しの者を手に入れた方が勝ちなのだからな』
「……そうは言っても、カルデアの治安の為にも独断じみた行動は止めてくれ」
『うむ。お主には迷惑をかけないよう心掛けよう』
そう言うや否や、ネロは速攻で通信を切った。この交渉自体が、徒

労である事しか分からなかった。アスクレピオスから、ため息が自然と漏れ出す。
「……あの皇帝は、どうにも僕の手には負えないようだな」
「……私が、何とかするわ。彼女の手の内は完全には読めないけど、何とかなると思うから」
この様な硬い表情をするブーディカは、結婚後初めてかもしれない。
「分かった。頼む」
この言葉を聞くと、彼女は医務室を後にした。
「もしもし、聞こえるか？　余である！」
「はっ！　聞こえまする」
その後のネロの個室。案の定、彼女は協力者に連絡を取っていた。しかし、通信機器は警戒されているので屋根裏からの会話だ。アサシンパライソなら、余裕の芸当である。
「それにしても、よくあの医者の目を掻い潜って帰還して来れたな。レイシフトの際も、特にダ・ヴィンチに気を留められる事はなかったようだし」
「忍びの裏技、っと言っておきましょうか。して、この後はどうするのでござるか？」
「一つ、部屋で大人しくする前に爆薬を仕込んでおいた。近いうちに爆発するだろうから、そこに更なる火種を投げ込んでくれればよい」
「承知いたしました。拙者も、裏で工作活動に励みまする。それでは、警戒されないうちに御免！」
風のように屋根裏から人気が消える。自分は、つくづく良い協力者に恵まれたと思うネロ。
「……こちら、コードネーム信濃。対象は既にカルデアの人間関係に起爆剤を投入したそうです。はい、そうです。あの皇帝は今後も自分の為だけに功労者として権力を振るうでしょう。ええ、あの女が起こした騒ぎには便乗いたします。しかし、奴が犯人だという証拠も同時にバラ撒くつもりです。はい、ではお気を付けて」
耳元に手を当て、高速で移動しながら誰かと通信をするアサシン・

パライソ。彼女に、皇帝と共に結末を迎えるつもりはない。
この忍びの行動は、事態を収束させるのか混沌とさせるのか。それは、まだ誰にも分かっていない。

雪解けと短くなった導火線

あれから、彼女は自分自身でも大人しくなったと認識している。他のカルデアメンバーとの交流を避けている現在において、普通ならストレスが溜まると考えていたが逆だったようだ。

「あいつと、メール出来るようになったお陰かな。文面だと、思ったより感情的にならずに話が出来る。直接声が聞けないのは寂しいけど、あいつとの距離縮まっている。そんな気がする」

静かに時間が流れるジャンヌダルク・オルタ（水着）の自室。クエスト出陣回数は想い人よりは少ないが、トレーニングルームも使えないとなるとかなり暇だ。アスクレピオスからの要請もあり暫くネロ達と同じく謹慎している一方、彼からメール発信用の通信機を支給されたお陰で彼とより緊密なコミュニケーションを取れるようになった。

「……一日で十回以上メール送っているけど、迷惑にならないかな。てか、普段だったらこんな心配もしないのになあ……」

しんみりとした常夏の魔女の独り言を誰にも聞かれることはない。ベッドに乱雑に身を投げ、枕に顔を伏せる。

「……このパソコン、音声通信は出来ないのかしら？　流石に、あいつの声なしで生活するのも嫌ね」

パソコンで、ジーク以外へメールを送る。どうにか、彼の声を聴く為だ。と、その直後。ダ・ヴィンチから光の速さで返信がやって来た。

「……５６秒待って？　どういう意味なの？」

考える余地もなく、彼女が操作しているパソコン画面がフリーズする。そして、そのまた数秒後。

『バーサーカーのルーじゃなくてジャンヌダルク・オルタ。聞こえるか？　実は俺も技術責任者に同じ相談をしていて、ついさっき音声通信も出来るようにして貰ったんだ』

「～～～～～！　全く、我慢していた私がバカみたいじゃない！」

この魔女が心の底から笑ったのは、かなり久しぶりかもしれない。表情筋の凝り固まった部分を吊り上げ、彼女は画面越しの至福を噛み

しめていた。

「さて、食事の配膳はここで最後かな？」

一方その頃、ブーディカは自室待機中のサーヴァント達の部屋の前へ夕食を運んでいた。厨房で大人数の料理はエミヤに任せており、随分と楽な仕事だと感覚が麻痺しかけていた。

「ん？　お手紙かしら？」

そして、その部屋の前の扉の隙間に一枚の紙きれが挟まっていた。見える部分に「料理長へ」と書かれており、彼女宛である事は間違いない。

「えーと、料理のリクエストかしら？　……」

ブーディカはお盆をドアの前に置き、気楽に手紙を開く。しかし、その表情は途端に険しくなった。

「……　厄介な事になりそうね」

そう言うと、彼女は紙切れをポケットにしまって立ち去った。いち早く、アスクレピオスに教えなければいけない内容だった為である。

「……　上手く、伝わればいいな。私たちを舐めないでね、皇帝さん」

彼女の足音が聞こえなくなると、部屋からジャック・ザ・リッパーが顔を出す。暗殺者は、ただ命を奪うだけではない。その人物の社会的立場や戦略も殺しうるナイフを持っているのだ。

全ての起爆剤の作動まで、カウントダウンタイマーの数字は間もなくゼロに到達しようとしている。

閑話休題　この作品のモットー？

アスクレピオスが再びマスターの部屋に呼ばれた。嫌な予感しかしない。
「マスター、アスクレピオスだ。今度は何の用だ？」
「おー、アスクレピオス！　待ってたよ、入って入って」
中からはマスターの声がする。別途にお茶を注ぐ音がするから、また他に誰かいるのだろう。
「で、何の用だ？　最近は結構忙しいんだが」
「うん、俺も執筆やら何やらで忙しい……」
元気な声とは裏腹に、キーボードを叩く手がおぼつかない。空元気とはこの事なのだろうか。
「マスターとりあえず、今後の進展などについて一言入れたらどうだ？」
今日も今日とて、彼女の入れた紅茶が旨い。マスターの隣のアタランテは狩人の服装でもメイドに見える。
「えー、皆さま。最近は様々な用事が入り込み執筆が遅くなって申し訳ありません。内容自体は概ね完成しているのですが、どうにも細かな道筋が完成しておらず時間がかかりそうです」
「せっかくなので、今回は里見レイのカルデア作品の執筆に置いて心掛けている事をお話したいと思います」
「何となくで考えている感じですので、軽く聞くレベルでお願い致します」
以前と同じく、誰もいない壁に向かって礼をするマスターとアタランテ。医師神さんは、今日もまた何故呼ばれたか理由を理解する事は出来なかった。
「まず、マスターは基本的には誰かを悪役にするつもりはない。一時的に、誰かに悪役・嫌われ役を請け負って貰う場面はあるだろう。しかし、それはこの医者目線から物語を語った時の配役だ。そのサーヴァントに嫌悪感を抱かせる行動があったとしても、そのサーヴァントが好きな人々を苦しませる気がない事は理解して欲しい」

「俺は、姐さんがアポクリファでの行動で『逆恨みだ』『ワガママだ』という感想を聞いてかなり苦しんだ。それが、自分の描く二次創作で同じ思いをして欲しくないんだ」
「????」
最初のマスターの心得もどき「悪役は基本いない」を話す二人。しかし、アスクレピオスは何も分からない。
「次に、よくある『マスターのハーレム』もこのカルデアでは存在していない。俺の役割は、各サーヴァントが円滑に業務やプライベートを満喫できるように調整する事。個人的な恋愛は描くつもりはないね」
「マスターにも、勿論『推し鯖』は存在する。しかし、奴の方針は『推し鯖が幸せになるように計らう』だ。自身が恋人になる気は毛頭ないようだ」
「シナリオ上のマスターへ好意を向けているサーヴァントに関しても、恋愛関係やアピール好意もほぼ描かないと思うし本編には関わらない予定だ。まあ、清姫が使いやすさの都合上『恋バナ大好きサーヴァント』として自身もマスターに恋心を寄せている設定を踏襲したが……」
「????」
続いてのマスターの心得もどき「藤丸ハーレムはなし」を二人は淡々と話す。やはり理解できないアスクレピオスであった。
「あと、最後だね。出来るだけ、著しい変態方面のキャラ崩壊はしないという事だね。ギャグ要因も含め、恐らく各サーヴァントのイメージを損なう表現は抑えています」
「本来はそうでもないはずなのにロリコン・ショタコンに走ったりドMやドSなキャラ付けをする事は、今後ないとマスターは言っている。これは、私・アタランテの『子供が好き＝ロリコン・ショタコン』という二次創作でのキャラ崩壊にマスターが苦悩した結果だ。本編での登場が私にほぼないのも、その様な事故を防ぐためらしい」
「????」
?????またしても、何も理解できないアスクレピオス（神話時代出身）の出来上がりである。もはや、彼には質問をする言葉も見つからない。

「という訳で、更新ペースがとてつもなく変則的な俺ですが」
「気長に、そして緩やかに、何より楽しく読んで頂けると嬉しい」
『宜しくお願い致します』
そして再度、マスターとアタランテは頭を下げた。
「もう、僕はいらないだろ……」
入室後、挨拶の次にまともに発した言葉は〆のこれであった主人公（アスクレピオス）であった。

焦げ臭き爆発前夜

「さて、マスターへクエストの編成案も送ったし研究も後はメディアの管轄。ようやく一休みできそうだな」
　ゴキゴキと関節を唸らせながらアスクレピオスは伸びをした。夕飯も既に食堂で食べ終え、残りは風呂に入って寝るくらいだ。明日は特にタスクもないので、ゆっくり過ごす予定だ。
「ブーディカは、もう戻っているだろうか？　明日、彼女も予定がなければいいが……」
　こうして、アスクレピオスは医務室から隣の自室へと移った。時間としては、妻が厨房での後片付けと明日への仕込みが終わる頃合いだろう。
「帰ったぞ。お、今日は早めに終わったのか？」
「うん。エミヤがテキパキと終わらせてくれたの。人手が多いと気楽な物ね」
　扉を開けると、ブーティカが紅茶とクッキーを用意していた。それと、一枚の紙きれもある。
「けど、私達はまた面倒な事態に巻き込まれそうよ。これを読んで」
　その紙切れは、妻から夫の手へと渡る。
「何々。『ネロ・クラウディウスは今夜、強制相部屋システムを秘密裏に作動させてカルデアの一人部屋メンバーを合流させる。恐らく、彼女はロビンと添い寝をして恋愛戦争に一人勝ちするつもりだ』これ、どこにあった？」
「パラケルススの部屋よ。けど、文面や差出人の名前が書かれていなかったから確信は持てないけど」
「彼に確認はしたのか？」
「ええ。通信が盗聴されているかもしれないから、結構含みを持たせる聞き方だったけど」
「結果は？」
「完全に分からないと言っていたわ。恐らく、他の人が勝手に彼の扉に挟んだのでしょうね」

ブーティカが、紙切れを見つけた過程を話す。確かに、パラケルスが紙切れを書いたとは言い切れない。
「……この情報は、マスターやロビンには伝えたか？」
「まだね。本人たちに確定していない情報を送るのは、恋愛方面で偏見になってしまうから。マスターへも、慌てて報告するのも違うと思ったから」
「そうか。とりあえず、ダ・ヴィンチには警戒するよう連絡しておこう。深夜に起きるのは無理だろうが、警報アラートの制作くらいなら数時間で済むだろう」
紅茶を飲みながら、医師は提案した。聞くや否や、速攻でダ・ヴィンチに連絡を取る料理長。彼らの行動は中途半端かもしれないが、それでも絶妙な配慮の上に成り立っていた。

暫く後、互いに読書などをして時間が過ぎ去った頃。
「ダ・ヴィンチから、警報システムの完成のメールが来た。特に、ネロの部屋などは二重にシステムを組んでくれたようだ」
二人の部屋にあるパソコンからメールの通知が届き、それをアスクレピオスが確認。どうやら、各サーヴァントの安全確保レベルの準備は出来たらしい。
「本当、あの小さな技術責任者には迷惑かけっぱなしね。いつか、ご馳走を作ってあげないと」
「僕も、何か礼をしないとな。……さて、そろそろ寝るか。今日は、一緒に寝るか？」
アスクレピオスはすっとパソコンを閉じて、隣を空ける。同じベッドで寝ること自体はまあまあ回数あるが、アスクレピオスから誘うのはかなり珍しい。
「……うん」
ブーディカは、余計な事を言わずに電気を消して夫の隣へ体を滑らせる。
「万が一があるもんね。今日は、一緒に居たいのは私もおんなじ」
「……おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

予測不可能が起こりうることは、二人に容易く予測できた。少しだけの不安は、夫婦の間に香ばしいエッセンスと変化を遂げるのであった。

真夜中のイレギュラー

「……何か、眩しいですねえ。緊急のクエストですか？」
時刻は、丑三つ時を枕もとのデジタル時計が示している。義賊、ロビンフットは夜襲を考えて寝ぼけた目を鋭くさせる。
「事件だよ。研究室で使っていたモルモットがホムンクルスとして暴走しているみたい。大丈夫、もう私達の準備は出来ている。義賊さんが用意をしている時間くらいは余裕で稼げるよ」
「ジャック、いつの間に来てくださったんですかい？　まあ、とりあえず分かる限りの解説ありがとう。さて、この部屋で光っているレイシフトのような青白い輝きは何ですかい？」
「分からない。けど、どこかへ飛ばされる場合があるから私たちの傍から離れないで」
「お、おう。分かった」
頼もしい少女だと感じつつも、音もたてずに傍にいた事へ疑問を覚えるロビン。とりあえず、戦闘態勢は整った。しかし、彼にはホムンクルス（キャスター）との戦闘経験が皆無だ。相性の都合上、ジャックも苦戦を強いられる事は免れない。
（相変わらず、青白い奴は消えねえし。現状以上に嫌な予感がするんだよなあ）
そして、その予感は現実となった。
ロビンフットの個室は、突如『システムエラー』という表示が空間上に何枚も張り出される。そこからは大量の魔力が放出され、結果としてホムンクルスの軍勢の標的となってしまったのだ。
「何なんだよシステムエラーって!?　しかも、見た所二つのエラーでヘンテコな反応起こしちゃっているみたいですし？　二人じゃ凌ぐのにも限界が近そうですねえ！」
「……貴方は、私達が、守る！」
直後、漏れ溢れる魔力に便乗した形でジャックが霧を発動させる。その流れに乗ったままこの少女は複数のホムンクルスを連続して撃破した。

「ロビンフット、無事か!?　ダ・ヴィンチからホムンクルスが襲撃しておると聞いたぞ！」
　加えて、アスクレピオスが蛇を使いながらエネミーをかき分けやって来る。隣には、勿論ブーティカの姿だ。
「一応平気ですがね。些か多勢に無勢だったんで助かりましたよ。しっかし、何なんですかこの青白い光と二種類のシステムエラーは？」
「説明はおいおいする。とりあえず、補助特化の僕たちでは援軍とは呼べないかもしれないがホムンクルスを片付ける事が先決だ。追加のメンバーが来るまで粘るぞ！」
「義賊さんには、指一本触れさせないんだから……」
　そうこう話している間にも、ジャックはホムンクルスを肉片に変えていく。傍らでは、ブーティカが側面の援護を行っていた。
　そして、数分後。
「諸君、大丈夫かい？　とりあえず、その場で動けるメンバーで助けに来たよ！」
　レオナルド・ダ・ヴィンチが牛若丸・ランスロット（セイバー）を連れて増援に駆け付けた。確かに、よく見ればホムンクルスの中にはランサーも存在する。このままロビンが突撃していては、恐らくただでは済まなかっただろう。
「……　それにしても、何で急にこんな事件が起きたんでしょ？」
「……　分からない。最近のカルデアは人間関係だけ一枚岩ではないからな」
　後方で女性陣と援護部隊をサポートしながらロビンとアスクレピオスは小言で相談する。互いに持っている情報や事情は異なる故、深く質問できない部分がどうにも歯がゆい。
「マリア・ザ・リッパー！」
「アロンダイト・オーバーロード!!」
「壇ノ浦・八艘跳び！」
「芸術とは輝くものさ！」
　しかし、先の見えない事件の全貌に対して事件の表面であるホムン

クルス達は順調に討伐されていった。
（システムエラーというのは、ネロの仕組んだプログラムとダ・ヴィンチが対策したプログラムの衝突の事なのか？　しかし、ホムンクルスとの関係が掴めない。第一、システムエラーで魔力の離散が発生してホムンクルスが引き寄せられるって出来過ぎてないか？　この事件、想像以上に黒幕は手ごわそうだな……）
アスクレピオスは深夜のイレギュラーの中でも回せるだけの頭を回して考えた。しかし、この問題は夜明けを迎えても解決しそうにない。
日を昇らせるためには、まだピースが足りないのだった。

鎮静後のひと時

「……さて、このホムンクルス達はどうして暴走したんだ？　まさか、君の作った転移防止システムのエラーによるものではないだろ？」

若干溶けながら蒸気を発している個体も出ているカルデアの廊下。それなりに疲れの出ている一同を見渡し、アスクレピオスは事件の根幹へと話題を進めた。

「あの皇帝が仕込んだ暴走かしら？　ダ・ヴィンチが転移装置に関して対策をしたと知っていれば、こっそり研究室に入ってホムンクルスを解き放っても可笑しくないわ」

「……あり得るねえ。何せ私のように中途半端にカルデアのポジションを得ているサーヴァントはあの功労者様からすれば格好のカモだろうし。裏をかく事も出来そうだ」

ブーティカとダ・ヴィンチは、完全にネロの仕業だと考えているようだ。実質前科持ちという事もあり、一連の騒動に関わっている人物なら当然の考えだ。

「間違いない！　あの女は酷いことをいっぱいする女！」

そして、ジャック・ザ・リッパーは猛烈にネロを犯人と主張。まあ、恋敵が裏で色々と暗躍していては腹が立つのは当たり前と言えば当たり前だが。

「……」

そして、本騒動の渦中に巻き込まれているロビンフットは静かに頭を捻っていた。正直、誰がどのような行動をしているかは彼自身は全く把握出来ていない。しかし、一つ確信を持てる部分があった。

「このホムンクルスに関しては、ネロは直接手を下していない」

「!?」

「!!」

「おや、ロビン君。そう断言する理由はあるのかね？」

「あいつは、どんなに陰で動いても自分の匂いを残すんだ。昔、っていうか別時空で縁がないと分からない上にこのカルデアでもある程度

接していないと分からない話ですけどねえ」
　このカルデアは、メルトリリスは選抜組に入っている。加えてＢＢやパッションリップ、アンデルセンにエミヤもいるがネロとの関わりは薄い。彼らのカルデアに来た時期が比較的遅めであることに加えて、既にネロ自身が新たなコミュニティを形成していたことが理由に挙げられる。
「ま、カルデアの大昔からあの皇帝サマとはレイシフトしていましたからね。色んな要素を含めて、オレが皇帝サマの匂いを一番理解出来るって訳ですよ。最も、そのせいで現在酷い目に会っているんですけどねえ」
「その話は、参考になるかもしれないな。ネロは未だに協力者について明かしていない。その協力者が今回の研究室へ侵入した。そう考えると、意外と犯人は絞りやすいのかもしれないな」
　ソロリソロリとホムンクルスの残骸を跨ぎつつ、アスクレピオスは廊下へと足を運ぶ。このまま研究室へ向かって犯人捜しの仕事に取り掛かるのだ。
「待って、私も行く」
　ブーディカ、夫の後を追う。流石に、深夜の戦闘後に単独行動をするのは色々キツイと考えての精一杯の補佐である。
「……　操作は、あちらの夫婦に任せて私たちは寝るとしよう。昼間にマスターに事件の説明をする必要があるから早く寝ないとね」
　一方のダ・ヴィンチ達は翌日の報告任務を選んでさっさと解散した。そして、ロビンの近くにはジャックが残るだけとなった。
「義賊さん、貴方にとってあの皇帝さんはどんな存在なの？　わたしたちでは、補えない部分はあるの？」
　彼の右手をそっと握るジャック・ザ・リッパー。包帯の撒かれたガサツいた左手は、戦闘後という事を差し引いても酷く震えていた。
「互いに良い所はあるんで、比べる事なんて出来ませんよ。だからこそ、こうして他の皆さんにも迷惑かけちゃっている訳ですけどねえ……」
　握られた手に目線を向けず、かと言って彼女にも視線を合わせずに

ロビンは答えた。ジャックの伸長と角度からでは、彼の表情は把握しきれない。
「わたしたちは、義賊さんを愛している。ずっとお世話してくれたし、私達が他のアサシンと仲良く出来なくても傍にいてくれた。これからも、夫婦として私達と一緒にいて欲しいの。マスター(おかあさん)の命令でわたしたちも他の人と同じように優しくしていたのは知ってる。だけど、それでもわたしたちにとって義賊さんはかけがえのない存在！　絶対に譲れないの……」
　ロビンも、ジャックの表情は見ることが出来ない。しかし、彼には彼女の顔が手に取るように分かった。
「泣くな。オレはお前の涙なんて見たくない」
「……ごめんなさい」
「謝らないでくれ。こっちが罪悪感に潰される……」
「……」
「……」
「……」
「……一つだけ、教えてくれ」
　暫くの沈黙の後、ロビンは視線を落としてジャックの前に屈み込んだ。
「今回のホムンクルスの騒ぎも含めて何か人様に迷惑をかけるような作戦を練ったり実行したりしたか？」
　その目は獲物を狩る時と同じ、ロビンの真剣(マジ)モードである。
「全く、何もしていないわ。わたしたちは、ただ義賊さんの為にいつも通り過ごすだけだもん。卑怯な真似は、例えアサシンでも絶対に出来ないわ」
　ジャックの眼は、暗殺の時の眼ではない。むしろその逆、愛に満ちた平和な眼だ。
「……分かった。とりあえず、助けに来てくれてサンキューな。また明日、ジャック」
　彼女の頭を軽く撫で、ロビンはそのまま自室の戸を閉める。
「／／／／お、おやすみなさい！　わたしたちの大好きな義賊さん！」

ジャックもそう言い残すと、戦闘時顔負けの速さで立ち去った。皇帝の眼が、何処にあったかも理解できずに。

長い夢

戦闘用の武具を外すのも面倒だったので、ロビンは扉を閉めるや否やそのままベッドに倒れた。右腕をアイマスク代わりとして、そのまま夢の世界へと進んだ。

「マスター、また子供サーヴァントの世話係ですかい？　俺は保育士でも小学校の先生でもないんですよ」

このセリフを彼が言ったのは、今から一年以上昔の話となる。ロビンは今まで、古参サーヴァントの一角として茨木童子やフランなどの子供サーヴァントの世話係を頼まれてきた。ただ、ここ数か月は特に子供鯖の加入がなかった為久々の仕事である。

「本当にごめん。これは新人研修の一貫でここ一年はイアソンに任せてたんだけど、彼は最近新章へのレイシフトばっかりで内部に手が回らなくて。丁度今回の鯖が幼い容姿だからさ、イアソンよりも適役なんだよ」

「はいはい。まあ確かに俺は最近レイシフト関連の仕事もありませんからね。暇って訳ではありませんが他ならぬマスターの頼みだ、全力を尽くしましょう」

管制室の横で二人はこのようなやり取りをした。そして、召喚地点へとロビンは向かう。

「どーも、これから自分がカルデアの案内をするんではぐれないで下さいね」

新入りサーヴァントに挨拶をしようと顔を出したロビンは驚いた。

「おかあさんは、どこ？」

「おかあさん？　あ、マスターの事ですかい？　マスターは今はレイシフトしている……」

「ヤダ！　違う！」

蹲って目を合わせてくれない黒いマントの少女。ここまで人間不信な態度だ。

「……　サーヴァントは誰だって来たばかりの頃は想い悩むから無理もないですよ。暫く近くにいるから、自分の部屋へ行きたい時は

言って下さい」
少女から数メートル離れた所に座り、ロビンはタバコを吸い始めた。
正直、彼には他にやる事がない。単体宝具のアーチャーなら同じ最古参組のアシュヴァッターマンがいる上にエウリュアレの方が出番が多い。かといって、ブーディカやメディアのように特定の役職を与えられている訳でもない。要するに、実績と経歴の割に処遇は他のサーヴァントと同じという事だ。
(ま、ここのマスターは何やかんや全サーヴァントに福利厚生を分け与えている。だからこそ、名誉職や特別待遇メンバーを作ってお気に入りの方を傍に置いているんでしょうね)
ホワイト企業に勤めるリストラ前の社員とは、こうして罪悪感と嫌悪感を同時に抱くものだと理解した。
「……ねえ、緑のお兄さん。お名前は？」
「……ロビンフット。義賊を名乗っているサーヴァントで、このカルデアは古参メンバーの一人ですよ。最近はめっきり暇ですけどね」
「皆が忙しくしている訳ではないんだ。少し安心したわ」
「どうしてですかい？　確かに、仕事がほぼないサーヴァント達も各々の生活を楽しんでおりますけどねえ」
「少し、ゆっくり過ごしたいの。おかあさんのいない世界なんて、居ても意味がないし」
「……？　事前にマスターから渡された資料とは、随分と違う性格をしているようですな。これは、この子を良く知っている人に話を聞かないといけませんかね」
ロビンは手元にある数枚のプリント用紙を眺めながら、頭を悩ませる。
「……私たちは、変なの？　他の私たちとも違う私たちとも違うの？」
「一般的には、カルデアに来ている貴女とは違うらしいですね。ただ、そういう連中もこのカルデアには結構いますよ。イアソンとメディア・リリィって言う離婚済の夫婦がいるんですが、このカルデアでは

かなり良好な関係っていう例もありますし」
　世間一般のカルデアにいるイアソン夫婦は「離婚したけど罪悪感などで互いを気にている」という若干雪解けしたレベルだ。しかし、ここの二人は目立った行動こそないが毎日一緒に昼ご飯を食べているくらい仲が良い。
「……」
「ま、何でも聞いて下さいな。あと数日は、余裕でお相手出来ると思いますからねえ」
　そう言って、ロビンは会話を終えた。一人で静かにしている時間が、彼女には必要だったからだ。
　暫くの時間が流れたと思われる。彼の持ち合わせていたタバコの約半数が煙となったくらいだ。
「義賊さん、一つ聞いていい？」
　その幼き少女の微かな声は、煙が薄く広がった空間を震撼させる。
「……何ですかい？」
「私たちは、このカルデアで新しいお母さんを見つけられるのかな？
　あのおかあさんを忘れられるくらいの」
「……分からない。うちのマスターは基本的にセクハラもしないしクエストに行かないメンバーにも相応の待遇を与えてくれる。ただ、俺たちの人間関係には深く入り込みませんからねえ」
「そう、案外ここの人たちは冷たいかもしれないね。義賊さん以外は」
「……どうですかね。マスターも他の方たちもちゃーんと貴方を迎え入れてくれると思いますよ」
「そうなの、かな？」
「まあ、ゆっくりでいいと思いますよ。貴方みたいな人は色々これから大変でしょうし」
「……一回、私たちの部屋を見せてちょうだい。そこで考えるわ」
　ジャックは、ようやく立ち上がった。しかし、魔力が足りていないのだろう足元がおぼつかない。
「了解いたしました。ほら、支えが必要だったら手貸しますよ」
　ロビンはタバコをしまって右手を彼女の元へ差し出す。仮にも英

国紳士、その辺の気遣いはお手の物だ。
「ありがとう。義賊さんとはこれからいっぱいお話すると思うわ」
ジャック・ザ・リッパーは、ほんの一瞬だけ顔をほころばせた。
「そん時は、どうぞよろしくお願いしますよ。楽しくいきましょうや」
ロビンもそれに釣られて微笑んだ。夢の中でも、その時の感覚は忘れていない。
（確かに、あんたと話して楽しかったですよ。しかし、それが長い時間が経っても影響を及ぼすとは思っても居ませんでしたけどね……）
まどろみの中で、ロビンはこの思いが宿った。しかし、己の婚儀に関する結論は未だに出ていない。

手が出た大蛇

次の日。アスクレピオスは研究施設の調査報告書をマスターに渡した後速攻ベッドに入り就寝した。思ったより、様々な証拠品が検出された為である。分析を妻と共に丁寧に行ったが、結論は一つだった。

その報告書をマスターに渡すのを最後に、彼はゾンビのような勢いで自室へと舞い戻りそのまま眠った。しっかりと確認は出来なかったが、隣でブーディカも隣で爆睡に突入したようだ。

つまり、この時はまだ彼らは知らなかった。彼らの見つけた最大級の時限爆弾の爆風の威力を……

「ふーん。二人の集めた魔力の残滓からは、『日本に由来するアサシン』みたいだね。データに該当するサーヴァントはエミヤ(アサシン)を含め数名いるね」

資料に目を通したマスターはこのように呟く。ホムンクルス暴走事件の重要なカギを見つけてご満悦だ。

「対象となる皆さんには事情聴取としてこの部屋に来て頂きます。念のため、立会人としてダ・ヴィンチさんにも来て頂きましょう」

隣でタブレットを動かすマシュ。朝早くからの出勤だが、元気は非常にみなぎっている。

「……マスター。これは非常に嫌な予感がするぞ。容疑者連中にここへ来るようなメールを出した時点で、奴らが強硬手段に出る事も否定できない」

と、ここでマスターの椅子の上でお茶を飲んでいたイアソンの顔が青くなる。彼の直感は三時間後の天気予報並みによく当たる。しかも、悪いことが起きる前は特にだ。

「……今回の容疑者の内、明白に恋愛関連の矢印を向けているサーヴァントは何人?」

「一人です、先輩」

「そのサーヴァントが恋愛感情を持っている相手は、今回の騒動の関連者?」

「はい、以前のレイシフトシャッフルの際にいた方に御好意を持っています」
「……　そのサーヴァントが、ネロと手を組んだ時に暴走する確率は？」
　マスターの額から、汗が流れ始める。マシュに聞いているのは答えではなく、もはや結論の確認だ。
「確率は、８５％オーバーです。そして、それが起きた時カルデアに大きな混乱が発生するかと……」
「やっぱり……　さて、とりあえず俺は静観しかなさそうだ。ちゃんと各々で向き合ってくれれば良いけど」
「やれやれ、マスターは今回も傍観ですかいな。ま、それが俺たちの仕事でもあるんだけどよ」
　三名の半ば悟ったかのようなやり取り。幾つもの修羅場を共に潜り抜けたからこその言葉かもしれない。
「とりあえず、今回はお前も動くべきだぞ。ジーク……」
　マスターのこの最後の呟きは、イアソンとマシュに辛うじて聞こえるくらいの大きさだった。

「!?　何だ、この禍々しい魔力は？」
　自室待機中のジークは、突如として負のエネルギーを纏った魔力を肌で感じた。
「嫌な感じだ。しかし、何か覚えのある魔力でもある。襲撃ではなく、内乱か？」
　脳裏に常夏の魔女の姿が浮かび、すぐさま通信を取ろうとする。しかし。
「……　通じないな。電波がどこかで邪魔されているようだ」
　胸がざわつく。下手すれば、彼女も何かしらの被害を受けている可能性があるのだ。だが、その不安は払拭された。より具体的で絶望的な放送が流れたからである。
『諸君、緊急事態だ！　我らの研究の一角を担っていたパラケルスス君が攫われた！　目撃情報によると、巨大な蛇が彼を襲ったらしい。

各自警戒に当たると共に、何か情報があれば管制室に来てくれ！』
ダ・ヴィンチによる一斉放送だ。攫われるっという言い方には何か違和感があるが、事件であることに変わりはない。そして、外から流れは変えられる。
「……　通信が使えないなら、一度様子見か？　ここで首を突っ込んでは、騒ぎが大きく……」
「ちょっとジーク、さっさと行くわよ！　この蛇の事件を解決しないとあたし達の問題も解決出来ないのよ！」
「じゃ、ジャンヌ。一応俺たちはまだ自室待機命令ではなかったか？」
「んなこたどうでもいいわ！　このままじゃ結婚式なんていつ挙げられるか分かったもんじゃないの！　だから、あたし達の手であの馬鹿くノ一を叩き潰して式を早めてやるのよ！」
返事も待たずジャンヌダルク・オルタ（水着）はジークの手を引いて走り出した。そして、あざとい事にその手はキチンと恋人つなぎである。
途中でセイバーランスロットから事件のあらましを聞き、二人は疑惑を確信に帰る。そう、今回の事件はネロ・クラウディウスの協力者アサシン・パライソがパラケルススを自室に拉致したというものなのだ。

「悲しい人ね。大事な人への愛情表現が誘拐だなんて。私は部屋にいる間、あの人の為にお料理のお勉強をしていたのに……」
「まあ、あの娘はんは不器用すぎますからなあ。上手い事皇帝はんの口車に乗せられたんちゃう？」
「欲しいものを奪う事はこの世の摂理よ！　されど、奪い返される事を覚悟出来る者のみじゃがな！」
アサシン・パライソの部屋の前で話をするナーサリー・ライム、酒？童子、茨木童子。以前パラケルススをレイシフトに誘っている事もあり、ナーサリーは彼に好意を持っているようだ。残りの二人は、同じ和鯖であり彼女からすれば因縁のある人物。忍びであろうと、心理は分かるようだ。

「……アサシン・パライソに関しては、あまり話したことはないのだが。誘拐をするくらい情緒不安定な人物だったのか？」
「いいえ。あいつは終局直前にうちに来たけどそんな事するような奴ではないわ。恐らく、ネロにそそのかされて強引な手に出たんでしょうね」
　そして、ジークとジャンヌも到着。部屋の中から溢れ出る禍々しきオーラに一歩引いているが、会話は冷静
「……　いやはや、愛が重すぎて箍が外れてしまいましたか。しかし、その責任の一端は皇帝殿にあれど本当に彼女だけがくノ一殿を唆したのでしょうか？　くノ一殿の行動の裏には、どうにもまだ裏があるように思えますね」
　そして、野次馬から少し離れた所に彼女はいた。
「皇帝殿は確かに狡猾で自身で行動する以外にも駒を使って実力行使をする事もある。しかし、ここまで生き急ぐような事態に発展しますでしょうか？　これは、概ねくノ一殿の単独行動のような気がします。そして、恐らく皇帝殿はこの事態を見て更なる強硬手段を……」
　長尾景虎のひっそりとした言葉だ。そして、今この裏で大蛇以上の魔物が目を覚ました。

大蛇への野次馬

あれから、ほんの数分経った頃だっただろう。追加で全体放送が流れた。

『事件だ！　トレーニングルームが功労者ネロ・クラウディウスにより占拠された！　監督官の佐々木小次郎も倒されてしまったらしく、現在は完全に彼女の立てこもり地点と化したようだ！』

「！　これは、下手したら私にも火の粉が降りかかるかもですねえ」

この放送を聞いて驚いたのはトレーニングルームの副監督官である長尾景虎だ。ネロが何か行動を起こすとは予想していたが、場所は完全に予想外である。

「……　皇帝はんも急いでおりますなあ。娘はんの反乱に乗じて間を置くことなく行動とはないと思いますのに」

「恋は盲目というからのう。昨夜の襲撃失敗を受け強硬手段に出た可能性はありうる。しかし、奴の行動はこのカルデアでの己の地位を地に落としたがな！」

「……　皇帝さんは、愛しのお方を誘拐はしていないのね。それは評価するべきだけど、その行動は下策だわ。何か予想外な事件でもない限り、こんな大立ち回りは出来ないはずよ。けど、とても寒気がするわ。錬金術師様の身に何かなければいいけど……」

酒？童子、茨木童子、ナーサリーライムはこの放送を受け三者三様の反応を見せる。しかし、その中でもナーサリーの様子が徐々におかしくなる。

「緑のアーチャーさんは、このままじゃ皇帝さんの愛を抑えきれない。可哀そうな恋敵さんだって、皇帝さんが呼応したと知ったら自分の立ち位置が危うくなることくらい知っているはず。何かがおかしいわ。今回の事件の犯人であるはずの二人の意志が別方向に向いていて、その裏にそれぞれ真の協力者がいるとしか思えないわ……」

「……　この事件、確かにあの手この手でしていた二人にすれば粗が立っているのか？　今までも、強制レイシフトやホムンクルス暴走とかなり荒療治な気がするのだが……」

皆の会話を聞いていたジークはこう尋ねる。
「……分からない。けど、あの娘っ子同じくこの誘拐・占拠の事件には裏があると思うわ。第三の人物がこの騒動に乗じて一人勝ちする可能性はあると思う。候補は、全く見当がつかないけど。男か女かも分からない……」
「そうか。俺には、この騒動の全体がこんなに複雑だという事を能で理解できない。一体、何故ここまで大事になってしまっているんだ？
医者の時は噂はあれど物理的な大事にはなっていなかったはずだぞ？」
答えるジャンヌダルク・オルタ（水着）に対し、ジークは更に疑問をぶつける。
「二つの恋路が、対象となる男たちに意見を聞かないまま交錯したからね。マスターの根本的な時間制限や行動制限が彼女達には意味をなしていないわ。正直なところ、団体戦になった時点でこのような大惨事は避けられなかった。長引くかどうかは分からないけど、このカルデアが大きく動揺するわ……」
双剣を構え、ジャンヌは戦闘準備に取り掛かった。恐らく、パライソを単独で沈めるつもりだろう。それを横目に酒呑童子・茨木童子も武器を構え、更にセイバーランスロット、牛若丸も準備をした。
「色々まどろっこしくてイライラするわ。けど、これだけのメンバーでかかればすぐ片付くはず。ジーク、あんたは万が一に備えてそこにいて。こんな時に、傷つくあんたは見たくないから……」
ゆっくりと膝を曲げて体に炎を宿した常夏の魔女。ちらりとジークの方を向いた表情には、不安と使命感と愛おしさが滲み出ていた。
「行くわよ！　突撃！」
彼女の掛け声と共に、カルデア歴戦の戦士たちが立て籠もり現場へと進撃する。しかし……
「!!?　何で、邪魔してくるのよ。」
彼女らの目の前に現れたのは無数のホムンクルスと一人のくノ一、そして長髪の男だ。
「……」

「決まっています。今回の事件は『誘拐』ではなく『逢引』だから。拙者はこの錬金術師様と秘密裏なひと時を過ごす予定で御座ったが、致し方ありますまい」
　言うまでもない、アサシン・パライソとパラケルススだ。
「誰にも邪魔はさせませぬ。何かの間違いで戦闘部隊が出撃する事態に発展してしまいましたが、これはむしろ好機。拙者たちの愛の力で、全て跳ね返して見せましょうぞ……」
「……」
　既にネロと組していた事案に関しては否定をすることも無く、何かを振り切ったかのように臨戦態勢の様子。パライソは完全に宝具を展開させているし、パラケルススのホムンクルスもかなり数を揃えている。
「ジャンヌ、大丈夫なのか……」
　ジークは、次々と巻き起こる事態に呆気にとられる。物語は、まだまだ泥沼の中だ。

全てを知る鬼の頭？

「……どうして、錬金術師様は彼女を受け入れられるの!?　私の方が貴方に尽くせるし束縛もしないのに」

　勿論、パラケルスの無言の行動に最も動揺した人物はナーサリーライムだ。軽く見た限りでは、愛しの人物が恋敵と共にカルデアへ反乱を起こしたと思ってしまう。

「落ち着きなされ、童話はん。恐らく、あの錬金術師はんの意識は今ないと思います。薬か何かで彼をあの娘が操っていると考えるのが妥当やで」

「え、ええ。とにかく、あのくノ一を倒さないと！」

「ま、待てナーサリーライム！　こんな狭い場所で固有結界はまずい！」

　ナーサリーは速攻で宝具を展開させようとするが、そこはジークに止められる。第一、大抵のサーヴァントが全力で宝具を開放した場合はカルデアが壊れるわけだが。だからこその、剣術などで周りへの被害の少ないランスロットなどが武装部隊になっている訳だが。

「……私は、後方支援をするわ。早く、あの方の洗脳を開放して」

「分かった。ジャンヌ！　俺も参戦する。恐らくパライソを止めれば片が付くはずだ」

「オッケー、二人で一気にケリをつけるわよ！」

　ナーサリーの後方からの魔弾援護を受けつつ、ジークとジャンヌはホムンクルスの間を狙って突撃を開始。共に出陣する機会が少なく、連携自体はぎこちないが妙な安心感がある。

「錬金術師様、あれをお頼みできますか？」

「……」

　直後、ホムンクルス達が何かの意図に引っ張られるかのように隊列を組み始める。腕を組み、完全に壁となったホムンクルスに対し、二人は易々と弾かれてしまう。

「！」

「厳しいな……」

「何をやろうと無駄です！　拙者は錬金術師様を生涯の伴侶として迎えてこのカルデアで幸せなひと時を過ごします！　例えそれが、裏切り者と言われようと！　それこそが拙者の人生だったから！」
「愛の重さが別方面に振り切っているわ。これじゃあ、仮にあいつを止めたとしても後遺症が残ってしまう」
「……」
　既に、アサシン・パライソは正気を失っていた。「恋は盲目」という言葉をまざまざと見せつけられるジークは言葉が出なかった。明日は我が身なのかもしれない、そう彼は心にのしかかった。
「はてさて、あの娘も頑固やからなあ。うちの呪いも多少罪はあるかもやが、その本質は『裏切りを行う事で得られる愛』やと思うで。まあ、理解したとしても同情できるかは別問題やけどな……」
「……　その話、詳しく聞かせてくれないか？　この状況は力任せで解決出来る物ではない」
　酒？童子の一言に食いつくジーク。彼の学習意欲は、問題解決に対する食いつき具合にも反映される。加えて、下手すれば自分の大切な人にも危険が及ぶ為必死具合が一段階上だ。
「ほな、ここでは場所が悪いから離れましょか。ここの守りは剣士はんらだけで十分やろ。マスターや医師殿も含め、しっかり聞いて貰わへんとなあ……」
　酒？童子はヒョイと懐にあった煙球をホムンクルスへ投げ、そそくさと管制室に歩いて行った。ジークとジャンヌダルク・オルタ（水着）もこれに続き、ナーサリーライム、茨木童子、ランスロットら近接部隊は警戒の為現場に残留した。
「……　逃げるか？　我が怨念の原初よ」
　あっさりと撤退する酒？に対し訝しげなパライソ。いつの間にか彼女の右手はパラケルススの左腕を掴む。
（この感覚、かつてのあの方の隣にいた時みたい。やはり、拙者はこのような場所で逢瀬を……）
　彼女にとって、お館様は使えるべき相手であって私情はない。しかし、今隣にいる錬金術師とかつて心を開いた策謀士へは、愛も恋も踏

みつぶすレベルの想いがある。それがアサシン・パライソの、いや「望月千代女」の恋愛観なのだから……

情報と準備

「とりあえず、あの娘も生前は呪いを受けつつ忍びとしてとある戦国大名の家に仕えていたんですわ」

こちら管制室、酒呑童子は己が亡くなって随分後の過去の話を淡々と語り始める。

「しかし、その大名の家は信長はんに滅ぼされてしまいまして。あの娘はそのお館様の家臣のうち知略に優れた武将の下で働き始めた。以前より、お館様を始めとして多くの男から寵愛を受けていたあの娘やったが、次の男は違った。その武将は彼女の愛し方が歪んでいたんや」

「愛し方が歪んでるって、広くて長い人類史の中じゃよくある事でしょ？　それに、その人物とあのパラケルススの共通点とかある訳？」

「……」

酒？の話に疑問符を投げかけるジャンヌダルク・オルタ（水着）と静かに聞くジーク。そして、三人の周りにはマスター、マシュ、イアソンの三名がおり、そのうちアスクレピオスとブーディカも来るはずだ。

「その武将は、己の家を存続させる為には手段を選ばなかった。暗殺なども当たり前の時代な上に、弱小勢力やったからな。そして、彼はあの娘への最大の愛情表現として様々な暗躍を行わせ、殺させたんや」

「……　既視感に近いがそれとも違う寒気がするぞ」

この言葉はイアソンから発せられた。もし自分にそのような愛し方が出来れば、と言わんばかりに。

「自分の家を守るための裏切りの負担を共に背負わすよう命じられたあの娘は、快くそれを受け入れた。機械同然に戦っていた己に対し、苦しみを耐えられない事を求めている。己を一人の人間として見ていてくれることに喜びを隠せなかったんや。その後、世は太平を迎えた。彼との間には絶世の美女が生まれたという噂もあるが真実かど

うかはうちも知りまへん。とにかく、望月千代女は『裏切り』を通してしか愛を実感出来なくなった。こっから先は、マスターはんに話してもらいましょか？」
「ハイハイ。千代女が歪んだ愛し方をするという事自体は問題ない。けど、一番の問題はその愛し方を受け入れてしまう男がこのカルデアにいるという事だ」
　呆れ気味にバトンを受け取るマスター。次に語られるのは、パラケルススの過去のようなお話。
「彼は、正直な話別時空の聖杯戦争で裏切りを行った。あくまで己の、人類の為を想っての行為ではあったが彼はそれを深く悔いている。その後も、パラケルススの行いは悪気はなかったとはいえ迷惑にしかならなかった事は言うまでもないだろう。このような行動は結果として千代女の暴走の引き金になってしまったんだ。パラケルススはこのような負い目から彼女に反対は出来ない。ひと悶着終わったら、全ての責任を自分が背負うくらいの覚悟は出来ていると思うよ」
「……よく分かんないけど、要するにあの錬金術師はあの女と心中するって事？　しかも、どちらかと言えば罪悪感のせいで」
「そうなるね、ジャンヌ。最も、彼が誰を愛しているかは俺にも分からない。だから、下手にパラケルススを説得してはいけないんだ。彼の地雷を踏みかねないから」
「残念な事に、あいつと個人で通信できそうなサーヴァントもいないからな。本心は、あいつのみぞ知るってこった。で、どうすんだ？」
「……」
　マスター、ジャンヌ、イアソンと話が続く中、ジークは静かにしていた。
「ジーク、私たちならあいつを止められないかしら？　私の抱えている闇とあんたの言葉なら少しは響くと思うんだけど？」
「……出来るとは思うけど、かなり代償が大きいと思うぞ。俺たちの関係について痛い部分はかなり突いて来ると思うし、何より攻撃を受け続ける必要があるから」
「けど、これを沈めないと私たちの結婚の話が出来ないじゃないの！

他の連中に先を越されたら色んな感覚が混じり合って納得いかないわ」
そして、ジャンヌと本格的な相談をする。その雰囲気は、二人っきりのようだ。
「ジャンヌ、良かった。ようやくジークと結婚する気になったのか。オルレアンへのレイシフト事件で薄々察してはいたけど、いざ二人がこの様に話していると実感が湧いて来るなあ……」
そして、マスターが嫁入りを決めた娘を見る父親のような顔をした。無論、こいつは未成年で年齢としては圧倒的に年少組だというのに……
「!!!! いや、違っくはないけど。その、そういうつもりで言った訳では……」
「そうだな。アサシン・パライソの暴走を食い止めて、俺はジャンヌと結婚式を挙げる。ちゃんとカルデアに貢献して、皆に祝福された状態で身を固めたいからな」
「!!? ……もう！」
この二人は、夫婦になってもワンオクターブズレて噛み合う会話が繰り広げられるのだろう。
「……援軍を呼ぶよ。恐らく、彼らが来れば事態は前に進むはずだ。きっと、二人の結婚式も実現が目の前に現れるはずだからね」
マスターがタブレットを操作しながら話をまとめた。情報はある、人材もある、熱意もある。そして、情報も共有が完了した。あとは、適切な人員を配置して任務に挑むだけ。さあ、交渉の時間だ。

英雄の殺し技

「……マスター、たまには僕たちにも真っ当な休みをくれ。深夜に出撃してその後の昼に再出撃って、思ったより精神が持たないんだからな」

「まあ、通常業務は代わって貰ってるだけ大丈夫だと思うけど。近いうちに、二人でのレイシフトの旅行でもさせて貰いましょ」

マスターの呼んだ援軍とは、勿論アスクレピオスとブーディカの二人の事だ。結婚して夫婦になった事で、二人のカルデアでの立場、特に色恋沙汰に関しての事案については今まで以上に重宝されて（駆り出されて）いる。

「そう、だね。いつになるか分からないけど……二人の休暇とレイシフトは確保するよ。それで、目下で君たちに頼みたいのは……」

「分かっている。望月千代女の暴走の抑制とパラケルススの救出だろ。正直、僕たちでも苦戦すると思うな。ジークの方が説得には向いていると思うし。だから、僕たちはあくまで補佐だ。ネロがトレーニングルームで暴れているから、そっちに注力するかな」

アスクレピオスの「一を聞いて十を知る」のスタンスはチームの迅速さを高めてくれる。もはや、カルデア内部での異常事態では部隊長レベルの実力だ。

「た、頼む。俺じゃあネロは絶対に止められないし、パライソも無理だ。どうしても『マスターとしての命令』が皆の脳裏をよぎって下手な刺激になっちゃうから……」

こうして、マスターから丸投げ?された状態で二人の暴走乙女の鎮静化へ向かうのだった。

「さあ、着いたよ。本当、蛇ってオーラが凄いわね」

ブーディカの言語表現力が消失するレベルの禍々しさが放たれる立て籠もり現場。ジークとジャンヌが離れる前よりもはるかに妖力が増している。

「さてと、ジーク。話しできるか?」

「……出来るとは、思う。やばくなったら援護を頼むぞ」
ゴクリと唾をのむジーク。そして、音も反応できない速さで動き出した。
「ちょっと、アンタ……」
隣にいたジャンヌダルク・オルタ（水着）を素早く己の両腕の範囲内に収め、野次馬をすり抜ける。
「……何を考えている、人造生命？」
もはや、本人の実態がどれ位残っているか分からない状態の望月千代女（アサシン・パライソ）が、彼に対し脅迫にも取れる気迫で質問をする。
「とりあえず、お前には一度落ち着いて欲しくてな。とりあえず、独りよがりな愛は止めて彼としっかり静かな時間を共有してみたらどうだ？」
「……？」
「……」
「じ、ジーク？」
ジークの言葉に対し理解を本能的に拒否している千代女と、渋そうな顔をするパラケルスス。そし：て、ジャンヌも何が起こるのか分かっていない。
「とりあえず、俺たちの姿を見てから自分と彼とを見つめ直してくれ。愛の形という物をな」
そして、平行世界の英雄は否応なく己の想い人の唇を奪い取る。
「!!?ジーク……」
「何事!?」
「……」
周りが一瞬にして視線を揃えて絶句した。しかし、彼らは違った。
「この分なら、問題なさそうだな。僕はトレーニングルームへ向かう」
若干満足げな顔をして、アスクレピオスは萎んでいく邪気へ背中を向ける。
「あっちには、一応頼りになる面子がいる。だから、ブーディカはパライソのヘルスケアを頼む」

「オッケー、互いに円満な鎮静をさせましょ」
エールの意味を兼ねて、この料理長も夫の唇を塞ぐ。あまり気づかれなかったみたいだが、それはそれである。
「……これから、どうなるのかしら？　当事者であるはずなのに、何だか蚊帳の外ね」
そして、千代女の恋敵ナーサリー・ライムが小さく呟く。
物語は、間違いなく加速する。しかし、到達地点に近づくかは誰にも分からない。

妖気の収束と忍びの笑み

妖力は、縛り口が解けたゴム風船のような勢いで萎んでいった。それに比例して彼女を護衛していたホムンクルスも数を減らしていき、仕舞には……

「錬金術師殿、拙者は、貴方様となら、壊れた世界の中でも共に生きていけると……」

少しでも触れたら灰になって消えそうな儚さを放ち、望月千代女は膝から崩れ落ちた。

「……」

そんな彼女を、パラケルススは静かに背中から支えた。その目は、大蛇が展開されていた時と変わらぬ暗さだ。

「……パラケルスス。とりあえず、私たちが言いたい事は主に二つよ。一つは、今回のアサシン・パライソとの共同反乱に関しての処分は不問にする為、静かにしている事。二つは、自分の結婚に関して何かしらの意思表明をする事。貴方がどんな思いで今回の恋愛騒動に関わっているか分からないけど、これ以上は下手に動いてややこしくしないでね」

「そうですね。少し休みたいものです。あの娘の為にも、私の為にも……」

ブーディカは腰に手を当てて、若干呆れかえったように言う。そして、相変わらず柳のような答えた方をするパラケルスス。共にカルデアの最古参の一角、言葉は若干の含みがあるが言いたい事はしっかり伝わっている。

「……ブーディカ、これからどうする？」

そして、ジークは未だにジャンヌダルク・オルタ（水着）を抱きかかえたまま。その想い人は、まだ完全に硬直している。まあ、ジークの行動が桁外れな訳だが。

「とりあえず、当事者二人は一度マスターの部屋に来てもらうとして……　残りのみんなは解散して食事なり睡眠をとるなりしていいわよ。報告とかも全部私がやっておくから。貴方達二人も帰って休

んで。ありがとう」
「そうか。じゃあ、部屋に帰って休ませてもらう。ジャンヌはどうする？」
「……あんたと、離れたくない」
ジークの首に両腕を回して、ジャンヌはこう言った。その口ぶり、仕草、全てが乙女そのものだ。
「ふふふ、マスターには私たちの分も含めて休暇の申請をしておくからのんびりするのよ」
「……そうか、助かる」
目線の先は、全力で想い人へ向いている。もう、目の前の修羅場など記憶から消されているレベルだ。
「……さてと、一緒に来てもらうわよ望月千代女。大丈夫、今回の騒ぎはそんな大した事ないから」
そして、ブーディカは倒れ込んでいる千代女の手を取る。
「ええ、少々生き急いだかもしれません。落ち着きたいと思います、申し訳ない」
ゆっくりと、千代女は彼女の手を取った。その時、この忍びが微かにほほ笑んでいた。気が付いたのは、手を取ったブーディカ本人と隣にいた錬金術師のみであった。
しかし、反応は違った。
（……貴方は、何処まで考えて、騙して、振り回すつもり？　そして、最期は彼と……）
（私の贖罪は、永遠に終わらないかもしれない。美沙夜、私は……）
（拙者は、ここで全てを手に入れる。何人騙しても、どれだけ多くの者を傷つけようと……）
三者三様の思惑の渦は、カルデア中にいる関係者の過去と未来をグチャグチャに乱そうとしている。そして、この暗黒の渦はトレーニングルームからも発せられている。まだ、終わらない。いや、これからが本番なのかもしれないのだ。

お正月特別です。

マスター（以降は「マ」）「えー、皆さま」
アタランテ（以降は『姐』）「２０２２年」
マと姐『明けましておめでとうございます!!!』
マ「本当は、予定通り1月8日に投稿する予定なのですが、新年の明けた朝に突然やろうと思い夕方に描き始めた『僕たちのカルデアアスクレピオスと女の病　お正月特別』です」
姐「私達が話している時点でお察しだと思うが、完全なメタ回だ。本編とは一切関わらないから読まなくていいぞ」
マ「姐さん、ここまで来たなら読んで貰おうよ……　あ、自己紹介忘れていました。私、マスターこと藤丸立香改め里見レイです」
姐「アシスタントを務めている、アタランテ（アーチャー）だ」
マ「ここでは、本年の拙作にまつわる今年の目標を中心にストーリーの今後について話していきます」
姐「とは言っても、マスター。この作品がただの不定期更新から月2更新に変わっただけで何をそんなに改まってるんだ？　この回を読んでくださる器の大きい読者の諸君なら先のことを話さなくても良いと思うぞ」
マ「まあ、それは一つのケジメと言いますか。実際の時間軸の中で定期的にメタ回やらないと自分自身が失踪しそうで怖いので……」
姐「……　ネット小説家のありそうで存在しないあるあるネタを作るな。とにかく、やりたいようにやればいいのだからメタ回も積極的にやればいい。いつでも撮影に応じてやる」
マ「ありがとう、姐さん。ブーディカに頼んでアップルパイ作って貰ってね」
姐「そうする……」
マ「さて、前振りだけで５００文字を超えてしまいました。このペースだと本作品の最長記録がまたメタ回になりそうなので早速行きます。あ、メルトリリス。一つ目のプロット出して下さーい」

テーマ1　今年の目標はズバリ何？

マ「本音を申し上げますと、本作品の完結と『僕たちのカルデア』をシリーズにして新作を執筆することです。本作品は弊カルデアの最古参サーヴァントの一人アスクレピオスにスポットを当てた恋愛ものとなっております。しかし、私は他の方にも視点を合わせて執筆したいですし『微小特異点』と銘打ってゲームで言うイベントストーリーを執筆してみたいですね」

姐「また随分と壮大だな。月に2回の更新で間に合うのか？」

マ「間に合いませんね。ですので、ちょくちょく間に挟んで更新頻度を上げたいです……」

姐「……メタ回書く気力をそっちに回せばいいものを」

マ「言わないで、姐さん。執筆くらいは自由度高くやりたいの」

姐「すまん」

テーマ2　本作品は何部まであるのか？

マ「現在執筆している第二部の次に当たる、第三部で終了する予定です。第二部が思った以上に複雑化したことで描きたいメンバーがほとんど出演を果たし、あとは彼らとその周りだけかなあと考えておりますので、第三部は彼らを中心に回したいと思っています」

姐「ちなみに、そのキャラ達の中で男性キャラクターの一部は既に作品内で登場している。他のキャラ達に関しても、Ｆａｔｅシリーズが好きなら見た事のあるメンバーだ」

マ「もし仮にビビッと来た方がいらっしゃいましたらお伝えください」

姐「いや、余りにも意地悪問題だと思うぞ……」

テーマ3　独自設定はどこまであるのか？

マ「他のカルデアへサーヴァント達も自由に行き来可能な『フレンドゲート』やロビンが使っている開発品『電子タバコ』、他にもタブレットやパソコンなどの通信機器の登場と、このカルデアは独自のシステムを多く採用しております。一応、ＦＧＯ本編で語られていない部分を中心に『ゲームのＦＧＯならあり得る設定』を組み込んでおりますので独自設定はまだまだ増えると思います」

姐「近いうちに、私達が話す形式でもない淡々とした『用語解説』や『キャラ紹介』の話も投稿するべきだと思うぞ。以前のメタ回での解説程度では到底理解しがたいし不親切だ」

マ「善処致します……」

テーマ４　ＰＶや評価などの目標は？

マ「ないですね。気にし過ぎては、胃を痛めますので」

姐「毎日のようにＰＶチェックしている奴が良く言う……」

マ「気にはします。何か感想などを頂いたらすぐ返そうとはしています。しかし、目標はないです」

姐「まあ、それもそうかもな。完結を目標にした方がよっぽど健康にいい」

テーマ５　読者の皆様にお願いしたい事は？

マ「気楽に楽しく読んで頂きたいなあとは常日頃思ってます。あとは、また作品の感想なども欲しくなりますね」

姐「ここだけの話、マスターはこの作品を書くまで一作品当たり１０以上の感想を貰ったことがなくてな。自分の作品を見て『面白い』『凄くわかる』『このキャラに幸せを！』などの感想を貰って凄く嬉しいんだ。暇な時でいいから感想をくれるとマスターは舞い上がって執筆速度が上がるから、宜しく頼む」

マ「お返事も、キッチリさせて頂きます！」

テーマ６　最後に、一言

マ「この通り、メタ回が多いしペースも遅めの私ですが本当に読んで頂いている事に感謝しております。いつか、『この人の作品好きなんだよねえ』と言って頂けるように少しずつ精進して参りますので、今後とも『僕たちのカルデア　アスクレピオスと女の病』を宜しくお願い致します」

姐「以上で、『僕たちのカルデア　アスクレピオスと女の病　お正月特別』を終了する。ここまで読んでくれたこと、本当に感謝する」

マ「改めまして、２０２２年も宜しくお願い致します」

ＥＮＤ（　　）

確認した事実と判明した真実

「先に、確認をしておくか……」

アスクレピオスは、トレーニングルームに向かう途中に小型タブレットを使い通信を取った。恐らく、音声くらいは届くだろう。

『もしもし、こちらロビンフットでえす』

「アスクレピオスだ。そこにジャック・ザ・リッパーがいるか？」

「……いるぞ、アサシン・パライソの立てこもりやネロ・クラウディウスの占拠の放送を聞いて飛んできた。話しかけるのも厳しいくらいに警戒態勢を取っているぞ」

「少し、今回の一連の騒動に違和感があってな。事情を聴いておこうと思ったんだ」

『……聞こえたか、ジャック？』

『……いいよ。何が聞きたいの』

「まず、ブーディカがパラケルススの部屋で見つけた告発文についてだ。ここには、ネロが夜にロビンフットの部屋へ強制相部屋システムを秘密裏に作動させると書かれてあった。事前に対策をしておいたとはいえ、システムは作動した上にネロの協力者アサシン・パライソの協力とかもあり彼の部屋は一大事となった。そんな中、ジャックはいち早くロビンフットの部屋へ駆けつけたようだが、事前に知っていたのか？」

『……その紙を錬金術師さんの部屋の前に置いたのはわたしたち。だけど、それは料理長さんから夕ご飯を貰った後に部屋の前で見つけたものなの。けど、わたしたちが直接渡しても信じて貰えないと思ったから自然と見つけて貰えるように錬金術師さんの部屋の前に置いたわ』

「……アサシン・パライソとは同じアサシン同士で多少は縁があったと思うのだが、何か話したか？」

『……わたしたちの義賊さんに対する想いについて、相談に乗ってくれたわ。レイシフトの提案もしてくれたんだけど、今思えば上手い

事あの女と義賊さんを二人っきりにする為に行った罠だったかも……』
　ジャックの淡々としつつ感情の籠った事情説明は、非常に助かる。真実と共に、経緯も垣間見えるからだ。
「じゃあ、最後にもう一つ。アサシン・パライソは、恐らくネロ・クラウディウスと頻りに接触していたと思うのだが、それ以外で接触頻度が高かった人物はいるか？」
『いるよ。その目的は分かってないけど』
「誰なんだ？」
『あなたの奥さんである、料理長さんよ』
　その時、彼の脳内の神経回路が一気に稼働してショート寸前になりかけた。
「何を話していたか、分かるか？」
『いいえ、分からないわ。けど、その時の忍びさんが凄く笑っていた事は覚えてる。けど、料理長さんの表情は険しかったわ。何か、昔の事を抉り取られているような感じだった……』
「……そうか、とりあえず今聞きたい事は以上だ。協力感謝する。そっちには彼女たちの暴動の被害は及ばないと思うから、少しゆっくりしていてくれ」
　タブレットの通信を切ったアスクレピオスは、そのままトレーニングルームへと歩いて行った。ショートはしなかった脳の回路を、次に備えて回しながら……
「……お疲れさん。こっから先は、お医者様に任せていいんですかね？」
「良いと思う。少しくらい、ここに居て何もしなくても事件は終わりそうだからね」
　ロビンフットの質問に対し、ジャックはそう答えた。そのまま、彼の胸元へ寄り掛かる。
「……結局、義賊さんはどっちをお嫁さんにするか決めた？　あの女とは結構前から腐れ縁らしいけど、これを機に縁を切って新しい家

族と過ごさない？」
「……　もう少しだけ、時間が欲しい。あいつが静かになるのを見届けてから、結論を出す」
「じゃあ、お医者さんのタブレットと音声を繋げるようにするね。彼なら、納得してくれると思うし」
　パッパカとタブレットを操作する暗殺者。その間も、体は義賊に預け切っている。そんな彼女の髪を、ロビンは優しく撫でていた。
「……　名前のない者同士、気楽と言えば気楽なのかもしれませんねえ」
　この言葉は、彼の一つの区切りとなったかもしれない。何かを踏み出すきっかけの言葉だったから。

大まかな用語（役職・アイテムなど）の解説

・研究部

マスターがダヴィンチちゃんに頼んで作って貰った研究組織。主に、技術顧問のダヴィンチちゃんのサポートをしつつカルデア生活の充実化となる製品の開発をしている。部長にパラケルスス。魔術主任に若奥様メディア、化学主任にパラケルススが就いている。他にも、諸葛孔明・ライネスなどが参加している。

・医療部

クエストで負傷したサーヴァントやメンタルケアが必要なサーヴァントが治療を受ける。医療長のパラケルススが一人で回している。最近、ジークがメンタルケア担当になるという話もある。

・厨房

食堂にて一日三回ほど食事を提供するまさにカルデアの胃袋。創成期よりブーディカが料理長を務めている。今では、エミヤも獅子奮迅の活躍をしており彼女の負担も大きく減った。たまに、マルタなどが手伝いもしている。

・図書館

魔術や医療、更には世界中の文学が所蔵されている。司書としてナーサリーライムが勤めている。

・トレーニングルーム

実践的な戦闘よりは訓練としての形の強い武闘派サーヴァント御用達の施設。監督官として佐々木小次郎が、副監督官として長尾景虎が管理をしている。

・フレンドゲート

管制室の奥にある他のカルデア（ゲームで言うフレンド）へ向かう為の転移ゲート。クエスト出陣の時はここからオファーを出している。また、様々なサーヴァントが他カルデアのサーヴァんの元へ遊びに行っている。主な使用者は、ジークとネロ・クラウディウス。

・概念礼装

普段は特別な保管室の中で眠っており、クエスト出陣の際に出陣

サーヴァントの守護を行う。最近、パラケルススやフランケンシュタインが足しげく通っているという噂がある。

・聖杯組、上級聖杯組

マスターから聖杯を貰ってレベルの上限突破をした鯖達。特に、レベル１００まで上がり切っている鯖達を上限聖杯組と呼ぶ。

水着メルトリリス（９６レベ）と佐々木小次郎（９６レベ）が聖杯組に該当。そして、イアソン、アタランテ、アタランテ・オルタ、メルトリリス、ヘラクレスの五名が上級聖杯組に該当する。

・功労者

聖杯こそ与えられていないが、聖杯組に引けを取らない活躍、貢献をしている者に敬意を表してマスターから与えられる名誉職。主にカルデアの最初期のメンバーに与えられる。ネロ・クラウディウス、オジマンディアス、アーラシュが該当する。

彼らは具体的なＶＩＰ室などは用意されない一方、結婚式の時などの催事やマスター不在の緊急事態などに特別な権利などが与えられる。

しかし、その一人であるネロ・クラウディウスが第二部の恋愛騒動の首謀者なので一部のサーヴァントから不審がられている。

・準功労者

功労者ほどではないものの、比較的初期から大きな活躍をしている鯖達。ほぼマスターの主観で与えられる為、特に権限や待遇に変化はない。強いて言うなら、聖杯組でもない功労者でもないのに要職に就いている鯖達へマスターからの権利の証明書・箔、お礼みたいなものである。

アスクレピオス、長尾景虎、アシュヴァッターマン、レオナルド・ダ・ヴィンチ（ライダー）、パラケルスス、メディア、ナーサリー・ライム、エミヤ・アサシンが該当する。

本当はマスターはもっと増やしたいようだ。しかし、マシュから「功労者さんの価値が薄れてしまいます」と言われ抑えている。なおこのマスター、マシュには「特別功労者」という訳の分からない職を与えようとしていた。

実質的な内部の要職は彼らが担当している事が多く、実質的な中間管理職メンバーである。

・選抜組

準功労者同等、特に権限に変化はない。しかし、高難易度クエストなどにマスターが好んで選抜するので特別な共通部屋を使える鯖達。なお、聖杯組は佐々木小次郎以外が全員属している。

具体的なメンバーは以下の通り。

・イアソンを始めとする「アルゴー号ゆかりのもの」属性を持っている鯖。

・メルトリリス、アタランテなどの「ＣＶ早見沙織」の鯖。

特に「ＣＶ早見沙織」のサーヴァント達は本編でこそ出番が少ない者の「メタ回」と呼ばれるマスターからの外伝もどき話の時はアシスタントやカメラマンなどに抜擢されている。

・パソコン

アスクレピオス、ジーク、ジャンヌダルク・オルタ（水着）などの比較的カルデアへの貢献度が硬いサーヴァントが仕事場・個室に配置している。メールは勿論音声通話や検索エンジン（カルデア専用）も整備されている。

・通信機器

基本的にカルデア内部での公共放送で連絡事項は行われているが、個人用のタブレットが任意でサーヴァントへ配布されている。ただ、大半のサーヴァントにとっては必要性を感じて貰えていない。それでも、アスクレピオスやネロ・クラウディウスなどが各々の用途で使用している場面が伺える。他にも、イヤホンやメガホン、周囲のサーヴァント探知機など色々あるが使っているのはイアソンくらいである。

・電子タバコ

研究部が開発した健康に配慮されたタバコ。ロビンフットやウィリアム・テルなどのスモーカーは皆このタバコに変えた。お陰で、喫煙所の配置の必要性がなくなり火事のリスクも減った。

皇帝の決意

魔力は、どちらかと言えば純粋だ。しかし、如何せん量が多い。例のレイシフトシャッフル事件の時よりとは明らかに比べ物にならないのだ。

「……佐々木小次郎は、確かに対応出来ないだろうな。あまりにも専門外だ」

入り口でぐったりしているトレーニングルーム監督官を見てアスクレピオスは納得する。

「さてと、この問題児さんは何処までやらかしてくれるのやら……」

魔力のカーテンをくぐる医師神。微かに漂う熱気と胃もたれするくらい重たい愛のオーラが彼を襲う。

「よく来たな、余と弓兵の仲人よ」

そして、ネロ・クラウディウスが覇気全開で立っていた。後ろに置いてある砲台を見て彼は確信した。

「お前、どこから水着霊衣を？　このカルデアに水着のお前は召喚されていないはずじゃ……」

そう、彼女は水着（キャスター）になって小次郎を倒したのだ。全体宝具の相性不利宝具相手では、流石の剣聖も分が悪い。加えて、彼女の事だから「功労者」の力を行使してトレーニングルームの権限も奪った上で襲撃したのだろう。

「マスターのフレンドから、今後の協力関係を保証して借りた。まあ、厳密にはフレンドの主力サーヴァントの一人ってだけだがな。如何せん、あちらでも内部で戦争が起きているようでな。思うように己の立場を確保できなかったが故にこちらでも戦うつもりらしいぞ」

堂々とネロは答えた。また、己の味方を増やすべくあの手この手と暗躍していたようだ。

「しかし、今のお前は孤軍奮闘状態だぞ。先程、アサシン・パライソの反乱が抑えられたところだからな」

「……構わぬ。余の目的はほぼ既に完了しているのだからな」

そういう彼女の手元には花嫁衣装（嫁ネロ霊衣）があった。

「!!……　まさか、このクーデターの勢いそのままに結婚式を執り行うつもりか？　まだロビンフットから正式な求婚の承諾も受けていないというのに？」
「そんなこと、後から愛して貰えばそれで良い。今はただ、騒ぎが大きくて照れているだけであろうからな」
「そんなものなのか？　僕には、ロビンフットがただ困っているだけにしか見えないぞ」
「奴の事は余が一番知っておる。問題ない」
　平行線、いや捻じれの会話を繰り広げる二人。特にアスクレピオスが、ネロを信じていないのだ。
「自分一人で自分の都合が良いように振舞うから孤立するんだ。マスターは皆のマスターであるし、ロビンフットもカルデア全体をサポートしているアーチャーなんだぞ」
「だから、それを余だけのものにしたいと申しておるのだ！」
　そして、ネロは叫んだ。乱雑に花嫁衣装を放り投げ、魔力を注ぎ強引な霊基を変える。
「……　本来あるはずのない霊基で立っているのも楽ではない。このトレーニングルームを開放して欲しければ要求は一つだ。余と弓兵の祝言を行え。仲人はお主ら夫婦がしろ。奏者に代表挨拶をして貰い、エジプトの王や船長にも祝辞を言って貰うぞ！」
　遂に、強硬手段の要求が出た。内容は、予想通り。本来はアサシン・パライソを焚きつけて有利な状態で要求するつもりだったのだろうが、もはや時は残っていないようだった。
　魔力の量はもはや聖杯を起動させた時に匹敵し、その裏には別カルデアからの魔力サポートもあるようだ。つまり、今のネロは特異点を上回るレベルの力がある。とてもじゃないが、アスクレピオス一人では太刀打ち出来る相手ではないのだ。
「……　援軍を呼ぶべきか？　いや、そもそもこの問題に直接メスを入れるべきではないだろうか？」
　そう呟くアスクレピオス。戦闘に関しては指揮を執れるほど頭が回らないが、それでも知恵は絞れる。

「こちら、アスクレピオスだ。トレーニングルームにジャック・ザ・リッパーとロビンフットとジークジャンヌを連れてきてくれ。ネロが手の付けられない程に暴走している！」
『……ズザザ了解した！　少し時間がかかるから、それまで持ちこたえてくれ！』
　通信機から、ダ・ヴィンチの返事が来る。恐らく、ネロに繋がっている魔力リソースの無力化なども行ってくれるのだろう。
「……さて、少しの間だったら愚痴とか聞くぞ。患者の話を聞いてやる事も、医者の務めだからな」
　アスクレピオスは軽く腕まくりをして息を整える。愚痴を聞くと言っても、景虎の時のようにただ話を聞くだけで済まない事は重々承知だ。
「余は間違ってなどいない。多くの者から支援を受けているのがその証拠！　患者などと抜かす愚か者には、余が直々に鉄槌を下してやろうぞ！」
　その目は、全てを滅ぼす暴君の目をしていた。もし医師が彼女の前で跪く事になれば、その時は彼女は生前の暗さを取り戻してしまうだろう。

皇帝の思い出

彼女の剣技は、単純明快だった。ただひたすらに、斬る、回る、走る。まるで、舞台の上で踊る役者のようだ。そして、彼女の動き一つ一つに押し流されるくらいの魔力の波と愛の渦が溢れていた。
「……!! これ、一瞬でも本気出されたら僕の命はないな。今の時点でも随分不利なのに、かなり手加減されているみたいだし」
「流石、人を良く見ておるな。ならば、もう少し余の想いをぶつけても問題ないな」
若干苦しげなアスクレピオスに対し、ネロ・クラウディウスは更に強く攻めると宣言。剣の振りかざす速度が二段階速くなる。
「!! これじゃあ、援軍が来るまで耐えられるかどうか。そして、援軍が来て解決するのかどうか……」
擦れ擦れで剣先をかわすが、体勢を大きく崩す。
「……このまま終わっても興ざめだからな。少し、昔話をしようか。お主が医務室に一人で籠っていた頃の話を」
ネロは、満を持して攻撃を止めた。彼女からすれば、この医師神を自陣営に取り込む好機である。そして、ゆっくりと言葉を紡ぎ、思い出を奏で始めた。
「そもそも、あいつとはＢＢらと同じ世界で出会い……」

「別世界の縁、ですかい？　オレには、どーにも実感が湧きませんねえ」
「余も奏者の言う事を鵜呑みにはしていない。しかし、奏者は何の因果か特定のサーヴァントに対し異様な執着を見せる。その者達には幾つか共通点があるらしいが、その一つが『別世界で仲良くしていた者たち』らしい」
「……あーもしかして、マスターが日ごろから『衛宮夫婦がー！』や『シロセミーーー!!』て言っている奴ですかい？　ロシアを攻略してからは『カドアナカドアナ』言ってますし」
とある夕方のカルデア。クエスト帰りでヘトヘトのネロとロビン

は食堂にて軽い雑談をしていた。現在は、北欧の攻略に乗り出しているがどうにも進みが悪い。
「マスターは妙にサーヴァントに対する知識が豊富ですからねえ。話し相手として成り立つのはフードのキャスターさんや長剣のアサシンさんくらいなのではないかい？」
「そうだな。あとは、小さな技術責任者と頻りに話をしておる。『俺の、俺たちのカルデアは少しでも多くのサーヴァントに幸せになって欲しい』と常日頃言っているそうだぞ。お、ここに座るぞ」
「へー、随分と思いやりのあるマスターで。じゃあ、以前オレたちに『他に面子がいないからしょうがないんだけどさ、クエスト帰還に関するペアアシストは君たちでやって』って言ったことも『別世界の縁』ってことですかい？　どーにも回りくどいですねえ、説明してくれればいいのに。はいはい、そこですね」
　話が佳境に迫ったところで食堂に到着。流れるように同じテーブルについて話を続ける。
「余にも、別世界の記憶が残っておる。ここにはいないが、あの赤ランサーとは共に歌を競い合ったし、キャス狐に対しては何とも言えない因縁を感じる。お主も……　戦った記憶がある」
「メルトリリスとかは、オレたちと面識あるメンバーの中のお気に入りみたいですがねえ。して、そういう暗黙の了解を確認した上でオタクはどうしたいんです？」
　ロビンにとって、目の前にいる皇帝はかつての宿敵に似た何か。他のサーヴァントよりは距離が近いかもしれないがそこまで親しい気はしない。
「余と、もう少し仲良くならぬか？　別世界では意志思想まで真逆であったが、だからこそ生み出せるものもある上に今は味方だ。奏者が軽く心配していたのだよ、軽い気持ちでペアにしてしまったが連携は大丈夫かとな」
「さあ、一応オタクとは上手くやっている気はしますけどねえ。あまり賛成しながら動く事は出来ませんですが、嫌いって訳でもないですし」

なあなあと受け答えする彼には、どうにも本心が見えてこない。やはり、ネロに対しては思う所があるのだろうか。
「正直に問おう。余といるのは苦痛か？　周回も特異点も異聞帯も奏者に選ばれ伝承結晶も強化クエストも幕間も遂行された余は妬ましいか？　聖杯も貰っていないのに絆がカンストしそうな余を嘲笑うか!?」
そして、徐々にネロの感情が爆発していく。食堂の喧騒から考えればまだ小さいレベルではあるが、このままでは魔力暴走も起こしかねない。
「一度、場所を変えましょう。愚痴や不安はそこで聞きますから」
手元にある夕食を置き去りにして、二人はトレーニングルームの一角へと移った。

「……なるほど。最近周りのサーヴァントからの目が冷たい。マスターも、最近クエストに呼んでくれない。完全に自分が用済みになってしまい今まで人脈をろくに築けていないから今後が不安だと」
「う、うむ。恥ずかしい話ではあるが、今まで余はクエスト出陣ばかりしており人間関係に一切手を付けていないのだ」
話を聞いた結果、これである。仕事一筋だった男が、定年後に虚無感に襲われるようなものだろう。しかし、これがカルデアでも起こることは、ロビンも予想外だ。
「……それなら、今からやればいいんじゃないですか？」
タバコを吹かしながら、ロビンは答える。
「何やかんや、オタクは皆から愛されるものを持っています。それを活かして明るく、正しく接していればそのうち周りに人が集まると思いますよ」
「そうか？　では、お主も余と仲良くしてくれるのか？」
蹲っているこの可愛い暴君は、顔だけ挙げて弓兵を見る。
「ま、お相手できる範囲で良ければ良いですよ。オタクも一人の女性なんです、失礼をしてはいけませんからね」
ロビンフットはここ一番の笑顔を見せる。

「……感謝するぞ。縁のある緑の弓兵よ」

ネロは、カルデアに来て初めての表情をロビンに見せた。重い鎧を脱ぎ捨てた、ひ弱な少女のように……

人物紹介です

・アスクレピオス

本シリーズの主人公。このカルデアでは「医療長」「研究部化学主任」「準功労者」「選抜組」「アルゴノーツ」の肩書を持つ中心サーヴァントの一角。昔から気兼ねなく心を預け合っていたブーディカと結婚し、今ではカルデアの恋愛相談担当や恋愛に纏わる騒動の収拾係もするようになった。

好意を持たれていた長尾景虎に関しては「呆れながらも楽しく話す仲」ではあったが彼にとってはそれが妻へ望む内容でなかった。もし、彼がアルゴノーツとしてイアソン達に関わる事が少なかったら、景虎を妻にしていたかもしれない。あくまで、環境の違いが彼の伴侶を決めたのだ。

第二部では、事件現場への介入や騒動の首謀者の説得などの重要任務に当たっている。そんな中、彼は一連の騒動の黒幕と真実にメスを入れる。

・ブーディカ

本シリーズメインヒロインの一人。最初期からカルデアの厨房を一手に担っている「料理長」。兼ねてから思いを寄せていたアスクレピオスと結婚。女性サーヴァントから恋愛相談を受けつつ、夫と共に騒動の解決に動くようになった。その他、女性サーヴァントからの人望も大変厚いお姉さん。

第二部では、ジャンヌダルク・オルタへのサポートとアサシン・パライソへの事後処理（ヘルスケアとカルデアへの復帰）を担当することに。生前の仇敵、ネロ・クラウディウスに関しては、表向きこそ割り切っているもの互いに裏で思っている部分があるようだ。理由は、カルデア内部の正反対の立場とアスクレピオス関連の恋愛にネロが首を突っ込んだからだ。

・長尾景虎

本シリーズ一部でブーディカと共にメインヒロインを担っていた

人物。「トレーニングルーム副監督官」であり「準功労者」である最古参サーヴァントにして弊カルデア最初の配布鯖。長い間、ランサーの主力として前線を張っていた一方、その確固たる立場と関係者の少なさからアスクレピオス以外に友人もいない。

そんな彼に求婚をしたが自分を選んでもらえなかった。それ以降、互いに恨みなどはない物のアスクレピオスと話をする機会は一切なくなった。

第二部では、各々の恋愛模様を盃片手に傍観を決め込んでいる。彼女が表立って行動をする事はない。それでも、彼女なりにカルデアと想い人と恋敵を思いやっているようで……

・ジャンヌダルク・オルタ（水着）

第二部の実質的ヒロイン。本体（ルーラー）の派生形（オルタ、アヴェンジャー）の更に派生形（水着、バーサーカー）であるが為に、ジークへの想いに引っかかる日々を送っていた。また、彼が絵に描いたような鈍感男の為にストレスも凄い。そして極めつけはオルタ特有の素直になれない性格も災いし平行線をたどっていた。

しかし、ブーディカの後押しもあり彼の胃袋を掴むことに成功。そして、フレンドゲート帰りのジークに対し感情が爆発して実質的に両想いとなるが……

・ジーク

弊カルデアの周回アタッカー。ジャンヌダルク・オルタ（水着）に対しては少なからず良い思いはしていたが、自身が端末である事を後ろめたく思っていたがアスクレピオスのアドバイスで彼女の生まれ故郷オルレアンにレイシフトする事に。しかし、他の恋愛騒動に巻き込まれ色々大変な事になる。

それでも、彼はジャンヌと共に騒動の現場に乗り込み遂には公衆の面前で想い人の唇を奪う。

・ネロ・クラウディウス

弊カルデアの三人しかいない「功労者」。最初期からＮＰチャージスキル持ち全体宝具兼三回ガッツスキル持ちという汎用性の高さからストーリー、イベント、周回の全てで前線を担っていた。しかし、そ

の生前からの暴君っぷりとクエスト出陣回数の高さで他大半のサーヴァントとのコミュニケーションが取れず孤立をしてしまう。
しかし、別世界の縁もあってロビンフットからは人間関係のアドバイスを貰うようになり、その感謝の気持ちは恋心へと育っていく。そのまま恋心は己の孤独と比例して大きくなり、カルデア中を巻き込む大騒動へと発展する事に。
レイシフトされたサーヴァント達を強制シャッフル、トレーニングルーム占領など既にカルデアを震撼させる事件を巻き起こしているが、彼女の裏には更なる黒幕が？
・ジャック・ザ・リッパー
弊カルデアでは初の星５のアサシン。どちらかと言えば「Ｆａｔｅ　Ａｐｏｃｒｙｐｈａ」としての記憶が色濃く反映されている。その為召喚当初はカルデアのマスターを始め同僚たちにも心を開かずにいたが、施設の案内からコミュニティの参加の促しなどをロビンフットが面倒見てくれた事で馴染むことが出来た。その後もロビンと一緒にいる時間は長く、恋愛感情が育まれるのも必然だった。
その後第二部本編では、ネロ・クラウディウスの妨害や騒動の煽りを受け続ける事になる。それでも、必死にロビンの為に行動を尽くし続けて、今の所ロビンの近くにいるのは彼女である。
・ロビンフット
弊カルデアの最古参サーヴァントの一人ではあるが、元より単体弓の控えメンバーだったこともあり徐々に前線から退いていった。しかし、マスターからの信頼は厚く子供サーヴァント（ナーサリーライム、茨木童子、ジャック、バニヤンなど）の世話係を務めた。彼の持ち前の世話焼き気質と優しさは結果としてカルデア中を巻き込んだ恋愛騒動の火種となってしまう。
本人の気持ちはまだ誰にも判明されていない。
・アサシン・パライソ
弊カルデアでは、ゲーティア戦直前に紹介され、そのデバフスキルから未育成ながら先発メンバーに抜擢された陰の功労者。しかし、単体殺のメンバーは他にも多く出番は特殊な相手ばかり。次第に高難

易度用の「アルゴノーツ」パーティーが編成されてからはほとんど何も仕事がなかった。
その後、「裏切り」という過去が共通しているパラケルススに対し依存に等しい恋心を持つようになる。
そのまま、彼女は実質的な駆け落ち相手を手に入れるべく皇帝と手を組んでカルデアを暴れる事になった。

・ナーサリーライム

弊カルデアの初期はＮＰチャージ持ち全体アタッカーとして活躍していた「準功労者」。今は、「図書館司書」として活動。アスクレピオスの恋路も裏からサポートした。そして、自身は同じキャスターの縁などもありパラケルススに好意を寄せる。
第二部では、基本的にアサシン・パライソの後手に回っていて苦戦気味。しかし、それでも己の恋路を貫くべく意地を見せていくことになる。

・パラケルスス

弊カルデアでは絆礼装を早めに入手し、周回のサポートで活躍している「準功労者」。平時は「研究部部長」として電子タバコの開発や素材透過薬の発明などに勤しんでいる。その一方で、過去に自分が聖杯戦争で行った裏切りについて自問自答を繰り返し罪悪感に襲われている。
結局、アサシン・パライソの企てになし崩しで参加する事になった。彼の中に、かつてのお嬢様への罪悪感以外の感情があるのかを知る者はいない。

・マスター

マスター。カルデアにいるサーヴァント達の福利厚生などの私生活充実も目指してカルデアの要職を配置している。また、サーヴァント同士の結婚に関しては積極的に推進している。マシュと共に、カルデア内部の人間関係を調査して、恋愛事情などを後方からサポートする。

・マシュ

マスターの秘書的ポジション。カルデア内にいるサーヴァントの

一向に発展しない恋愛模様にモヤモヤしている様子。もはや、シールダーではなくリサーチャー（調査員）である。

それぞれのキッカケ

「……　これだけ聞いていると、お前がこんなに暴走している理由は理解出来ないぞ。とても幸せそうに見える」
　蛇を操ってネロの剣先を受け流すアスクレピオスは、話を聞いて疑問符を拭き出した。何か事件解決の糸口がありそうだったのだが、今の所は見つからない。
「話は、今の部分でようやく半分だ。これからが、より大事な部分になるぞ」
　息を乱さぬ足取りをしながら、ネロ・クラウディウスは答える。肩で息をしているアスクレピオスと見比べると、戦況は赤子にも明らかである。
「弓兵からアドバイスと励ましを貰った後、余は他の者たちと蜜月な関係を築けるように努力した。しかし……」

「近寄るな！　俺は貴様の酔狂な遊びに付き合う気分になどならん」
「……　その顔を見ていると、妙な寒気がする。そっとしておいてくれ」
「……　ローマ！」
　時に辛辣で、時に意味不明な言葉を受け続けてしまう。生前・別世界・容姿の因果などが悉く彼女の周りを空っぽにしている。加えて、己が今まで如何に周りを見ていなかったのかを思い知ってしまった。最も多い投げかけられた言葉が「都合のいい時だけ近づいて来るな」である。
「クエストに出ていた時は、他の者どもなど余の引き立て役かと思っていた。チームという感じはあまりしなかったし、余の繰り出す演目について来る者はほとんどいなかった。その代償がこれか……」
　蹲るネロ。思えば、サーヴァントになって以降自分の周りにいた人々は少なからずネロの我儘やお茶目を許容していた。それは、当たり前ではなかったのだ。
「弓兵、どうすればよい？　今更カルデア内で良好な関係など築けそ

うにないのだ！」
「そもそも、この皇帝サマの人への接し方に問題があるのだが……
まあ、それは置いておいて」
　ポケットから、カルデア研究機関最新作である電子タバコを取り出すロビンフット。煙は出ないが、確かにこれはタバコの味である。
「何も、カルデアにいる全員と仲良くする必要なんてありはしませんよ。それに、『フレンドゲート』を通って他のカルデアに行けばここにはいないサーヴァントと仲良くなれる可能性もありますし、妙に固執する必要はないと思いまっせ」
「余は、それでいいのか？　てっきり、余の性格とかを非難するのかと思ったぞ」
「好き嫌いは誰だってあります。大事なのは、自分を好きになってくれる人を如何に多く見つけるかだと思いますよ」
　落ち着いたロビンの声に、ネロの声色も徐々に明るさが戻っていく。こんな英雄が一人寂しい思いをしていること事態、このカルデアは異状なのであるが、それは在籍メンバーなどの都合である。
「……　あの小生意気なランサーや世話焼きの赤いアーチャー、はたまた舞台が好きな目立ちたがり屋など、周りのカルデアにはオタクと気が合いそうなサーヴァントは一杯いますよ。少しだけ、外に手を伸ばしてみれば案外あっさりと解決するもんじゃないですか？」
「そうか、余は他のカルデアに行けば友を作れるか……」
　ゆっくりと立ち上がるネロ。その目は、微かだが輝きを取り戻していた。
「感謝するぞ、緑の弓兵よ。いつも余の隣でささやかな励ましは力になるからな」
　そして、そのまま管制室へと歩みを進めていった。皇帝に相応しき足取りで。
「ふーん、あの皇帝さんってそんな風に悩んでいるのね。私達とはまた違った感じがするわ」
「思ったより繊細みたいですよ。別世界のマスターがよく彼女を扱っ

ていた訳ですね」
・
「……義賊さんは、皇帝さんのマスターになるのは嫌？」
「扱えませんよ、あんな暴君。せいぜい周りが言う通り『御世話役』が関の山ですな」
管制室の隅、ロビンの膝の上でクエスト終わりの武器手入れを行っているジャック・ザ・リッパー。カルデアに召喚されてからという物、彼女なりに友達を作りつつロビンにも頼っていた。最も、ロビンがジャック以外にも世話をするサーヴァント（茨木童子・ナーサリーライムなど）との友人関係が主ではあるのだが。
「じゃあ、旦那様は？　面白くなりそうだけど」
「無いですかねえ。だって、お世話役の時より我儘になりそうですから」
「そっかー、義賊さんなら良い旦那様になりそうだけど。いっそのこと、わたしたちが貰おうかなあ」
ナイフを軽く回しながら、ジャックはこう言った。
「それ、今と変わらないのじゃないかい？　今みたいに？気に話を聞いたりお手伝いをしたり」
対するロビンは、どうにも呆れ気味。まあ、よくある子供の冗談だろうと思い聞き流す。
「……じゃあ義賊さん、もしわたしたちが貴方に今まで以上の事を求めたらどうする？」
鋭い眼光と躍動する小さな体。ロビンは気が付けば、この幼き暗殺者に押し倒されていた。
「！　心臓でも、欲しいんですかい？」
「うんうん。義賊さんの愛が欲しいんだ」
突き付けたナイフは小さく震え、その言葉に色はない。いつも隣で支えてくれた義賊の全てを欲して、意識すらも置き去りにした行動であった。
「わたしたちには、義賊さんが必要。友達でもなく、お世話役でもなく、旦那様として貴方が欲しいの。サーヴァント同士が結婚だなん

て、可笑しい事を言っているのは分かってる。だから、せめて恋人になってくれないかな？　マスターもきっと、喜んでくれるから」
「……　本気か？」
「本気。ずっとわたしたちと一緒にいてくれたし、これからももっと近くにいて欲しい。わたしたちも、義賊さんの為なら何だってしてあげたい。命だって構わないよ」
「……」
「……」
　しばしの沈黙。そして、ロビンフットはジャック・ザ・リッパーの顔を撫でながら体を起こす。
「……　少し、時間をくれないか？　考える時間が欲しい」
　その目は、ナンパ男の顔と対極に位置づく。彼は、真剣に考えようとしているのだ。
「分かった。じゃあ、わたしたちからの誓いとしてこのナイフをプレゼントするわ。もし、わたしたちとこのカルデアの最期を見るつもりだったら、その時に何か頂戴」
　ジャックの態度は、その見た目以上に大人の女性だ。そして、二人の空間も大人そのものだった。
「……　奴を、他の誰かに奪われる!?　それだけは、あってはならない。あってはならないぞ！」
　一方、管制室のフレンドゲート付近でこのような言葉が聞こえる。そう、ネロ・クラウディウスその人だった。
「出し抜かねば、負けてしまう。より強く愛を吐露せねば取られてしまう。手段を選ぶ暇は、ない……」
　策略を巡らせ、半ば脅迫に近い交渉もプランする。それが、皇帝ネロ・クラウディウスの伴侶確保だからと言わんばかりに……

仮初の説得、深まる真実

「……　つまり、この一連の騒動は自分の方が長く彼と一緒にいたのに先手を打たれたという焦りから来た強固言う手段という事か？」
「うむ。少々手荒だったかもしれないが、それだけ余は弓兵を求めておるのだ。今回のトレーニングルーム占拠に関しても、奴が来てくれると思ったのだが……」
「……」
　完全に体力が消耗したアスクレピオスは、ようやく真相の一部を見た気がした。そして、裏側の真実にも一歩踏み入れた気がする。
「奴の本気が知りたい。いつもユラユラしている奴が、血相を変えて余の隣に駆け寄って欲しかった」
　ネロの持つ大剣は、一切の微動をせずに宙を突き刺している。彼女の並々ならぬ覇気が、この剣にも伝導して恐ろしい熱を帯びているみたいだ。
「しかし、奴は来なかった。何処にいるのか知っておるのか？」
「……　一応、自室にいるはずだ。ただ今回の騒動で、ジャック・ザ・リッパーが護衛目的で彼の部屋の中に入っているかもしれないな」
「くっ！……　何もかも遠回りではないか！」
　ネロがやけになって描く大掛かりな剣の軌道。精彩さもつい先ほどと比べて大きく欠けている。
「……　いくつか質問がある。僕たちの行動は基本的に分かっていたようだが、その理由はアサシン・パライソの情報収集と秘かに仕込んだ盗聴器か？」
「そうだ。盗聴器は、管制室とトレーニングルームくらいにしか仕掛けていないがな。奏者の部屋や食堂の話などはすべてあの忍びから聞いた」
「……　二つ目、今回トレーニングルーム占拠のきっかけとなったパライソからの報告の内容は？」
「確か、『拙者たちの計画が完全に判明してしまったようです。ここは、秘密裏に処理される前に表に打って出ましょう。恐らく、対象も

それを見て何かしら行動を起こすはずです』って言ってたかの？」
「……　最後の質問だ。パラケルススの部屋の前にお前らの真夜中の襲撃作戦に関する密告の書が書かれていた。これについて知っている事を話せ」
「えーとな。『ジャック・ザ・リッパーが、我らの事を密告した。錬金術師様の部屋の前に告発書類を置いた』みたいな話は聞いたな。あとは、知らん」
「そうか……」
　アスクレピオスは、事情を聴いているうちに裏でコッソリ自分の体力を回復させていた。お陰で、あと数分は彼女の剣捌きにも耐えることが出来るはずである。
「君が如何に彼を愛しているかはよく分かった。こちらとしては機会の平等性に歪みはないと思っていたが、そこも君からすれば違かったことも分かった。だから、正式な話し合いの場を設ける。一度静まってくれ」
　宝具もしっかりと準備し、最悪の事態も想定した。流石に、これ以上の身勝手は功労者であろうと処罰の対象になる恐れもある為ここで鉾を納めて欲しい所。
「……」
「頼む。お前が他のカルデアに出張してコミュニケーションを取ってくれている事に関しては寧ろ感謝が必要だ。だからこそ、対外の顔となりうるお前を処分してはいけないんだ。このまま暴走が続いたとして、ロビンフットがお前を選んだ場合でも、彼の立場が悪くなるんだぞ」
「……　平等な場所で、奴に最後の決断を問いたい。用意をせよ」
　周囲の魔力が急激に静まっていく。結局、応援は間に合わなかったが何とかなったようだ。

始まった裁断

その後すぐ、ロビンフットとジャック・ザ・リッパーはトレーニングルームへやって来た。アスクレピオスとネロの会話は全部聞いていたので、すぐ対応してくれたのだ。

他にも、マシュとレオナルド・ダ・ヴィンチも緊急事態に備え駆け付けてくれた。勿論、ジークとジャンヌダルク・オルタ（水着）も駆け付けた。

「……このドロドロラブゲームが終演をすれば、他の皆さんもドンドンくっつくはず！　もどかしい両片思いとか水面下でけん制し合う三角関係はもうお腹一杯ですからね」

「マシュ、少し深呼吸しようか。私達の仕事は、あくまで緊急事態の時だからね」

武器を構えるカルデアの主力二人。やはり、ロビンフットの妻はカルデア全体から見ても注目されている。

「……まあ、ようやく決着がつくと言うのなら見届けてやりましょ。ただし、あたしたちの結婚式の方が先だからね！　そこは絶対よ」

「ジャンヌ、そこはどちらでも良いのではないか？　結婚式の順番くらいで俺の想いは変わらないぞ」

「〜〜〜〜〜」

そして、残りの二人はもう勝手に仲良くして欲しいレベルだ。もはや、アスクレピオスが何かメスを入れる必要すらない。という訳で、今はこちらのオペに集中である。

「……それじゃあ、改めてルールを説明する。ネロ、ジャックの両名はそれぞれ一時間ほどシミュレーターの中でロビンフットとデートをして貰う。その中でなら、洗脳などの強行手段以外何をして良い。だが、念のためロビンフットの胸元に盗聴機を付けさせて貰う。その後に一時間の思考時間をロビンには設け、このメンバー全員の前で誰と結婚するか宣言して貰う。勿論、他に意中の者がいるのなら構わない。この場での彼の意思表明を基に、僕たちが結婚式の準備に取

り掛かる。これでいいな？」
「ここまでお膳して頂いたんです。それに従いますよ」
　電子タバコを一息吸って、ロビンフットは答える。その何とも言えない面持ちは、一体何なのか。
「……　弓兵に全て委ねる」
「義賊さんが納得しているなら、信じるだけだよ」
　ネロ、ジャック両名も一応の合意は貰えた。あとは、見守るだけである。
「それじゃあ、まずはネロ・クラウディウスが行ってくれ。時間になったら盗聴器にあるアラームを鳴らして知らせるから、それまでは気ままに過ごしてくれ」
「う、うむ」
「了解しましたよ」
　武器をしまったネロと盗聴器を取り付けたロビンフット。そのままトレーニングルームからシミュレーターの直通通路を通って行った。
「さて、ロビンフットから拾われる音声はこのマイクに繋いである。皆で聞いてみようじゃないか」
「……　そうだな」
　一同がマイクの傍に集まって、スイッチがオンになった。ジャックが震えながら聞いている事については、もはや言うまでもないだろう。

「……　弓兵」
「何ですかい？」
「余がお主に惚れた理由は沢山ある。ありのままの余を受け入れてくれる事や、悩んだ時も余の個性を尊重した助言をしくれる事。何より、どんな時も余の事を見捨てずに色々と手を貸してくれた事。都合の良い召使などとは思って居らん。むしろ、夫婦に近い感覚で甘えていた。もし、それが負担だったたとしたら謝罪する」
「別に、今に始まった事でもないですし私が世話焼き気質である部分

もあるので一切困ってないですよ。夫婦になったとしても、どーせ妻の我儘に付き合って色々と世話を焼くでしょうし」
　シミュレーター内部の林をのんびりと歩く二人。手が触れ合わない微妙な距離感を保ちながら、当てもなくフラフラとしていた。
「お主のお陰で、余は奏者とお供に前線で戦い続けることが出来た。即ち、余が『功労者』として今カルデアにいられるのはお主あってこそなのだ。だから、そのお礼も兼ねて余の伴侶となって欲しい。今回の騒ぎで、余の立場に不満を持つ者は出てくるだろう。しかし、それも余は甘んじて受けるつもりだ。お主がいれば、そんな声など一切気にも留めぬ。だから、余の隣にいてくれないか？」
「……」
「余は、お主にとってやはり負担か？」
「……」
「弓兵？」
「負担だったら、私はとっくにジャックと結婚してますよ。迷っているからこそ、今ここにいるんですから」
　行き止まりだ。一応、ここにベンチがある。二人は無言で座る。
「何で迷っておるのだ？　負担でなければ教えてくれ」
「……　単純な話です。お二人とも魅力的であるって事だけですから。それに、結婚ってイメージが湧かないからどちらをお嫁さんにするべきか分からないだけですよ」
「そうか。なら、余にするのを勧めるぞ。余は結婚の経験があるから『良き妻』というものを良く理解している。例えお主が結婚生活において落ち度があったとしても助けられるぞ」
　ベンチに座ってすぐ、ネロはロビンとの距離を詰めて彼の肩に寄り掛かった。「正しい夫婦のイチャイチャの仕方選手権」があれば高得点を狙えそうな仕草である。
「あとは、純粋にお主は余かあの暗殺者に『恋愛感情』というものは持っているのか？　このままだと、結婚が形だけになって結果として離婚もありうるのだが……」
「……」

「これは、正直に答えて欲しい。どんな言葉でも、余は否定しないから」
ネロはこのままロビンの膝の上に乗っかって顔を近づける。
「……持ってますよ。そりゃあ」
ロビンがついに動いた。近寄せてきたネロの顔の後ろに手を回し、そのまま己の胸元へと引き寄せた。
「あんたら二人のどちらも魅力的で迷ってるんですよ。こんだけ一緒にいれば情も沸きますよ」
「……つまり、暗殺者がいなければお主はすんなり余と祝言を挙げていたのか？」
「……可能性は高かったかもしれませんね。正直、彼女が来るまではあんたと一緒になっても良いとは思っていたんでね。まあ、今振り返ればの話ですけど」
「!!?」
一時の沈黙。しかし、ネロの体は物凄く震えている。そして、ロビンの動きは一切分からない。
「……ろ、ロビン」
「何ですかい？」
「これからは、お主の事は名前で呼んで良いか？　例え夫婦になろうとならずとも、お主に少しだけ愛して貰ったという証として、せめて呼び方を変えたい。お主も、ネロっと呼んでくれ」
ロビンに体を預けながらネロは儚げに言った。もはや、皇帝としての面影は一切ない。
「……構わないですよ。それで良いのなら」
「感謝するぞ、余の愛おしいロビン。愛しているからな……」
「……その愛、有難く受け取らせて貰いますよ。あんたといた時間は、凄く楽しかったですよ」
このまま、何もせずに時間は過ぎていった。言葉がいらないというよりは、言葉すらも二人の間に挟みたくないという願いと想いが形になった故だろうか。沈黙こそが、二人の愛の現れだ。

「……皇帝さんと話してた内容は、全部聞いていた。苦しかったけど、嬉しかった」
その後、ロビンはジャック・ザ・リッパーとシミュレーターの中を巡っていた。その手はしっかりと繋がれており、身長差がしっかりあれど傍から見れば夫婦に見える。
「私たちの事もちゃんと愛してくれるって分かったから。例え、結婚できなかったとしてもその事実が私たちの心を温めてくれる。それだけで少し嬉しかった」
「……そうですかい。それは良かった」
ネロの場合と違い、ジャックはシミュレーター内を縦横無尽に歩き回っていた。変化する風景を見ながら、ただ徒然なるままにウロウロする、それだけでも彼女は幸せだった。
「……私たちの出来ることは義賊さんを愛する事と守る事だけ。だけど、それだったら誰にも負けない。私たちはカルデアでの立場も責任もない。だから、全てを投げ出すことが出来るんだよ」
心の中で研ぎ続けた愛のナイフは、もう想い人の心臓の側にまで届いていた。そうでもなければ、彼の口から両名を愛しているといった発言はなかった。
「……それは、嬉しいかもしれないな。誰かの為にをモットーにこのカルデアで過ごしてた俺にとって、命を懸けて守ってくれるという言葉は何よりも心の支えになる。オタクと夫婦になれば、その幸せを噛み締める生活を送れるのかもな」
「そうだよ。権力を持つ人は責任や仕事が多い。そんな苦労がなく『中流としての幸せ』を味わえるのは皇帝さんではなく私たち。元々、ここでは誰もが立場に関わらず最低限以上の生活と設備が保証されてる。だったら、私たちと一緒に静かでゆっくりとした日常が待ってるよ」
握った手は幼いながらも強かった。
「……サーヴァントである以上、ゆっくりとした日常なんて夢のまた夢かと思った。しかし、その夢を叶えるのもありなのかもしれないな」

ロビンの静かな返事。求婚を受けた時のアスクレピオスと感じが似ている。
「愛してるよ。そして、私たちはどんな立場でも貴方を支えると誓うわ。どうせ、私たちはクエストの出番も少ないから、その時間をぜーんぶ義賊さんにあげちゃうね」
「……せめて、結婚しない場合は自分の為に時間を使って欲しい。そうじゃないと、オタクがいつまで経っても自由になれないんだからよ」
チラリと彼女の顔を見る。若干影がかかっていてよく分からないが、並々ならぬ覚悟は感じる。
「……ここに来てお友達は増えたけど、それも義賊さんのお陰。この恩も、愛も、一生をかけて返したいの」
直後、ジャックは暗殺者の身のこなしでロビンを押し倒す。今も昔も、彼女の愛情表現はこれなのだ。
「私たちは、これから義賊さんの事を旦那様って呼びたいの。結婚して、貴方とずっと愛し合っていたい。選んで貰えなかったら諦めるけど、出来れば私たちだけを愛して欲しいの」
ナイフは、今回しまっている。その代わり、顔が既にロビンの首元に埋まっている。
「……ジャック。何か、すまんな。俺のせいでこんなに苦しい面をさせて」
「いいの。この苦しみが大きいほど、私たちの愛が大きいということだから。この先も、例え離れ離れになったとしても心の中に残る大事な苦しみだから」
「……幸せに、なって欲しいんだけどねえ」
そのまま、時間は過ぎていった。子供を寝かしつける父親のように見えたし、昼寝をしている夫婦にも見える。結局、二人の愛の形は外野からは一切分からないのかもしれない。
「……アスクレピオス、どうだい？　ロビンはどっちを選ぶと思う？」

「さあ、僕からは何も言えないな。彼の思い描く『夫婦』において二人の内どちらの方がよいかだからな」
ダ・ヴィンチの問いに、医者はこう答えた。自分の立場を理解しているが故に、深く干渉は出来ない様子だ。
「……一時間後が楽しみですね。これで一区切りがつけばもう裏で情報収集や尻拭いをしなくて済むと考えると本当に本当に」
そして、息子の結婚を喜ぶ母親の如しマシュ・キリエライト。立場がもはやサーヴァントではなく一人の職員のようであった。
「……ジーク」
「……そうだな。とりあえず、俺たちは見守ろう。だけど、願わくば皆笑った結論が良いが」
マイクの右側に胡坐になって構えるジークと、彼の後ろから腕を回して寄り掛かるジャンヌ。確かに、誰もが二人のような幸せを掴んで欲しいものだが、果たして。
「……ロビン、ちゃんと後悔ないようにな」
最後に呟いたアスクレピオス。この言葉こそ結婚の真理ではあるが、いったいどれ程の人物が無事にたどり着けるのか。サンプル数が圧倒的に少ないカルデアでは、検証のしようがないが……
進み始めたトロッコ列車は、止まることを知らない。間もなく訪れる分岐スイッチをどう動かすのか、その線路の先に何があるのか、誰も知らないその夫婦それぞれの未知なる領域である。

重さが増した聞き込み

その後、ロビンフットは自室に籠った。一時間後にここに居るメンバーへ「誰と結婚するか」を公表することになる。勿論「結婚しない」という選択も彼には存在するが、今までの彼の発言を見ているとネロ・クラウディウスかジャック・ザ・リッパーのどちらかとは結婚するようだ。

「……さてと、僕はこの時間の間どうしようか」

トレーニングルームに残っているアスクレピオスは、軽く伸びをして一息ついた。周りには、まだダ・ヴィンチとマシュも残っている。ジークとジャンヌダルク・オルタ（水着）はそのまま食堂へ移動し、ネロ・ジャックの両名は誰にも行き先を消えずにこの場を離れていった。まあ、ロビンの部屋に向かうのは事実上ルール違反になる為そこには行っていない訳だが。

「連絡、とってみるか」

通信機を使って、厨房へ音声を飛ばす。時間帯から考えて、そろそろ夕飯の準備がひと段落する頃だろう。

「アスクレピオスだ。そっちはどうだ？」

『うん、アサシン・パライソは一週間の謹慎になったよ。結局、被害者であるパラケルススが必死に弁護して彼も謹慎することで周りが納得したからね』

互いに離れている数時間の密度が濃かったせいか、若干疲れたように聞こえる夫婦の通話。結婚と同時に、二人のカルデア内での重要度が増したのは一種の「幸せ税」なのかと疑うレベルである。

「とりあえず、こっちはロビンが最後の考察時間に入った。嫁候補の二人は自由行動に入った。多分、相当消耗しているだろうから多少の我儘は受け流さないとな……」

『……静かにしてほしいけどね。その後も大変になる訳だし』

「そうだな。それじゃあ、僕は二人の様子でも探ってくる。そっちも無理しないようにな」

『うん。ありがと』

通信を切って、アスクレピオスはトレーニングルームを後にした。そのまま管制室あたりに向かおうとした矢先のことである。
「相変わらず、医師殿は気苦労が絶えないようだな。それもまた、色恋を納めた男の宿命か」
「……気配を消していた、訳ではないよな。というか、流石に復帰していたのか」
「まあ、あれから時間がかなり経過したからな。中の会話は一切聞こえていないから安心してよいぞ」
トレーニングルーム監督官、佐々木小次郎である。そういえば、ネロがこの部屋で暴走を起こしたときに部屋の外で倒れていた。
「お前も、かなり損な役回りではないのか。急にキャスター宝具を受けてはきつかっただろ？」
「なあに、心配無用だ。最近は出撃機会も減って警戒心が薄まっていただけ、己の油断なのだからな」
「……そうか。ただ単に、お前が回避スキルを使っても無敵貫通の宝具によって無意味になっただけだろ」
「……皆まで言うな。あの幼きアサシンは図書館に向かうと言っていたぞ」
小次郎は、若干気分が落ちた様子。情報と引き換えに会話の終了を提案してきた。
「分かった。それじゃあ、仕事をしますかね」
提案を受理したアスクレピオス、念のため手元にあった回復薬を置いて今度こそトレーニングルームを去った。
「……あんたもお人よしだよね。宝具発動まで時間のかかるキャスターに対して防御態勢を取り、そのまま倒されることで多少なりとも暴走の具合を緩和させるなんて。返り討ちにして残りの処理をマスター達へ投げやりにすることだって出来たはずなのに」
物陰からマルタが顔を出す。いつからか不明だが、恐らく彼にヒールをかけたのだろう。
「下手に思いを封じ込めるのは愚策であるからな。自然の摂理に従うが如く身を委ねたまでの事よ」

「はいはい。ウチの初聖杯サーヴァント様は心の余裕が違いますこと。あんなにボロボロでヒールにかなり時間がかかったのに、それらを完全に水に流すだなんて。昔景虎に頼まれた約束事まだ守っているつもり？」
「……単なる気まぐれという事にしておいてくれまいか」
「はいはい」
こうして、二人は食堂へ向かうのだった。全てを見た上で見て見ぬふりをしたサーヴァントとは、影そのものなのかもしれない。

「アスクレピオスだ。ジャック・ザ・リッパーはいるか？」
「あら、いらっしゃいお医者様。彼女なら奥にいるわ」
本日も、元気な声で出向かえてくれた図書館司書ナーサリーライム。しかし、彼女もまた己の伴侶を求め一喜一憂している身。内心は穏やかではないだろう。
「……近い内に、パラケルススとの面会を設ける。それまでに言いたいことをまとめておいてくれ」
「!?　わ、分かったわ」
軽く言い残すと、彼はそのまま奥へと向かった。具体的な場所については把握していないが、まあ何とかなるだろう。
そう考えていると、意外と近くにその少女はいた。読み漁っているのは、イギリスの歴史書だ。
「……イギリスが君たちを繋ぐ縁だと考えているのか？」
「そうではないけど、少しでも不安を取り除きたいし万が一を考えると少しでもあの人との繋がりを求めちゃう。だから、私たちにとってこの一時間は不安以外のの感情を持てないの……」
「まあ、不安が限界を迎えたらこれを飲むといい。少しは気持ちを落ち着かせられると思うぞ」
「……ありがと。そのお薬に頼らなくていい女にならないとだけど」
大した会話はしていない。しかし、状況把握には十分だ。アスクレピオスは次の仕事の為早々と立ち去る。

「ありがとうな、ナーサリーライム。あと、もしも彼女に万が一があったとしたら連絡を頼む」
「分かったわ。あと、あの人に伝言をお願い。一緒に暮らしませんかって」
「了解した」
　返事も簡潔に。さて、皇帝は何処にいるのか探さなければならない。
「ま、待ってお医者様！　一つ聞いて良いかしら？」
　しかし、彼女は呼び止めた。蚊帳の外では、終わりたくないという強い意志が見える。
「私たちの想いは本物なの。裏切りだろうが、罪悪感だろうが。私たちはあの人のすべてを受け入れるつもりよ。だけど、あの人は私たちを見てくれるのか。視界に入れてくれるのかが不安なの」
「……」
「面会の日を楽しみにしているわ。私たちは、もうあの人しか見えないから」
「……了解した。それじゃあ」
　無理な返事は出来ないアスクレピオスは、そのまま無難な返しをして図書館を立ち去った。
「これは、いろんな意味で厄介な話になりそうだなあ」
　彼のつぶやきは、錬金術師を取り巻く恋愛模様が収束へ向かわないことを示している。いや、むしろ拡散されているのかもしれない。しかし、当面は関われないだろう。調整に入らねばならないのだから。

「……恐らく、この調子だとここにいるのかなあ」
　こうしてアスクレピオスが訪れたのは、とある個室。使っているサーヴァントは、アサシンだ。
「アスクレピオスだ。ネロ・クラウディウスはいるか？」
「……おるぞ」
　返事があった。まあ、予想通りだから驚きはしない。
「様子を見に来た。お前の事だから、万が一の為に備えて最終策の強

行作戦でも練っているのかと思ってな」
「……間違ってはいるが、遠からずだな。入ってこい」
言われたままに、ドアを開ける。そこには、椅子にドッカリと座ったネロと蹲ったアサシン・パライソの姿があった。
「……で、結局君たちはまだカルデアで暴れるつもりなのか？」
正直な話、彼はもはや彼女らに対して相当疲れている。結論はどうであれ、二人が静かに行動を起こしていればここまで面倒な事態には発展していなかったはずなのだ。
「余は、もうそんな気力はない。弓兵と祝言を挙げられなかったら、カルデアの功労者として静かに余生を送るつもりであるからな。その準備についても、今話しておったのだ」
「拙者は、まだ分かりませぬ。あのお方の伴侶になれるのか五里霧中な上に色々と後処理が面倒かと思われますので、その時にどう感じるか次第でしょうか？」
しかし、彼女らも相当に疲れているようだった。まるで、自分たちが作り出した大波が思いもよらぬ方向へ進路を変えてしまったかのように。
「……アサシン・パライソ、一つ聞きたいことがある。お前は、ネロ以外に万が一のための協力者を用意していたのか？」
アスクレピオスは、それでも動かなければならない。ずっと前からこびりついた違和感をぬぐい取る為にも、この行動はネロの目の前で執り行う必要があった。
「……何故、そのような事をお聞きになるのでしょう？」
「まあ、理由は色々ある訳だが一番はあれだな。レイシフトシャッフルの時だ」
彼はゆっくりと説明をする。あまり確証はない様子だが、何か思う節があるようだ。
「あの時、オルレアンで僕が見たのはネロ、ジャック、ロビンの三人でこちらから来た僕と船長で合計５人のはずだった。しかし、帰還の時にダ・ヴィンチは『６人帰す』と言ったんだ。僕がレイシフトする時には詳細な人数は不明だったけど、とりあえずそこに違和感があった

んだ」
「……」
「で、結局あれよあれよと君たちが騒動を起こしたから考える暇がなかったわけだが。僕らが君たちの動き意を予想した瞬間に先手を打たれた訳だし。情報提供してくれる仲間がいたのかなあって思ってね」
「……知ったら、貴方は後悔しますよ」
パライソは、未だにテンションが低い。しかし、何か本質を突かれた為に必死に守りたそうなオーラもする。
「……そっか。じゃあ、あとは本人に軽く事情を聞くとするよ」
これで全てを察したのか、アスクレピオスは踵を返した。
「ネロ、とりあえずロビンから発表があるまで静かにしていれば、その後の話についてもある程度協力しよう。君がカルデアにどれほど貢献したのかは、火を見るよりも明らかなんだからな」
そして、言うべきことを言ってパライソの部屋を後にした。アスクレピオスの仕事は概ね終了である。
「……信じているからな」
そう呟いた時の彼の表情が、ここ最近の中で一番不安定だったという事実を知る者は誰もいないのだった。